

【註】 I. 副文中に、今一つの als (as) があるときは、副文の文頭の als は、denn (= [英] than) となる。

Hannibal konnte als Mann den Römern nicht feindlicher gesinnt sein, denn sie als Knabe schon.

(ハニバルは、成人となつたとき、彼が少年の時に、既に羅馬人を憎んだよりも、もつとひどく敵愾心を持つことは出来なかつた; einem (od. gegen einen) feindlich gesinnt sein = 或人に對して敵意を懷く。)

【註】 II. 比較文章の一種に、主文に於ける或ものの増加又は減少が、副文における或ものの増加又は減少に、正比例又は逆比例して進行することを示す文章——所謂約合文章 (Proportional Satz [M.]) なるものがある。今これを序でに述べると、これらのものは副文の文頭に je + 「比較級」を置き、主文の文頭に desto + 「比較級」または um so + 比較級を置く。但しこれは、主文の文中に存することもある。

Je älter man wird [副], desto (od. um so) bedächtiger wird man. (年を取れば取るほど人は考へ深くなる。)

Du mußt um so vorsichtiger in deiner Lebensweise sein, je weniger du dich einer festen Gesundheit erfreust.

(君は君が堅固な健康をより少く享有すればするほど、君の生活に於て愈用心深くあらねばならぬ。)

又比較級の代りに、増加又は減少をあらはす動詞を用ゆることもある。

Die Schwierigkeiten des Weges wachsen [主文], je näher man dem Gipfel des Berges kommt.

(人が、山の頂に近づけば、近づくほど、道の困難はいよいよ増加する。)

7) 原因を示す weil, da 及び indem.

Weil は自然的の原因 (physischer Grund), 及び行爲上の理由 (moralischer Grund), 又は動機 (Beweggrund [M.]) を示す。

Weil er unmäßig lebt, ist er fast beständig krank.

(彼は不節制に生活するから、彼はほとんど絶えず病氣である。)[實際上の原因]

【註】 かく事実上の原因又は理由をあらはす weil には、主文に daher を置きて呼應させることが出来る。

Die Ernte ist daher schlecht ausgefallen, weil es zu wenig geregnet hat.

(收穫は、雨があんまり少なかつたので、そのためにわるかつた; ausfallen (云々の) 結果を生ずる、云々となる; gut ausfallen = 好結果となる。)

Er kann das tun, weil er Recht dazu hat.

(彼はさうする権利を持つて居るから、さうしてよろしいのだ。)[行爲上の理由]

【註】 此意味に於ては、darum, deswegen, deshalb を主文に入れて、weil と呼應せしめることが出来る。

Darum eben, weil ich den Frieden suche, muß ich fallen.

(私が平和を求めるが故に、まさにその故に私はたほれなければならぬ。)

Er hatte die Dienste des Hofes deshalb verlassen, weil nicht alles nach seinem Sinne ging.

(彼は必ずしもすべてが、彼の考へ通りに行くと云ふわけではなかつたので、その故に、宮廷の奉公をやめたのだつた。)

Da は論理上の理由 (logischer Grund) 及び話者の見解の基礎となる理由的事實を云ひあらはす。

Da er krank ist, so wird er nicht kommen können.
(彼は病氣だから来る事が出来ないであらう。) [論理上の理由]

【注】 Weil er krank war, kam er nicht. と云へば、weil は事実上の原因を指して居る。

Du mußt glücklich sein, da du so fromm und geehrt ist.
(君はかく敬虔で又尊敬されてゐるから、幸福であるにちがひない。) [同]

Da sie dich kennt, hat sie dich leicht entschuldigt.
(彼女が君を知つてゐるので、彼女は君をたやすく宥恕した。) [見解の基礎的理由]

【注】 主文の疑問のとき、da はその理由を示すに用ゐられることが多い。Warum noch länger abgefondert leben, da wir vereinigt reicher werden? (われらは一緒になつて、より金持ちになる以上、なぜ引續いて、分れて生活しなければならぬのか?) 此場合 doch を加へて、疑問に怪訝を意味せしむることがある。Warum fahst du dich nicht besser vor, da du doch die Gefahr kanntest? (君は危険を知つてゐたからには、何故もつとよく準備しなかつたのか?) — Da.....doch にはまた『にも拘らず』の義もある。

Indem は誘因的の事情 (veranlassender Umstand) を示すものであるが、此義から進んで、weil と全く同じ意味に使用される事もある。

Unser Haus war verkürzt worden, indem die andern Häuser sich große Gärten zueigneten. (Goethe)

(他の家々が大きな庭園を撮込んだので、われらの家は切りつめられた; sich [三] etwas zueignen=或ものを横領する。)

【注】 Indem はまた「手段」を示すにも用ゐられる (=dadurch, daß).

Er besiegte sie, indem er Zwietracht unter ihnen erregte.
(彼は彼等の間に不和を起させる事によつて、彼等に打克つた。)

又現在に關しては、nun が da の代りに稀れに使用される。

Was kann dich ängstigen, nun du mich kennst?
(君は僕を知つてゐるのだから、何が君を心配させるのか?)

【注】 I. weil は dieweil, alldieweil などと云ふ長い形でも使はれたが、然し今は行はれない。—又 weil は、weil nun doch 或は weil nun einmal (云々だから、云々である以上=seeing that) とつゞけて使用され、da も da ja, da doch (上掲), da nun einmal (云々だから、云々であるからには=as, seeing that) の形で使用される。

【注】 II. 彙に述べた denn は、da と同じく論理上の理由をあげるもので、事実上の原因を示す weil とはちがつてゐるが、次の場合には、weil の代りに denn を使用しても、理路は通る。

Er kam nicht, denn er war krank.
(彼は病氣であつたから [理由]、來なかつた。)
Er kam nicht, weil er krank war.
(彼は病氣だから [原因]、來なかつた。)

然し Er muß krank sein, weil er nicht kommt. とは云へない。彼の來ないことは、「病氣であるに相違ない」事の原因とはならぬからで、こゝでは weil をやめて、da 又は denn にする。即ち此場合 weil は代用されないのである。

【注】 III. Da 又は denn を接續詞とする複合文章から、これらの接

接続詞を除き、その代りに also, mithin (夫故に)、folglich (従つて、夫故に) 等の副詞的接続詞を入れることによつて、同一意味の複合文章を作ることが出来る。

Es muß sehr kalt sein, denn die Bäume erfrieren.
(樹木が凍るから〔凍るところを以て見ると〕寒いにちがひない。)

Die Bäume erfrieren, also muß es kalt sein.
(樹木が凍る；それだから寒いにちがひない。)

Da er krank ist, wird er nicht kommen können.
(彼は病氣だから、來ることが出来なからう。)

Er ist krank, folglich wird er nicht kommen können.
(彼は病氣だ、従つて彼は來ることが出来なからう。)

8) Daß-Satz について：

Ich weiß, daß er es getan hat.
(私は、彼がそれをしたことを知つてゐる。)

Er sagte, daß er lieber bleibe.
(彼はむしろ止まつてゐたいと云つた。)

Es wäre besser, daß du nach Hause gehst.
(君は歸宅する方がよいでせう。)

Ich glaube, daß ihr Sündel sucht.
(私は、君たちが喧嘩を吹きかけるのだと思ふ。)

上掲の如く、接続詞 daß を以て初まるものを、總稱して Daß の文章 (Daß-Satz) と云ふ。Daß-Satz に於ては、定動詞は文末に來る譯であるが、Daß-Satz 中の或ものは、その daß を除く事が出来る。此場合には、もとの配語法たる貶置法は變じて、正置法となる。かゝる副文章を、假裝副文 (verkappter Nebensatz) と名づける。

Ich weiß, er hat es getan.

Er sagte, er bleibe lieber.
Es wäre besser, du gehst nach Hause.
Ich glaube, ihr sucht Sündel.

【注】 以上四つの文章は、また附結文章の内容が、接続詞を用ゐないでもあらはされ得ることを示す一例となるのであるが、接続詞なき附結文章の形態を示しつつ、實は附結文章の價値を有するものであり、前行文章又は後讀文章のいずれかが、副文たる意味を持つところの他の例を示すと：

Du mußt gleich gehen; es ist spät.
(君はすぐに行かなければならぬ；時はおそい。)

こゝで後讀文章が「行かなければならぬ」譯を示して、weil es spät ist. の義をあらはしてゐる。

Sie kam ihm wie eine Fee vor, sie war so schön.
(彼女は彼には魔女の如く思はれた、彼女はそれほど美しくあつた。)

こゝでは後讀文章を主文にして、前行文章の先頭に daß を附し、daß sie ihm wie eine Fee vorkam. といふ副文にしたものの意味を示して居る。

Man hatte ihm Geld angeboten; er sollte still sein.
(人は彼に金を提供した；彼は黙つてゐなければならなかつた。)

この後讀文章は、金を提供せる目的を示すものであつて、後讀文章は、damit (in order that) er still sein sollte. [目的文章] の義である。

Daß-Satz について注意すべきことを、三四列挙すると、

[A] Daß 文章は、主文に置かれたる deswegen, deshalb, darum, dabon, daher, daran 等の副詞と呼應することによつて、原因を示すことが出来る。

Ich müßte dir **darum** (od. deswegen) zürnen, daß du mich so lange nicht besucht hast.

(君が私をかくも長い間訪問しなかつたので、私は君に對して立腹しないわけには行かない。)

Mein Bruder ist **dabon** krank geworden, daß er unreifes Obst gegessen hat.

(私の兄弟は、未熟の果物を食べたので、病氣になりました。)

Einer stirbt nicht **dabon** (od. daran), daß er einen Tag fastet. (人は一日食べないために死にはしない。)

Der Rückgang seines Geschäftes kommt **daher** (od. **dabon**), daß er während einer schweren Krankheit lange abwesend war. (彼の商賣の不況は、彼が重病中長く不在だったからだ。)

[B] **Daß** 文章は、**daß** だけで；**目的文章** (Absichtssatz [M.]) を率ゐる事が出来る。此時の **daß** は、**auf daß** 又は **damit** (共に従屬用接續詞として用ゐらる) と同義で、『爲めに』 (in order that) と譯す。目的文章に於ては、定動詞を可能法の現在にするのが通則であるが、目下は主文章の時稱が現在である限り、直接法が使用されるやうになりつゝある。

Er trank ein Glas Wein, daß (od. damit) er sich erwärme. [可・現] (彼は暖まるために酒を一盃飲んだ。)

Er soll schnell machen, daß er nicht zu spät kommt. [直・現] (od. komme; 可・現) (彼は遅参せぬやうに急がねばならぬ。)

Ehre Vater und Mutter, (auf) daß dir wohlgehe! (汝幸ならんために、父母を敬へ！)

[註] I. 此 **daß** に對應して、主文に **darum** 又は **dazu** を置く用法もある。

Darum bin ich euch entgegengeehrt, daß ich euch warnen könnte. (私が君たちに警告することが出来るために、そのために私は急いで君たちを迎へに出たのである。)

Habe ich dir **dazu** das Buch gegeben, daß du es zerreiße? (僕は君に、君がそれを引きさくために本を與へたのかね?)

[註] II. 目的文章が、時に主文章を略し、その主文章に屬する他の假裝副文章と結合されて、使はれることがある。かうした文章は、一寸わからないから、注意を要する。

Daß ich es nicht vergesse, [will ich dir sagen,] gestern war dein Bruder bei mir.

(僕が忘れないやうに、君に云はうと思ふのだ、昨日君の兄弟が僕のところへ来たよ；gestern 以下は、Ich will dir sagen と云ふ主文章につく副文章で、daß dein Bruder gestern bei mir war. の義だが、こゝでは假裝副文章で、主文の形を採つてゐる。)

Daß ich es kurz sage, ich will nicht.

これも前文と同様に解釋してよるしい。——序でながら、目的文章の代りに、「um+zu+動詞の不定法」又は「zu+動詞の不定法」が使用されるから、上の二例の如く、目的文章の現はれる場合にも、かゝる省略が行はれる。即ち前文は、

Um es kurz zu sagen, ich will nicht.

となる。又：

Die Wahrheit zu sagen, ich weiß es gar nicht.

に於ても、不定法文章 (不定法を有する文節) の後に、„so sage ich,“ と云ふ主文を入れて考へる。詳しく云へば、『本當を云ふた

めに、私がかう云ふのだ、私は全然それを知らない』の義である。

(C) *Das* 文章はまた、主文の結果 (*Folge* [F.], *Wirkung* [F.]) をあらはす副文を率ゐることがある。これは結果文章 (*Folge-satz* [M.]) と云はれるものであるが、此 *das* に對して主文中に *so*, *solch*, *derart* (それ程に、*so*), *dergestalt* (そのやうに、*so*) などが屢使用される。或は *so* と *das* とが結びついて、接續詞が *sodas* となることもある。

Da zerret an der Glocke Strängen der Aufruhr, daß sie heulend schallt.

(その時反亂が鐘の引綱をひつばつたので、鐘は殷々とひびく。heulend は heulen [吼える] の現在分詞)。

Du sprichst so undeutlich, daß ich dich nicht verstehen kann. (君が不明瞭に話すので、僕は君を理解することが出来ません。)

Er spricht solchen Unsinn, daß man an seinem gesunden Verstand zweifelt.

(彼はあんまり馬鹿馬鹿しい事を云ふので、人々は彼の常識を疑ひます; *der gesunde Verstand*=常識; *an etwas* [三] *zweifeln*=或ものを疑ふ。)

Der Dachdecker fiel vom Dache auf die biegsamen Äste der Linde, so daß er trotz der Höhe seines Sturzes unverletzt am Boden kam.

(屋根葺職人は、菩提樹の曲りやすい枝 [複] の上へ屋根から落ちたので、彼は墜落の高さにも係らず、無事で地上へ達した。)

又、結果と見るよりも、程度と考へた方がよいものもある。

Er spricht so, daß man ihn kaum verstehen kann.

(彼は、人がほとんど彼を、理解することの出来ない程度で、話をする。)

Es war sein Äußeres war derart, daß es Vertrauen einflößte. (既に彼の容貌が、信用を起させるやうなものであつた。)

Niemand ist so schwach und klein, daß er etwas zum Gemeinwohl nicht beitragen könnte.

(何人も、公益に何ものかを貢献することが出来ぬほどに弱く且小さくはない。)

結果文章の一種に比較結果文章 (*der vergleichende Folgesatz*) と稱するものがある。これは比較文章 (*Vergleichungssatz* [M.]) と結果文章との混合したものであつて、副文の文頭には *als* *daß*, 主文中には *zu* (*too*) を入れる。

Er ist zu stolz, als daß er diese Beleidigung verzeihen könnte. (彼はこの侮辱を宥し得るには、あまりに自尊心がある; 彼は自尊心に富んでるから、彼はこの侮辱を宥し得ないの義。)

Die Fixsterne sind zu weit von uns entfernt, als daß wir von ihrer Natur etwas Näheres wissen könnten.

(恒星はわれらから餘りに離れてゐるので、われらはそれらのものの性質に就いて、或詳細な事を知り得ない。)

【註】 I. *als* *daß* を有する文章に、*Konjunktiv* (可能法) が使用されてゐることに注目せよ。—又 *als* *daß* の代りに、同じ意味で、*um* *daß* が使はれることが、稀にはある: *Er ist zu stolz, um daß er diese Beleidigung verzeihen könnte.*

【註】 II. 次の例の如きは、比較結果文章に關せず、本來の比較文章であり、従つて定動詞は、直説法である。

Nichts war natürlicher, als daß Athener vor den Scharen der Perser sich auf die Schiffe zurückzogen. (何事も、アセンヌ人が波斯軍の前で、船の上へ退いた事よりも、もつと自然的ではなかつた:『此退却こそ最も自然であつた』の義)

(D) 純粹の Daß-Satz についての説明は、まづこの位で充分であらうと思ふ。次には序でに、純粹の Daß 文章ではないが、daß の前に、或副詞又は前置詞が来て、恰も一つの接續詞の如くに取扱はれるものを、少しく眺めて見ようと思ふ。

それは kaum daß (云々するや否や、when.....scarcely), ohne daß (云々することなしに; without), nur (od. bloß) daß (只云々丈けが、云々を除けば、もしそうでなければ; only that, except that, if it were not that), anstatt daß (の代りに、instead of), ungeachtet daß (にも拘らず、notwithstanding that), auf daß (ために、in order that [前出]), bis daß (云々まで、until), ehe daß (云々する以前に、before) などであるが、これらは間に Komma を入れないで使用する。これらの文の定動詞の位置が貶置法に依ることは云ふまでもない。

まづ、(I) kaum daß から例示すると:

Kaum daß er diese Worte gesagt hatte, so verschwand er.
(彼が此言葉を云ふや否や、彼の姿は消え失せた。)

【註】 kaum の次ぎの daß を除いて使ふときは、既述のとほり、配語法は倒置となる。Kaum hatte er.....gesagt, so verschwand er.

Kaum daß はかく時をあらはす副文であるが、時の副文章を時間文章 (Temporalsatz, Zeitatz [M.]) と名づける。

次は (II) ohne daß であるが、これはまた daß nicht の形ででも使はれる。

Ohne daß er es will, übersieht der Beurteiler Schönheiten.
(批判者はそれを欲しないで(が)、彼は美點を看過する。)
Einer will den andern übermeistern (=bemeistern), ohne daß er seiner selbst [二格] Meister ist.

(人は自分自身を支配することが出来ないのに、他人を支配しようとする。)

【註】 上掲二例の ohne daß は、云はゞ主文の事件の反對となる事柄をあらはすのであるが、次の如きは、かゝる反對的の意味はない。

Er trat in das Zimmer ein, ohne daß er bemerkt wurde.
(彼は他人に見られる事なくして、室へ入つて行つた。)
Er kehrt nie von einer Reise wieder, ohne daß ihm (=daß ihm nicht) ein Drittel seiner Sachen fehle.
(彼は彼の所有物の三分の一が紛失しないで、旅から歸つて来たことは決してない; いつ旅に出ても、所持の三分の一はなくすの義。)

Ohne daß を以て初まる副文章は、主文の事件に附隨する状態を云ふもので、これを狀況文章 (Modalsatz, Umstandssatz [M.]) と稱する。

【註】 daß nicht (=ohne daß) と nicht daß とを混同してはならぬ。

次には同じく狀況文章中の『制限』を示すところの (III) nur (od. bloß) daß 及び ungeachtet daß 並びに außer daß に就いて云はう。

Unsere Reise ging glücklich vorstatten, nur daß wir unterwegs kein Mittagessen bekamen.

(われらの旅行は都合よく進んだが、たゞ途中で晝飯が得られなかつただけだ。)

【註】 nur daß は直接に屬すべき主文なくして使用されることもある。

Ich seh' es gern, das steht dir frei;
Nur daß die Kunst geübt sei. (Faust, 1434-1435)
(わしはそれが見たい、お前勝手にやるがよい;
たゞ術は面白くあつてほしいのだ。)

Ich stehe mit jenem Dame in keinem Verkehre, außer daß wir bisweilen im Gasthof eine Partie Billard mit einander spielen. (折々ホテルで、玉突きを一勝負一緒にやる外には、私はあの紳士と交際してゐない。)

Ich half ihm, ungeachtet daß ich ihm schon dreimal erfolglos geholfen hatte.

(私は私が既に三度彼に助力して、その甲斐がなかつたのにも拘らず、彼を助けた。)

【註】 ungeachtet だけでも用ゐられることがある。

Der Arme teilte mit seinem Hunde das Brot, ungeachtet er selbst großen Hunger hatte.
(貧しい人は、自分が非常に空腹であつたにも拘らず、パンを犬にわけてやつた。)

この外 bis daß, seit daß, ehe daß 等があるが、これについては特に云ふほどの必要がないし、auf daß (爲めに)については、既に述べたから、次には特に珍らしいものの二三について、少しく説明して、この項を終らうと思ふ。

その一つは (IV) doch daß と云ふ形であるが、これは『然しただ云々と云ふ条件で』 (=but only on condition that) の義で、次の如くに使はれる。

Er soll es hören, doch daß er nicht davon spricht
(彼はそれを聞くがよいが、然し彼がそれを云はぬと云ふ条件に於てのみだ。)

(V) 又 höchstens daß と云ふ形がある。これは『せいぜい、高々、どんなによくとも、……にあらずんば』 (at (the) most, at (the) best, unless) の義である。

Die jungen Mädchen und Frauen gehen bis nach der Geburt des ersten Kindes vollkommen nackt, höchstens daß sie bisweilen eine dünne Schnur um die Hüften tragen. (Gutter)
(若い娘や女房たちは、第一の子供を生んで仕舞うまで、完全に裸體で歩く、せいぜい細紐を折々腰の廻りに纏ふ位なものである。)

最後に擧げるのは、daß の前に置かれるものが、これまでのやうに前置詞や副詞ではなく、一つの短い文章であるが、これに就ても、序でに述べて置かう。それは (VI) es sei denn, daß……又は es wäre denn, daß……の形であるが、これが一つの接續詞のやうに使用される事は、前と同じであるけれど、denn のうしろには Komma をつける人とつけない人とがある。これは『にあらずんば』 (=if not, unless) の義で、兩者の區別は、es wäre dennの方が、假定の意味が強い。逆に云へば es sei dennの方が、より確言的であるといふ丈けが相違である。

Oder wie kann jemand in ein's Starcken Haus gehen und ihm seinen Hausrat raufen, es sei denn, daß er zuvor den Starcken binde und als dann ihm sein Haus beraube?
(Matthäus XII 29)

(または、人まづ強きもの [Der Starcke] を縛り、その後

彼の家を奪ふにあらざれば、いかにして強きものの家に入り、その家財を奪ひ得るか？〔馬太傳、十二の二十九〕

文頭に來た例は、下の如くである。

Es sei denn, daß ich aus Gründen der heiligen Schrift oder mit klaren und hellen Gründen überwiesen werde, sonst kann und will ich nicht widerrufen. [Luther]

(聖書の理由から、或は明白確實な理由から證明されるにあらずんば、余は取消することも出来ず、又取消することを欲しないのである〔ルテル〕；主文の sonst は文頭の es sei denn と呼應する。)

【註】又 es sei denn, daß の daß を除いたのもある。この時は denn のうしろの Komma は存在する。

Ich werde es nicht tun, es sei denn, er bitte (od. bittet) mich darum.

(私は彼がそれを願はなければ、しないであらう。)

10) Wenn-Satz について。

Wenn が時に關して使用される事は、既に述べた。こゝでは假定又は條件を表はすものとしての wenn について述べるのであるが、形態の使用上で、注意すべきことは、wenn 文章が先行するときには、主文が大抵 so を以て初まることと、文頭の wenn が略されるときには、定動詞が文頭に上つて來ることである。

Du machst uns Freude, wenn du Freude hast, und du betrübst uns nur, wenn du sie flichst. [Goethe]

(おんみは、おんみが喜ぶときには、われらを喜ばせる、

そしておんみが喜びを避けるときには、おんみはわれらを悲しましめるのみだ。〔ゲエテ〕

【註】此文章は、二個の複合文章 (附結文章) を、und によつてつゞけたもので、従つて複雑複合文章であるが、この文章に用ゐられた wenn は、既述の『時』をあらはす wenn から、『條件』(Bedingung [B.]) をあらはす wenn への移行行きを示すものであつて、次に掲げるのは、眞に條件を示してゐる。

Wenn ich nicht sinnen oder dichten soll, so ist das Leben mir kein Leben mehr. [Goethe]

(若し私が沈思したり、詩作したりしてはいけないうら、生は私にとつては、最早何等の生でもない。)

Wenn du die andern verstehen willst (od. Willst du die andern verstehen, (so) blick in dein eigenes Herz.

(もし汝が他人を理解しようとするなら、汝自身の心中を眺めよ；blick は blicken の命令法である。)

かく條件を表はす文章を、條件文章 (Bedingungssatz, Konditionalsatz) といふ。これに就て注意すべき事を次に述べる。

[A] Wenn 文章に於て、條件とされる事が、事實に近きもの、或は實際 (wirklich) の事柄として云ひあらはされる場合には、定動詞は直接法であり、事實に遠いもの、或は非事實的 (unwirklich) の事柄として云ひあらはされるときには、定動詞は可能法である。主文の定動詞は、前者に對しては、同じく直接法、後者に對しては、可能法なることが通則である。

Wenn ich Zeit habe, werde ich dich besuchen. [真]

(もし私に時間があるなら、君を訪問ませう。)

Wenn ich Zeit hätte, würde ich dich besuchen (od. besuchte ich dich). [可]

(もし私が時間があるなら、君を訪問するでせうけれど、
[訪問時間の無いことをあらはしてゐる。])

Wenn ich Zeit gehabt hätte, würde ich dich besucht haben (od. hätte ich dich besucht). [可]

(若し私に時間があつたなら、君を訪問したらうのに。[訪問時間のなかつたことをあらはしてゐる。])

【註】可能法の過去は、事現在に關し、可能法と過去完了は、事過去に關することは、いろいろの場合で述べたのであるが、前者を事過去に關するもの、後者を事過去完了に關するものと早合點する風は、依然として邦人學生の間に絶えない。此關係には特に留意してもらいたいのである。—又 würden を用ゐる方は、主文に於てのみ許されることも、記憶して置かねばならぬ。

上掲の例は haben を採る動詞を用ゐたのであるが、次にその例を、sein を採る動詞で示さう。

Wenn er hier wäre, würden wir fröhlich sein (od. wären wir fröhlich).

(もし彼がここに居るなら、われらは愉快だらうのに。
[Aber es ist nicht hier. の義を示してゐる。])

Wenn er da gewesen wäre, hätten wir gesiegt (od. würden wir gesiegt haben).

(若し彼がそこに居たら、われらは勝利を得たらうに。
[Aber er ist nicht da gewesen, und wir haben nicht gesiegt. の義を示して居る。])

【註】I. 条件を示す方の文章には、würden の諸變化形を避けなければならぬ。例へば、Wenn er kommen würde, würde ich ihn

tabeln. (彼が来るなら、私は彼を非難するであらう。) に於ける副文章の würde は間違で、Wenn er käme, としなければならぬ。

【註】II. 条件を示す wenn の代りに、so が使用された例があるけれど、これは古い。又此 wenn の代りに、wo が使用されることもある。

So ihr den Menschen ihr Fehler vergebet (od. Wo ihr den Menschen.....vergebet), so wird euch euer himmlischer Vater auch vergeben. (汝等が人間に對して彼等の過失をゆるすならば、汝等の天なる父は、汝等をゆるすであらう。)

【B】次には、wenn nicht (if not, unless) と云ふ形について述べる。これは反對の条件を述べるものであるが、此場合 nicht は正常の位置を離れて、主語の前又は後ろ、又は代名詞補足語の後に來ることがある。

Großer Reichtum hilft dir nicht, wenn nicht Gott den Segen spricht. (神が祝福を與へなければ、大なる富も汝を益することなし。)

Gute Handlungen haben weder vor Gott noch vor Menschen einen Wert, wenn sie nicht aus reinen Absichten geflossen sind. (善き行爲は、もしそれが純正な目的から流れ出たのでなければ、神の前にも、人間の前にも、價值を持つて居ない。)

Wenn Sie mir nicht sogleich meine Sachen zurückgeben wollen, dann werde ich mich an die Polizei wenden. (もし貴君がすぐに私の品物を返す氣がないなら、私は警察へ訴へるでせう。)

【註】I. 然し正常位置に nicht の存することも、勿論ある。

Wenn man beim Etich der Biene oder des Schicksals nicht stille hält, so reißt der Stachel ab und bleibt zurück.

(膝に刺されたり、運命に刺されたりした場合に、じつとしてゐないと、針が折れて、後に残るものだ。)

【注】 II. wenn nicht の代りに、wo nicht が使用されることがある。

Wo du dich nicht besserst, wirst du noch traurige Erfahrung machen. (もし君が改めないなら、君はまた、悲しい経験をするであらう。)

[C] 次は wenn anders (もし云々と假定すれば、若し夫れ云々ならば、苟も云々であるなら; if at all, if indeed, provided that) であるが、anders の置きどころは、次の例で見れば解る。

Wenn anders es möglich ist, so schreibe mir!

(若しそれが可能であるなら、私に手紙をよこして呉れ!)

Wenn dieser Bund anders wirklich im Himmel geschlossen ist, wird dann Gott seinen Segen dazu geben.

(若し夫れこの盟約が、真に天國で結ばれたとするなら、その時は神がそれに對して彼の祝福を與へるであらう。)

[D] Wenn gleich, wenn schon, wenn auch は、認容文章 (Konjessivsatz [M.], Einräumungssatz [M.]) を導くものである。認容文章とは、『或事は事實だが』(事實の承認) 又は『あることを假りに認容した上でも』(假定の認容) の義をあらはすもので、前二者は往々連記されるが、少くとも、人代名詞が主語なる場合には、二つに分れて、その間に主語を挿む。また主文・副文に於ける承認又は認容にも拘らず、或事の起るのを示すものだから、副文の『云々だが』、『云々でも』の語勢を受くべき副詞 doch 又は dennoch (それでも) を文中に置く。又副文の wenn が略された時には、定動詞がそこへ上つて来る事は勿論である。

【注】 認容文章の内容から見た二つの區別は、下の如くである。

Wenn er schon reich ist, ist er doch nicht glücklich.

(彼は金持ではあるが、それでも彼は幸福ではない。——副文は「事實」)

Wenngleich Karl es mir gesagt hat, glaube ich es nicht.

(カールがそれを僕に云ふたが、僕はそれを信じない。——副文は「事實」)

Wenngleich Karl es sagte, so glaubte ich es doch nicht.

(たとへカールがそれを云ふとも、僕はそれでもそれを信用しない。——副文は「假定」)

Ich komme, wenn es auch schneite.

(たとへ雪が降らうとも私は行く。——副文は「假定」)

かゝる場合の主なる着眼點は、定動詞が直接法であるか、可能法であるかと云ふ點であるが(上例参照; 1. 2. は直接法、3. 4. は可能法である)、前後の事情から考へて見なければならぬ。例へば、Wo der Berg auch liege, と云つても、Wo der Berg auch liegt, と云つても、共に『何處に山があらうとも』と云ふ認容的假定を示して居るのである。

なほ認容文章に後續する主文に於て注意すべきことは、その配語法が屢正置法であることであつて、此方が主文の斷定的な力を、強くすると云はれて居る。

次にこの種の接續詞の用法について、三四の注目すべき用例を挙げよう。

Wenn die Aufgabe auch schwer ist, du mußt doch lösen.

(問題はむづかしくとも、君はそれを解かねばならぬ。)

Sicht ist Licht, wenn's gleich der Blinde nicht sieht.

(盲人がそれを見なくとも、光は光だ。)

【注】 これは補足語 es を文頭に置き、wenngleich を二つに分けて、中

間にこれを挿んだもの；倒置文に於ては、簡單なる副詞又は代名詞は名詞の主語に先行することが出来る。

Wenn schon der Verlust irdischer Güter zu beklagen ist, so ist es doch der geistiger Güter noch mehr.

(地上の財寶の損失は嘆すべきではあるけれど、精神的の財寶のそれは、なほ多く嘆すべきである。)

【註】こゝでは文頭の wenn schon は分けて記されてゐる、かゝる書き方もある。——又 der は der Verlust を代表し、geistiger Güter は複數二格である。

Wenn auch Berge und Täler, Ströme und Meere uns trennen, so werde ich dir dennoch stets ein treues Andenken bewahren. (山と谷、流れと海とが、われらを分けて居ても、それでも私は、おんみに常に變らぬ思出を保存するであらう。)

【註】これも前例と同じく、文頭の wenn auch は分記されて居る。

Ist es gleich Nacht, so leuchtet unser Recht.
(夜であつても、われらの正義はとゞやく。)

【註】これは勿論文頭の wenn を略したため、定動詞がその位置に上つて來た例であつて、gleich は wenngleich の後半である。

Sind auch die alten Bücher nicht zur Hand: sie sind in unsere Herzen eingeschrieben. (Schiller)

(古い本は手元になくても、それらはわれらの心に銘記されてゐる； einschreiben = 書き込む、書き留める。)

【註】I. sind が文頭にあるのは、上の例と同じ譯であるが、此複合文章に於て注意すべきのは、主文が正置法を取つて居る事である。

【註】II. この複合文章に於て、主文と副文との位置をかへると： Die alten Bücher sind in unsere Herzen eingeschrieben: sind sie auch nicht zu Hand. となることを記憶せよ。

【註】III. 後續する主文章が、正置法を採ることは、元來この種の認容文章に於てのみ見らるべきものであるが、時には單なる Wenn 文章の後ろにも發見される。

Wenn du nicht der schönste Kerl wärest, wir hätten es uns nicht so schwere Mühe.....kosten lassen, um dich für des Kaisers Fahne zu wehen. (Riehl) (君がもし最も美しい男でないなら、われわれは君を皇帝の軍旗のために〔皇帝軍への義〕徵募するため、こんなに辛苦はしなかつたらう； sich etwas Mühe kosten lassen = 或事に骨を折る。)

Wir fürchten uns nicht, wenn gleich die Welt unterginge und die Berge ins Meer fielen.

(たとへ世界が減び、山々が海に落込まうとも、われらは恐れない。)

【註】上掲の副文はあ、得ない假定を示すから、可能法の過去を用ゐる。

【E】 Und wenn, selbst wenn, auch wenn 等も同義で使はれる。

Und wenn (od. wenngleich, selbst wenn, auch wenn) Karl es sagte, so glaubte ich es doch nicht.

(たとへカールがそれを云はうと、私はそれを信じないだらう；副文は純然たる假定を示す。)

Und dräut* der Winter noch so sehr mit trotzigem Gebärden, es muß doch Frühling werden.

(いかに冬が反抗的な態度で威嚇しようとも、どうしても春にならなければならぬ。)

【註】und wenn の wenn を略したため、定動詞 dräut が副文末の位置からのぼつて來たもの； dräuen = drohen の詩語； noch so sehr = いかにもひどく。

Und kam' die Hölle selber in die Schranken, mir soll der Mut nicht weichen und wanken.

(たとへ地獄それ自らが試合場にあらはれようとも [敵となつてあらはれようとも]、私の勇氣は退きもせず、たぢろきもしないぞ。)

【註】 I. 主文は mir が先行したから、倒置法となつたもので、かゝる配語法の一例として出したもの。

【註】 II. Obgleich, ob schon, ob auch ((たとへ) 云々でも、...とは云へ、...か) 等の用法は、wenngleich, wenn schon, wenn auch と同一である。只一つの例丈をかゝるに用ゐる。

Ob schon (=Wenn schon) er reich ist, ist er doch unglücklich.
Ob er schon (=Wenn er schon) glücklich.

(彼は金持だが、それでも彼は不幸である。)

[F] Wenn 文章に因んで、最後に述べるのは、wie wenn 又は als wenn (かの如く; as if) である。

これらは、主文章に云はれたる事に、似寄つた事柄を、斷案的ではなく、假設的に述べるもので、従つてその定動詞には、可能法の Imperfektformen (過去又は過去完了等の形を指す) が使用されるのを、通則とするのであるが、云はれたる假設が、事實に近きこと、又は可能性に富めることを示すには、可能法の Präsensformen (現在・現在完了等を指す) を使用し、時には更に進んで、直説法 (Indikativ [W.]) をも使ふのである。かゝる文章を、比較文章 (Vergleichungssatz [W.], Komparativsatz [W.]) と稱する。— また wie wenn, als wenn の wenn を略すると、その後へ定動詞が上つて来る事は云ふまでもない。

【註】 Als ob も全く同義に用ゐられる。

Er sieht aus, wie wenn (=als ob) er krank wäre.
(彼は病氣のやうに見える。)

Er sieht aus, als wenn (=als ob) er krank gewesen wäre.
(彼は病氣にあつたやうに見える。)

【註】 上掲の二例の定動詞は、共に Imperfektformen (1 は過去、2 は過去完了) で云はれてゐるが、これらを Präsensformen に改めて、1. を als ob er krank sei [現] とし、2. を als ob er krank gewesen sei [現・完] とすることが出来る。但し兩者の意味上の差別は、既に述べたとほりである。

Mit sinnendem Haupt saß der Kaiser da, als* dächte er vergangener Zeiten.

(沈思の頭を傾けて、皇帝は座つてゐた、あたかも過ぎにし時を思ふかの如くに。)

【註】 als dächte は als ob er.....dächte に於て、ob を略したもの; dächte は denken の可能法の過去である; そして denken は an 十四格、又は單なる二格を支配する。

Und es wasset und siedet und brauset und zischt, wie wenn Wasser und Feuer sich menget. (Schiller)

(火と水とが交るやうに、波立ち、沸きかへり、泡立ち、しゅうと鳴る。)[シラアの詩から]

【註】 これは詩だから menget としたもので、散文なら mengt である; 序でに云へば、wasset は wasselt, brauset は braust である。

Es ist, als wenn mein Gesicht gefroren ist.
(私の顔は凍つたやうだ。)

【註】 I. これも前掲のものと同じく、直接法 (Indikativ) である。

【註】 II. wie (如く), sowie (如く), などの接續詞を用ゐて、比較をあらはすものも、亦比較文章と云ふが、これは上に wie の部で述べて置いた。

Wenn 文章については、なほ wenn nur (云々さへすれば)、
wenn etwa (od. vielleicht) (万一……ならば) 等を述ぶべきであるが、その用法については大して面倒な事もないから、一二の例をあげて、此項を終らうと思ふ。

Wenn ich nur meine Nadeln hätte,……

(私が私の針さへ持つてゐるなら、……)

Wenn Sie etwa (od. vielleicht) Geld bei sich haben,……

(ひよつとお金を持ち合せておいでになるなら、……)

第 三 節

關 係 文 章

11. 本節では、副文章の一種たる關係文章について述べようと思ふ。關係文章とは、關係代名詞 (relatives Pronomen [R.]) 又は關係副詞 (relatives Adverb [R.]) を以て、主文に連絡するものであるが、それらは次の如くである。

I) 關係代名詞: (a) der, die, das; welcher, welche, welches;
(b) wer, was.

II) 關係副詞: wo, (wohin, worauf 等), da, wie, wenn など。

I) の例: Der Baum dort, der keine Früchte mehr trägt, soll umgehauen werden. (der)

(最早實を結ばぬあそこにある樹は、切り倒されなければならない。)

Er, der von Jugend auf dem Staat gedient (hat), beherrscht ihn jetzt. (der)

(少年時代から國家に仕へて來た彼が、今や國家を統治するのだ。)

Ein Baum, welcher keine Früchte mehr trägt, wird umgehauen. (welcher)

(最早實を結ばぬ樹は切り倒される。)

Wer besitzt, der lerne* verlieren! (wer)

(持つてゐるものは、失ふことを學べ!)

【注】 *lernen が他の不定法と連用されるときには、その不定法に zu をつけても、つけなくてもよい。

Was man gefunden hat, (das) muß zurückgegeben werden. (was) (見つけたものは、返却されなければならぬ。)

II) の例: Er hatte oft in Zeiten getrunken, wo er fleißig gearbeitet hatte. (wo=in welchen)

(彼は勤勉に仕事した時代に於て、屢飲酒した。)

Er denkt mit Freuden der Zeit, da (=in der) er in seinem Arm dich schloß. (da)

(彼は彼が自分の腕に君を抱いた時代を喜んで回想する。)

So sehr war man im Zweifel über die Art, wie (=auf welche) der Krieg geführt werden sollte. (wie)

(戦争の行はるべき方法について、それほど甚しく人々は、疑惑のうちにあつたのである。)

かく關係文章は、主文中の或名詞又は代名詞〔上例 I の 2〕に従屬する副文で、所謂 附加語文章 (Attributivsatz [R.]) の一種である。

【注】 I. 附加語 (Attribut [R.]) の事に就ては、既に述べたが、一個の副文章にして、附加語の價値を持つものを、附加語文章と云ふのである。例へば der fleißige Schüler と云へば、fleißig は

附加語であるが、der Schüler, der fleißig ist (勤勉であるところの生徒) といへば、der fleißig ist は、附加語文章である。

【註】 II. 上掲の本文には、關係文章は主文の(代)名詞に從屬するものと定義して置いたが、これは副文中の或(代)名詞に從屬しても、勿論よろしいのである。例へば:

Die meisten Menschen bleiben immer den Kindern gleich, die sich vor unzähligen Dingen fürchten, die gar nicht gefährlich sind, und dagegen in wirklichen Gefahren ahnungslos scherzen und schlummern.

(大抵の人間は、全然危険ならざる無数の事物に対して恐怖し、眞の危険に於ては、之に反して、感付かないで、笑談を云つたり、徹睡したりするところの小兒に、常に似てゐるものである。)

と云ふ複雑複合文章に於ては、第一の副文(これを第一次副文と稱す)は、den Kindern に關するもので、die から fürchten まで續いて、一旦中絶し、再び und で初まつて、文末まで繼續するのであるが、第二の副文章(第二次副文)は Dingen にかかるところの die から初まつて sind まで續いて居る。これらの構造の詳細について複雑複合文章の段で説かう。

12. 次には關係文章(Ver, Was を除く)の概則について述べ、それから進んで、各々の關係代名詞又は關係副詞の用法を説く筈である。

i) 主文と副文との間に存すべき Komma は、關係文章の場合にも、勿論存在しなければならぬ。

ii) 關係代名詞の性と數とは先行する(代)名詞によつて定まるけれど、格は關係文章内部の關係によつて定まるのである。

Dies ist die Feder, die ich zum Schreiben benutze.

(これは私が書くために使用するペンである。)

【註】 die の數は單數で、性は女性であることは、云ふまでもない。これは先行詞 die Feder によつて、きまつてゐるが、格は副文内部の關係——即ち主語 ich に対して、四格の補足語として立つと云ふ關係——で定まるのである。

Der Schüler, dem ich gestern ein Buch gegeben habe, ist sehr fleißig. (私が昨日書物を與へた生徒は、甚勤勉である。)

【註】 dem の男性單數といふ事は、der Schüler によつて定められたのであるが、格は geben の三格補足語たることによつて定まるのである。

iii) 副文中に於て關係代名詞に先行し得るものは、前置詞のみである。

Die Kinder, mit denen Sie spielen, sind meine Söhne.

(貴君がそれと遊んでゐる小兒らは私の息子達です。)

【註】 これには稀れに例外がある。例へば:

Die Statistik, auf Grund deren Prof. Lorenzi sein Werk aufbaute, erstreckte sich auf 419 Häuser.

(ロレンツィ教授が、それに基づいて彼の作をつくり上げたところの統計は、四百十七軒に及んでゐた。)

かゝる英語風の語法は、勿論一般的ではないが、此際 auf Grund を一個の前置詞と見做すなら、解釋は容易である。従つて deren は Statistik をうけることは云ふまでもない。かゝる用法は、たとへば Schopenhauer などに於て、往々發見される。

iv) 關係文章は、その所屬を明かにするため、出來得るだ

け、先行詞に接近せしめなければならぬ。例へば下の二文の意味上の相違を見よ。

Ich traf heute den berühmten Sänger N. N. beim Redakteur der „Neuen Freien Presse,“ den ich noch nicht kannte. (私は今日、これまで未知であつたところの新自由新聞の主筆のところ、有名な歌唱者何某に會つた。)

【註】 Redakteur は Redaktör と讀み、佛蘭西語より來れるもの、主筆、編輯者の意味；又 N. N. はラテン語の nomen nescio [Den Namen weiß ich nicht] の略で、『何某』の義。

Ich traf heute den berühmten Sänger N. N., den ich noch nicht kannte, beim Redakteur der „Neuen Freien Presse.“ (私は今日、まだ知らなかつたところの有名な歌唱者何某に、新自由新聞の主筆のところ、會ひました。)

かゝる意味上の相違を起さない場合でも、關係文章は先行詞の直後につくのが原則であるが、關係文章の挿入のために、主文章が中斷され、しかも關係文章の次ぎに來る主文の殘部が、關係文章に先立つ主文の部分と、あまりに不權衡であるか、或はあまりに短かいときには、意味の不明瞭となる虞れなき限り、關係文章を主文に後續させてよろしい。

例へば：

Für ein neugeborenes Kind wird ein Kindermädchen, das gesund und heiter ist, gesucht.

(新らしく生れた子供のために、健康で快活な保母がさがされる。)

に於ては、關係文章が主文の gesucht 丈け一つを残して、これ

を中斷してゐるが、これは醜い； gesucht を前にやつても、少しも誤解のおそれがないから、

Für ein neugeborenes Kind wird ein Kindermädchen gesucht, das gesund und heiter ist.

とする。また：—

Nicht an die Güter hänge dein Herz, die das Leben vergänglich zieren! (Schiller)

(人生を一時的に飾る財貨に汝の心を懸けるな！)

に於ては、die 以下の關係文章は、die Güter に關することが明瞭であるし、主文と副文との權衡がとれて、形式の美しさが示されてゐるから結構であるが、少し改めて、

Nicht auf die Güter richte deine Bestrebungen, die das Leben vergänglich zieren.

(『人生を一時的に飾る財貨に、汝の努力をむける勿れ』のつもり。)

は不可である。これは話者の本意に背いて、die 以下の關係文章が、Bestrebungen に從屬すと解釋されるからである。上記邦譯のやうな意味を示すには、

Richte deine Bestrebungen nicht auf die Güter, die das Leben vergänglich zieren.

としなければならぬ。

v) 同一の名詞に、いくつかの關係文章が屬するとき、關係代名詞の格が同一なるときは、初めのもののみ存し、他は略するのが普通であるが、二格のときは、— これを繰返へすのが通則である。

Ich sandte ihm einen Mann, der in die Sache eingeweiht war, [der: 略] die Gegend genau kannte und [der: 略] sich bei einer früheren Gelegenheit zuverlässig gezeigt hatte.
 (私は事件に精通し、地方を熟知し、以前の或機会に、自らの信頼すべき事を示した人物を送つてやつた。)

【註】 然しながら、修辭的効果を得ようとするときには、わざわざ、同格の關係代名詞を繰返へす。

Ein Band, das alle Menschen umfaßt, das die Fremdesten einander nähert, das Nationen mit einander einigt und zuletzt den ganzen Erdkreis umschlingt, ist die Macht der Rede. [Reinhard]

(凡ての人間を包括し、最も縁遠いものをも互に近づけ、諸々の國民を互に同一させ、而して最後に全地球をまきつける羅網[ほだし]は、演説の力である。)

次に、二格の反覆される例を示すと：

Über einem romantischen Volke war eine Religion angemessen, deren prächtiger Pomp die Sinne gefangen nimmt, deren geheimnisvolle Rätsel der Phantasie einen unendlichen Raum eröffnen, deren vornehmste Lehren sich durch malerische Formen in die Seele einschmeicheln.

(ロマンティックな民族には、そのきらびやかな華やかさが、感覺を捉へ、その秘密に充ちた謎が、幻想に無限の活動地を開き、その最氣高い教義が、繪畫的の形式に於て、魂に取り入るやうな宗教が、似つかはしい。)

【註】 angemessen sein (似つかはしい) は三格の補足語を採る： gemä-

gen nehmen = 捕へる、引付ける、送はす； der Phantasie は三格； sich einschmeicheln 取り入る。

vi) 同一名詞に、いくつかの關係文章が屬し、關係代名詞の格が、各異なるときは、常に關係代名詞を略さないのが本則である。

Das Schloß war schon mit mehreren Unglücklichen belegt, denen [複・三] man nicht helfen, die [複・四] man nicht erquicken kann.

(城は既に、人が助けることも出来ず、又元氣づけてやることも出来ない、あまたの不幸な人たちで、一ぱいであつた。)

【註】 I. mit etwas belegt sein = 或もので覆はれてゐる、或ものに占められてゐる。——文末の kann の前の副文章の helfen にもかゝる；云ひ換へれば、helfen kann の kann を、重複を避けて略したもの。

【註】 II. 格の異なる關係代名詞は、反覆すべき規則があるにも拘らず、一格と四格との形を同じくする關係代名詞にあつては、この反覆が上述の格に於て、屢省略される。例へば、dieses Anerbieten, das ich für kein leeres Kompliment halten durfte und das für mich höchst reizend war. (私がそれを空世辭と考へてはならず、又それは私にとっては非常に魅惑的であつたところの此申し出) と云ふ語法は正確で、第一の關係代名詞 das は四格であり、第二のそれは一格であるから、後者は省略し得ざるものであるのに、Goethe すら、第二を略して、dieses Anerbieten, das..... durfte und für mich höchst reizend war, として居る。これは關係代名詞 was に於てもよく見られる。Ich muß zu dem übergehen, was hiermit zusammenhängt und was ich dir vorgelegen habe. (私は、これと關聯し、またそれを私が君に聞いて

もらはなければならぬところの事柄にうつつて行かなければならない; einem vorlegen=或人に提示する、或人の意見を求める)は正當で、第一の was は一格、第二の was は四格だから、後者を略し得べき筈はないのに、Gottfried Keller の如き作家すら、後者を省いて、.....und ich dir vorzulegen habe. として居る。しかし此弊は段々矯正されて来た相である。

【註】 III. 第二の關係文章の關係詞を、上記の如く簡短に省略しては、意味をなさざるときにも、なほ且つ關係詞を避けて、人代名詞、物主代名詞又は指示代名詞等を用ゐる風が、折々發見される。たとへば、Die Elemente sind als kolossale Gegner zu betrachten, mit denen wir ewig zu kämpfen haben, und die wir nur durch die höchste Kraft des Geistes bewältigen. (四大は、われらが永久にそれと戦はねばならず、又われらは精神の最高の力によりてのみ、それを征服するところの巨大なる敵手と見做さるべきである。)と云ふ文章は正しいが、mit denen wir と正則に、關係代名詞を繰し返へす代りに、前の wir を用ゐて、mit denen の代りに、sie を使用し、und sie nur die höchste Kraft des Geistes bewältigen. とする (Goethe) が如きである。又 Sprüche, die der Wandermann verweilend lieft(,) und deren Sinn er bewundert. (遍歴者が低回しつつそれを讀んで、その意味を彼が嘆賞するところの金言) は、正しい語格であるが、Schiller は und ihren Sinn bewundert と短かく書いてある。これらは正しい用法ではないが、他の人々にも折々發見されるのである。

vii) (I) 多くの關係文章が、同一の先行詞に關係するときには、關係代名詞は同一種類のもの (例へば、der 系統なら、それだけ) を使用し、(II) 然らざるときは、他の種類のものと同様使用し (例へば一方には der 系統のものを、他方には welcher 系統のものを使用して、意味の明瞭になるやうにする。(III) 但

し兩方を混用しても、意味の通ずる場合には、混用しても差支へはない。

(I) Der Mann, der sich deinen Freund nennt, den du vor andern hoch schätze, dem du bisher dein ganzes Vertrauen geschenkt hast—sollte er dich verraten!

自ら君の友人だと稱し、君がそれを他の人々よりも尊重し、これまで君が君の全信頼を與へたところの人が — その人が君を裏切るのだらうか!

(II) Wehe denen, die sich zum Schaden anderer der Gewalt bedienen, welche sie besitzen!

(他の人々を害するために、自らの所有する暴力を使用するものどもは、禍なるかな!)

Er verfiel in einen trüben, ungesunden Zustand, aus dem er durch einen Brief geriffen wurde, welcher ihm zeigt, daß in seinem Dasein noch größere Lücken entstehen konnten. (彼は陰鬱な不健康な状態に陥つた、この状態から彼は一本の手紙によつて引き曳り出された、その手紙は彼に、彼の生活に於て、もつと大きな缺陷〔破れ目〕が生じ得るのであつたと云ふことを知らせてゐる。)

(III) Vielmehr habe ich die Welt aus dem Bekanntesten erklärt, das es gibt, und welches uns auf eine andere Art bekannt ist, als alles Ubrige.

(寧ろ私は世界を、この世にある最も知れたもの、又すべての他のものとはちがつた方法でわれらに知られてゐるところの最も知れたものから説明した。)

【註】 (III) の如く、關係代名詞の交互的に變化することを、修辭上特殊の効果あるものと考へ、故意にさうする人もある。しかしこれに倣ふ必要はない。

Das unendliche Werden, welches man Weltentwicklung nennt, welches freilich ein wenig interessanter und reicher als dieses Buch ist, das aber auch nicht, wie dieses Buch, in drei Teilen zu einem befriedigenden Abschluß kommen muß. [Raabe]

(世界の展開と呼ばれ、この本よりは確かに面白く且つ豊富ではあるが、それは然し此本のやうに、三部で、満足させる結末に到着してはならぬところのあの無限の變遷は……; 上文の welches も das も Werden にかかろ。)

viii) 關係代名詞の二格の後に、名詞又は代名詞が續く事が出来るけれど、此際は名詞は、常にその冠詞を失ふのである。

Das Gebäude, dessen Fenster jetzt geschlossen sind, ist unsere Schule. (今その窓が閉まつてゐるところの建物は、われらの學校である; The building the window of which are shut now is our school.)

【註】 dessen Fenster と the window of which との語法上の相違に注意せよ; 獨逸では das Gebäude, die Fenster dessen とすることはない。又冠詞の有無にも着眼せよ。

Die kleinen Mädchen, deren Vormund ich bin, sind die Töchter eines Landsmannes von mir.

(それらのものの後見人であるところの小さい娘たちは、私の同國人の娘です; The little girls, whose guardian I am, are the daughters of a fellow-country man of mine.)

【註】 Landsmann と Landmann とを區別せよ。後者は「地方人」又は農民の義。その複数は、共に基礎詞 -mann を、-leute とする。

Seldenlieder, bei deren jedem sich eine reine Märchengestalt hinter einem geschichtlichen Namen verbirgt.....[Wundt] (それらの各々には或純然たる童話的の人物が、歴史上の名前のもとにかくれてゐるところの英雄詩は.....)

【註】 bei deren jedem は、in every one of which と英譯さるべきもので、deren は複數二格の關係代名詞、jedem は jedes の二格; jedes は Lieder の單數なる das Lied の性によるもの; jedem が三格であるのは、bei の支配を受けるからである。

ix) 關係文章は、附加語文章の一種であつて、附加語(特に形容詞の附加語)を代表するものであるから、事物又は人物の性質(Eigenschaft [S.])をあらはし得るだけで、物語の進展(Fortschritt [M.])を云ひあらはしてはならない。即ち:

Er öffnete die Tür, die er hinter sich zuschlug.
(彼は戸をあけて、またそれを自分の後ろに閉めた; 「戸をあけて入り、入つてからそれを自己の背後に於て閉めた」こと。)

と云ふ文章は、戸を開けて入り、次に閉すと云ふ物語の進展を示すから、此文は間違ひで、

Er öffnete die Tür und schlug sie hinter sich zu.

となるべきであり、

Er bat um ein neues Buch, das er auch erhielt.
(彼は一冊の新らしい本を乞ふた、それを彼はまたもらつた。)

も、勿論間違ひで、

Er bat um ein neues Buch und erhielt das auch.

となすべきである。

【註】 以上 (vii) は Menfing 氏が Deutsches Hilfsbuch の第二部 Sprachlehre に於て説いて居るのを、そのまゝに借用したものであるが、實際は、此規則とはちがつた用法が、可成多く行はれてゐるやうである。

13. 此項では、關係代名詞の各個について、その用法を調べて見ようと思ふ。

〔A〕 Der の用ひられなければならぬ場合。

1) 關係代名詞の二格が、名詞又は代名詞を後續させるときには、der 系統のものを使用する。

Die Nachtigall, deren Gesang wir so oft hörten, ist davon geflogen. (その歌をわれらがあんなに屢聞いたところの鶯は飛び去つた。)

Das Haus in der Wilhelmstraße, dessen Besitzer ich kenne, ist feil. (その所有者を私が知つてゐるところのブルヘルム街の家は賣り物だ。)

【註】 I. 但し welcher 系統のもの二格は、女性及複數に於て、前置詞あるときにのみ使用せらる。

Die alte Mauer, innerhalb welcher (= innerhalb deren) jetzt nur ein Teil der Stadt liegt, wird bald abgebrochen werden. (その内部に今では市の一部分のみが存するところの古い城壁は、間もなく破壊されるであらう。)

Galilei hatte sich schon einer ähnlichen Wendung bedient in den Dialogen, wegen welcher er von den Jesuiten so heftig verfolgt wurde. [Goethe]

(ガリレーイは既に、問答に於て、——この(問答の) ために彼

はイエズイット教徒から迫害されたのであつたが、——これに似た語法を使用した〔ゲエテ〕；問答とはガリレーイの有名な著書『世界系統問答』及『新科學問答』の事であらう。)

なほ welcher 系統のもの二格の全然特殊な用法については、welcher の條に述べよう。

【註】 II. 二格 dessen が約められて des となり、deren が約められて der となる事もあるが、われらはその眞似をしてはいけない。

Wo bist du, Faust, des (= dessen) Stimme mir erflang?
(その聲が私にひびいたところの汝は、ファウストよ、いづれにありや?)

Die Frau, der (= deren) er so liebevoll gedachte.....
(彼がかく愛に充ちて思ひ出した(述べた)戀人は、.....gedenken は二格を要求する。)

2) 疑問代名詞・人代名詞・指示代名詞・不定代名詞及び呼び懸けの名詞に従屬する關係文章には、der 系統のものを使用する。

Er, der nur gewohnt ist zu befehlen und zu tun, kennt nicht die Kunst, von weitem ein Gespräch nach seiner Absicht langsam fein zu lenken. [Goethe, Iphigenie] [人代名詞]
(命令してそして實行するにのみ慣れてゐる彼は、遠くから話をゆつくりと上品に彼の目的の方へ導いて來る術を、知らないのである。)

Unser Vater, der im Himmel ist! [呼懸け]

(天にましますわれらの父よ!)

Ist jemand unter euch, der es beweisen kann? [不定代名詞]
(それを証明し得る何人かが、汝等の間にありや?)

Jeder, der ihn kennt, wird es nicht glauben. [不定代名詞]
(彼を知れる人はいづれもそれを信じないであらう。)

Wer, der es nicht mit Augen gesehen hat, vermag sich dies

geheimnisvolle Gebiet auch nur vorzustellen? [疑問代名詞] (それを目撃しなかつた人は、此秘密多き領域を想像することすら出来るだらうか?; auch nur たゞ云々丈けでも。)

In den spiritistischen Klubfungen treiben sich immer welche herum, die da im Trüben fischen. [Blüthgen]

(降神術のクラブの會合には、いつもそこでどさくさまぎれに儲けようといふ人たちが徘徊する; welche はこゝでは不定代名詞として、用ゐられて居る。)

【註】 Spiritist と Spiritualist とを混同してはいけぬ。前者は降神術者で、後者は唯心論者である; sich herumtreiben=うろつく; welche=einige; im Trüben fischen=混亂にまぎれて儲けようと狙ふ。

自稱・對稱の代名詞の後に於て、關係代名詞(上述によつて勿論 der) が來り、しかもそれが一格であるときは、人(稱)代名詞の一格を、關係代名詞の直後に於て、繰返へすことがある。その際には定動詞は、此人代名詞に據る。但し反覆せねばならぬといふのでは勿論ない。

Ich, der ich dir einmal geholfen habe,.....

(嘗つて君を助けたところの私は) [反覆]

Ich, der dir einmal geholfen hat [不反覆]

Du, die du alle Wunden heilest, [Schiller]

(凡ての傷を醫するところのおんみは) [反覆]

【註】 ich 又は du と云はれるものの性によつて、關係代名詞のちがふのは勿論である。こゝで du, die du と云はれるものは Freundschaf (友誼) [8.] である。

Wie verachte ich euch, die ihr euch selbst u. d. die Welt belügt [Schiller]

(私は、おんみら自身及び世間をだますところのおんみらを、如何ばかり輕蔑するであらうか!) [反覆]

Ich bitte Sie, der Sie mir früher geholfen haben, auch jetzt um Ihren gütigen Beistand.

(私は以前に私を助けたところの貴君に、今度もまた貴君の親切な援助をおねがひします。)[反覆]

【註】 I. 人代名詞をうける場合に、der ではなくて、welcher であることが、稀れになきにしてもならずであるが、この眞假はしないがよるしい。

Du, welcher der Welt die Komödien des Plautus wiedergegeben hast.

(世界にブラウツッスの喜劇を再び興へたところのおんみは)

これは Konrad Ferdinand Meyer と云ふ高名な瑞西の詩人の文である。

【註】 II. 呼懸けの名詞に關係する關係代名詞の後でも、人代名詞が反覆されることがある。

Unser Vater, der du im Himmel bist!

(天にましますわれらの父よ!)

【註】 III. 關係代名詞の後に於ける人代名詞の反覆は、他稱に於ては、しないのが原則であるが、稀れにはその例もある。しかし模倣する必要はない。

Er wundert sich, wie sie, die sie es selbst gesehen habe, das zweifeln könne.

(彼はそれを自分で見たところの彼女が、どうしてそれを疑ひ得るのかと訝かる。)

3) 主語又は客語 es に關係する關係文章には、der を使用

するを通則とし、その性と數とは、前者に於ては客語名詞、後者に於ては主語(代)名詞によつて定まる。

Der Mut ist es, der den Ritter ehrt.
(勇氣は騎士を名譽づける所以のものだ。)

【註】これは、Der Mut ehrt den Ritter. といふ文章の客語部分を強調せんがために、言ひ換へたものである。關係代名詞の der は、主語 der Mut に依つて居る。

Die je Hoffnung ist es, die ihn aufrecht (er)hält.
(この期待は、彼の勇氣を保持する所以のものである。)

【註】これは、Diese Hoffnung (er)hält ihn aufrecht. の言ひ換へである。——關係代名詞 die は、die Hoffnung に依る。

Es ist mein Kind, das im nächsten Zimmer schläft.
(次の部屋に眠つてゐるのは、僕の子供だ。)

【註】『それは次の部屋に眠つてゐる僕の子供だ。』と誤解してはいけない。即ち das 以下は主語 es にかゝるのである。但し關係代名詞の性は、das Kind に依つてゐる。

Ich bin es, der seine Eltern verloren hat.
(兩親をなくしたのは僕だ。)

【註】『私は兩親を失つたものだ』と誤解してはいけない。この文章は、すぐ前の例とは、形はちがふけれど、意味は同一である。ただ獨逸では、英語のやうに It is I. とは云はず、必ず Ich bin es. と云はねばならぬから、上の如き形になつたもので、es は客語の位置には居るけれど、實は主語である。これは英語に云ひ換へれば、すぐにわかる事で、英では、It is I who has lost his parents. と云ふべきところである。——又關係代名詞の der は ich と稱する人物の性に依つたもので、若し ich と名のつて居る人

が女性なら、Ich bin es, die ihre Eltern verloren hat. となるのである。

この場合 der の代りに welcher の用ゐられることも、ない事はないが、この眞似はしなくてよい。

Er ist es nicht, der das Tintenfaß zerbrochen hat; es ist Johanna, welche es zerbrach.
(インキ壺を毀したのは、彼ではない; それを毀したのは、ヨハナ〔女名〕だ。)

〔B〕 Welcher の用ひられる場合。

1) 關係代名詞が、主文中の或名詞に對する同格名詞に關係するときには、der も welcher も使用されるけれど、此關係代名詞が同格名詞を取つて來て、自らの後に置くときには、關係代名詞は welcher でなければならぬ。

此定義は、少しく面倒くさいから、これを例示すると、今: Dichter und Maler haben sich immer nach Italien geseht. (詩人や畫家たちはいつも伊太利にあくがれて來た。) と云ふ主文章の Italien に同格名詞 einem Lande を置き、之に關係文章を後續させるときには、welcher 系統でも der 系統でもよろしいのであつて、例へば einem Lande, in dem (od. in welchem) die Künfte schon in frühen Jahrhunderten gepflegt wurden (國、そこでは文藝が、既に早い世紀に於て涵養されたる國) と續けて行く。然し此際屢々關係代名詞が飛び出して行つて、同格名詞をつかまへて來て、自分に後續させる事がある。この時には、關係代名詞には welcher 系統のものが使用されるといふ事である。即ち、...nach Italien geseht, in welchem Lande die Künfte schon in frühen Jahrhunderten gepflegt wurden. (その國に於ては文藝が.....) となる。こゝでは關係代名詞 welchem は全く Land に

對して、形容詞的に使用されて居るのである。だから文法書には、『關係代名詞が形容詞的に名詞の前に置かれる時は』とか、『名詞が關係代名詞に後續する時は』とか書いてあるが、これは簡明を貴んで、却つて不明に陥つもので、かう云へば他の用法(例へば、das Gebäude, dessen [關・代] Fenster などと混同する處もあらうから、上の如く定義した譯である。

Er bot mir freundlich „guten Morgen“, welchen Gruß ich ebenso freundlich erwiderte.

(彼は私に愛想よく『お早う』と申し出ました、その挨拶に、私も同様に愛想よく答へました。)

【註】これは、Er bot mir freundlich „guten Morgen“, einen Gruß, welchen (od. den) ich.....erwiderte. から来たものであるが、この方 (einen Gruß, welchen.....) がよろしいと、文法學者 E. Wegel 教授は云つてゐる。

Er spricht oft von Sparsamkeit, welcher Tugend er sich nicht rühmen kann.

(彼は屢節儉と云ふ事について話すが、その徳を彼は自ら誇ることは出来ないのだ。)

【註】これは、von Sparsamkeit, einer Tugend, welcher (od. der) er sich nicht rühmen kann. の約めで、welcher (od. der) は二格; sich rühmen は二格の補足語を要求する; einer Tugend の einer は Sparsamkeit の同格名詞だから、勿論三格である。

Denke an Goethe, welches Dichters Werke dir oft empfohlen wurden!

(ゲエテの事を思へ、この詩人の作は屢君に推薦されたのであるが!)

【註】これは、Denke an Goethe, den Dichter, dessen Werke dir oft empfohlen wurden. の約めであるが、この場合は必ず welcher の二格なる welches を使用する。又 Dichters の形にも注目せよ。二格の形は複雑だから、更に一例をあげる。

Miltiades kam von Thracien, welches Landes König er gewesen war, nach Athen.

(ミルテ、アーデスはトラキアから——その國の王で彼はあつたが——アテンへ來た。)

【註】I. これは、Miltiades kam von T., dem Lande dessen König er gewesen war, nach Athen. の約めである。

【註】II. Welcher の二格は、普通の文法書には、之を缺くやうに書いてあるが、それは上記の二例及び前掲のやうに、前置詞を探る時の外は、使用されないからである。

2) 關係代名詞 der に、指示代名詞 der が先行し、關係代名詞のうしろには、定冠詞 der があるときには、關係代名詞を welcher とする。但しこれは絶對的ではない。

Die, die (welche に改む) die Beute davon abschöpfen,..... (分捕品を引曳つて去つたものどもは)

Die, die (welche に改む) die Götter Griechenlands verehren,..... (希臘の神々を尊崇する人たちは、.....)

【註】I. 但し同音の重複を厭はぬ人もある。例へば、作者 Fontane は、die, die die langen Beine haben (長い脚を有せる人々) などと平氣で使用してゐる。

【註】II. 本文所載のものよりも、一步を進めて關係代名詞と、次に來る定冠詞とが、同一音の時には、關係代名詞を welcher とすべしと説く人がある。

Nikolaus, der (welcher に改む) der Vater des Andreas gewesen war,.....

(アンドレアの父であつたところのニコラウス、.....)

Auf er Weise, durch die (wie 1ste に改む) die Straß führt(それを通じて往來の通つてゐる草原の上で、.....)

然しこれは耳に聽えて不快であるのではなく、たゞ紙上で見て、不快に思はれるだけだから、改める必要はないと Wustmann は説いてゐる。その方が正しからう (Aller. and Sprachdummheiten 115—116).

【注】 III. 尤も上掲の如き反覆のあまりにひどい事は、勿論避くべきで、Heinrich Seidel (現代作家) は、次のやうな公開揭示文をあげて、注意を求めてゐる。

Die, die die, die die Anlage beschädigen, zur Anzeige bringen, erhalten fünf Taler Belohnung.

(遊園地を毀損するものを告知せる人々は、五ターレルの報酬を受くべし。)

第一の die は指示代名詞、第二の die は關係代名詞、第三のそれは指示代名詞、第四のは關係代名詞、第五は冠詞である。

3) 古くは中性單數の welches が、事物の性と數とに關係なく、これを受け得ること、指示代名詞 das の如くで、しかもそれが關係代名詞として使用されたことがある。

Bonifacius, welches (今なら der) der Apostel von Deutschland werden sollte.....

(獨逸の僧正となる筈であつたところのボニファチウスは、.....)

Ich kenne den Bruder und die Schwester, welches beides

(より普通には、welche beide 又は die beide) sehr achtungswerte Personen sind.

(私は兄も妹も知つてゐる、その二人とも甚尊敬する値ある人物である。)

【注】 Welch には別に welcher ersterer 又は welcher letztere; その前の方のもの、前者; the former of which), welcher letzterer 又は welcher letztere; その後の方のもの、後者; the latter of which) と云ふ形がある。ある文法家は、これを嫌忌してゐるが、矢張今でも行はれてゐる。

Das Bild stellt Johannes den Täufer und den Christusknaben dar, welcher letzterer von dem Täufer in die Welt eingeführt wird.

(その畫は洗者ヨハネと童兒クリストとを描いてゐる。その後者は洗者によつて世の中に送り込まれたのである; das Christuskind, 小兒[時代の]クリスト, der Christusknabe 童兒[時代の]クリスト。)

(C) Wer の用法。

1) Wer の用ゐ方についての一般概念は、それが不定の單數又は複數の人を示し、性に關係なくして用ゐられる事である。Wer は不定的・一般的に人を指すが故に、先行名詞を採ることはない。但し主文の先頭に der を置いて、wer を受けることはある。

Wer besitzt, der lerne verlieren!

(所有するものは、失ふことを學べ!)

【注】 I. 先行名詞を採らぬと云ふことは、邦人學生の特に留意すべきことで、wer は英語の who であるから、the man who の形を直譯して、er Mann, wer となすやうな誤りが屢繰返へされることは、度々述べた事柄である。

【註】 II. 只一つ記憶すべきことは、wer の先行詞として、や、舊くは、der, jeder, niemand 等が使用されたことである。然しこれは今は行はれない。

Glücklich der, wer Liebe rein genießt. (Goeth)

(愛を純粹に享樂する人は、至福である。)

Jeder, wer ohne Leidenschaft die Sache betrachtet.

(激情なしに事件を觀察する各人は、)

2) 關係文章の wer も一格であり、主文の der も一格である時には、der を省くことが出来る。

Nur wer die Sehnsucht kennt, weiß, was ich leide.

(あくがれを知れる人のみぞ、わがなやみを知れり；

Only he who knows what yearning is knows what I suffer.)

【註】 weiß の前へ勿論 der を置いてよろしいが、省くことは出来る。——英譯と比較し、he who とあるところに注目し、英語を直譯してはならぬことに留意せよ。

Wer mich am empfindlichsten beleidigte, der war dein Bruder.

(僕を一番ひどく侮辱したのは、君の兄弟だつた。)

【註】 Wer を有する關係文章が前行し、これを受ける主文の主語が、一格なる時 (即ち上例の如き時) には、der の代りに es 又は das を使用する事がある。かゝる時は wer は一定の人を示してゐる。

Wer sich aber nicht schämte, es (das) war Spiegel.

(しかし耻ぢなかつた人は、シュビーゲルであつた；これは Es war Spiegel, der sich aber nicht schämte. と同じである。)

Wessen Gastfreundschaft ich genossen habe, den vergesse ich nicht.

(その厚遇を私が受けた人を、私は忘れません。)

【註】 wessen はまた約めて、wem と云はれる。

Wes Geist nicht flehn und loben mag, der hoffe keinen Gegenstand. (その人の心が祈ること又褒めたへることを好まぬ人は、いかなる祝福の日をも期望するな。)

次には共に三格又は四格なる例をあげる：

Wem nicht zu raten ist, dem ist nicht zu helfen.

(忠告を受け入れぬ人は、手がつけられない。)

【註】 關係文章が wem で初まり、主文章中に dem があるときは、主文章の dem が略されることがある。

Der Arzt hilft (dem), wem er helfen kann.

(醫者はなほし得る人をなほすのだ。)

Wenn die Götter verderben wollen, den schlagen sie mit Blindheit. (神々が滅ぼさうとする人を、神々は盲目を以て罰する [schlagen=strafen; こゝでは罰をあてて盲目にする義。])

【註】 此場合も、wen と den と兩方を置かないで、den を略す人もある。即ち上例の den を略し、主文を [schlagen で初める類である。]

3) Wer は不定の單數又は複數の人を指すもので、『誰れでも云々する人は』の義あるに反して、derjenige, der (welcher) の形は、より明かに個體化する傾向を示し、たゞ『云々する人は』の義であつて、『誰れでも』と云ふやうな不定的・一般化的の意味に乏しい。

Derjenige, der dort unter dem Baume steht, ist mein Bruder. (あそこの木の下に立て居る人は、私の兄弟である。)

【註】 兩者が、ほとんど同じと云つてよいやうな場合があるけれど、それでも上述の差別が、いくらか含まれてゐる。

Wer sich in Gefahr begibt, kommt darin um.

(危険のなかに飛び込む人は、だれでもその中で死ぬ。)

Derjenige, der sich in Gefahr begibt, kommt darin um.

(危険のなかに飛び込む人は、そのなかで死ぬ。)

4) Wer にはまた wenn man (又は wenn einer) の義を持つ事が、稀れにある。

Fragen ist keine Schande, wer (=wenn man) ein Ding nicht weiß. [Grimm]

(或ことを知らなければ、問ふのは何の耻でもない。)

Das ist eine schöne Errungenschaft, wer (=wenn einer) etwas davon hat. [Bismarck]

(それは、もし人がそれを若干でも持つなら、立派な收穫物である。)

(D) Was の用法。

1) Was の一般的な概念は、それが不定の事物を示すことであつて、主文の文頭に於て、これを受ける das は、was と共に一格又は四格なるとき、之 (das) を略すことが出来る。

Was wahr ist, (das) muß wahr bleiben.

(眞實であるところのものは、(何事でも) 眞實で止まつておなければならぬ; 眞理であるものは、永久に眞理であらねばならぬの義。)

Was (Wessen) das Herz voll ist, des (dessen) geht der Mund über. (心に充つるより、口に云はるゝものなり[聖書]; [直譯] その事について (wessen) 胸に充ちてゐるもの、そのものについて口は溢れる。)

Was du für recht hältst, dessen brauchst du nicht schämen.

(君が正しいと思ふことを、君は耻づる必要はない。)

Was mir unrecht scheint, dem versage ich meine Beistimmung.

(私に不正と思はれるものには、私は同意を拒む。)

然し was は時に一定せるものを指すことがある。

Was du behauptet hast (=Dasjenige, das du behauptet hast), ist unrichtig.

(君の主張したことは、間違だ。)

2) Was は不定代名詞 (例へば、etwas, nichts)、不定數詞 (alles, vieles)、指示代名詞 (das(jenige), solches)、又は中性の名詞的に用ゐられたる形容詞を、先行詞として取る。

Alles, was er sagt, ist gut.

(彼の云ふところの凡てはよろしい。)

Er sah nichts, was um ihn vorging.

(彼は自分の周りに起つたことをなんにも見なかつた。)

Ich erzählte vieles, was ich gehört hatte.

(私は私が聞いたところの多くのことを物語つた。)

Es handelt sich nicht um das, wessen du bedarfst.

(それが君に要するものには關係がない; wessen は was の二格。)

Das war das Beste, was Sie tun konnten.

(それは貴君のなし得た中で最上のことであつた。)

Das ist das Neueste, was ich weiß.

(それは私の知れる限りの最新の事柄だ。)

【注】 I. 先行詞が中性の名詞的に用ゐられた形容詞の後でも das を使用するけれど、それは特定のものを示すときである。

das Gute, das ich zu tun vermeine,...

(私になさうと考へてゐる善事...。)

【注】 II. 確定せる物の名——即ち通常の名詞を、was の先行詞として取ることは、絶対にいけないのだが、それでも有名な著述家

に於てすら往々發見されることがある。然しこれは模倣すべからざる用例である。

Das Gut, das der Vater hinterlassen hat. (Freitag)

(父遺した財産。)

Ottolie erinnerte sich jedes Wortes, was gesprochen wurde.

(オテリリーは話された各の言葉を思ひ出した。)

3) Was は先行の主文章に於ける主語 es 又は客語 es にかゝることがある。

Der Zweifel ist es, was Gutes böse macht.

(善きことを悪くするのは、疑ひである。)

【註】此種の es をうける der については、welcher と der とについての項に述べた。即ち上掲の文は、次の文と同意味である。

Der Zweifel ist es, der Gutes böse macht.

Es ist nicht Furcht, was mich bewegt. (Hebbel)

(私を動かすものは恐怖ではない。)

【註】これも Es ist nicht Furcht, die mich bewegt. と同じである。

War es ein Traum, was sie erlebten?

(彼等が體驗したのは夢だつたらうか?)

4) 前行文章の全部の意味、或はその一部の意味を、was が受けることがある。

Er ging nach Hause, was seinem Vater gefiel.

(彼は歸宅した、それは彼の父の氣に入つた; He went home, which pleased his father.)

Mein Bruder ist reich, was ich nicht bin.

(彼の兄弟は金持ちだが、私はさうちやあない。)

【註】 I. 第一の例に於ては、was は前文の意味全體を受け、第二の例に於ては、reich と云ふ一字を受ける。——またこの種の was の代りに、welches が使用されることがある。

Er ist reich, welches ich nicht bin.

【註】 II. 此意味に於ける was を、先行名詞に關係する das と思ひちがつてはいけない。

Er kauft das Haus, das mir gefällt.

(彼は私の氣に入る家を買ふ; das は Haus にかゝる。)

Er kauft das Haus, was mir gefällt.

(彼は家を買ふ、それが僕の氣に入る; was は前行文章の全體にかゝる。)

此場合には was の代りに、[註] I. にあげられたる welches を使用することは、勿論出来ない。さうすれば、das Haus, das の方の意味にとられるから。

5) Was は人を集合的に指すことがある。

Was von Offizieren im Lager war, wurde zusammengetrommelt. (士官たちのうちで陣營に居たものは、太鼓で呼びあつめられた。)

Was noch die Beine brauchen kann, das geht an Feiertagen aus. (まだ足の使へる人々は、祝日には外出をする。)

6) 古くは wer 又は was を有する副文に da を入れたが、今では古く持つてゐたところの指示的・限定的の意味がなくなつたので、大抵は用ゐられない。

Und wer da anlopfet, dem wird aufgetan.

(叩くものには開かれん。〔聖書〕)

Komme, was da will.

(来るものは来れ; 何でも構はぬ、何でも来いの意。)

7) Wer 又は was を有する副文中に、副詞 auch 又は immer, 或は auch immer, auch nur, nur immer を入れて、副文の意味を一般化することがある。

Es ist falsch, was er auch sagen mag.
(彼が何を云はうと嘘だ; It is false, whatever he may say.)
Wer immer es gejagt hat, er hat gelogen.
(誰れがそれを言つたつても、其人は嘘をついたのだ。)
Von wem er es auch immer gehört haben mag, es ist erlogen. (彼がそれを誰れから聞いたろうとも、それはうそだ。)

8) was に前置詞を附する場合、及び事物をあらはす der 及び welcher に前置詞がつく場合には、wo+前置詞の形を採る。而して前置詞が母音で初まるときには wo- は、wor- となる。

Wonach (was の三格+nach の義) man eifrigst strebt, das bleibt oft unerreicht.

(人が最も熱心にそれを得ようと努力するものは、屢得られないで居る; nach etwas streben=或ものを得ようと努力する。)

Er schrieb für eine Zeitung, wodurch (durch was の義) er viel Geld verdiente.

(彼は新聞のために書いた、それによつて彼は多くの金を儲けた。)

Der Vater hatte nach dem Sohne geschickt, wovon dieser freilich nichts erfahren hatte.

(父は息子のところへ使をやつた、その事を息子は勿論少しも知らなかつた。)

【注】 上の二例は、前文の意味を受ける was に前置詞が関係する場合であるが、もし wo+前置詞を使用する事によつて、文意の曖昧を来たす時は、前置詞+関係代名詞の形を取らなければならない。

Er hat mir viele Vorwürfe gemacht, von denen aber nichts in Öffentlichkeit gekommen ist.

(彼は私に多くの非難をなした、しかしそれについては [denen =Vorwürfen] 少しも世間にわからなかつた。)

上文に於て、関係文章を、wobon で初めると、その wo (=was) は前文の意味を受けて、「非難をしたことについては、少しも世間に知らなかつた」の義に解されるから、かゝる場合には、必ずず関係代名詞を使はなければならない。

Er wußte alles, wovon (was の三格+von の義) ich mit Ihnen gesprochen hatte.

(彼は私が貴君と話したことをすつかり知つてゐた。)

Das ist die Tabakfabrik, worin (=in der, in welcher) mein Vetter arbeitet.

(これはそこに私の従兄弟が働いてゐるところの煙草工場です。)

【注】 此場合 worin の代りに、darin (drin) を使用することがあるが、これは通常ではない。

An dieser Stelle lag das Haus, drin (=in dem, in welchem, worin) Aloys und sein Bruder Stephan wohnten.

(Fontane) (此ところに、アロイスとその兄弟のシュテファンとが住居せる家があつた。)

Dort steht das Haus, **wobon** (又は von dem, von welchem) ich Ihnen erzählt habe.

(私が貴君にお話ししたことがある家が、あそこに立っています。)

【註】これは von dem 又は von welchem の代りに、wobon が使用され得と云ふ事を示すだけで、かう云はなければならないと云ふ譯ではない。而して wo+前置詞の方は、多くは俗語に使用され、前置詞+関係代名詞の方は、選擇された言語に使はれるやうである。

人間については、wo+前置詞の形は用ゐざるのが原則である。即ち

Dort steht der Herr, **von dem** (od. von welchem) ich dir erzählt habe. (私がその人のことについてお前に話したことがある紳士があそこに立っている。)

【註】即ち此場合、wobon と云つてはならないのである。然し古くは人間にも此形が使用された。

Das Mädchen, **wobon** (正しくは、von dem, von welchem) du gestern das Lied sangst. [Goethe]

(それについておんみが昨日歌つたところの乙女は、)

Ich dachte der lieben Brüder, **womit** (正しくは、mit denen, mit welchen) ich so oft in Göttingen getrunken.

[Heine] (私は屢ゲッティングでその人たちと一緒に飲んだところのあの愛すべき兄弟たちを思ひ出した。)

しかし複數では、今でも使用される事がある。

Ich traf in dem Garten mehrere Herren, **worunter** (=unter welchen, unter denen) auch dein Freund war.

(私は庭で數人の紳士に會つた。そのなかに君の友人もまた居た。)

(E) 關係副詞の用法。

關係文章の先行詞が場所・時又は方法を云ひあらはすものであるときには、關係代名詞の代りに、關係副詞 wo, wenn, als, da, wie 等が使用される。詳しく云ふと、場所には wo, woher, wohin 等が關係し、時には wo, da, wenn, als, wie 等が關係し、方法の名詞には wie が用ゐらる。

1) 處に關するもの。

Kennst du das Land, **wo** (=in welchem) Zitronen blühen?

[Goethe] (レモンの花咲く國をおんみは知れりや?)

Auf diesem schönen Boden, **wohin** (=nach welchem) das

Glück dich zu verpflanzen schien, gedeihst du nicht. [Goethe]

(幸運がそこへおんみを移し植ゑるように見えるところの美しい土地では、おんみは昌えない。)

【註】實際の場所ではなく、比喩的の『場合』を示す名詞に、wo が關係することがある。例へば、(die) Fälle, wo.....(云々の場合; = (the) cases, in which.....)

2) 時に關するもの。

a) als は眞實の事件の生起せる時日を示す。

Im Jahre 1925, **als** (=in welchem) ich in Berlin studierte, starb mein Vater in Osaka.

(私は伯林で勉強して居たところの千九百二十五年に、私の父は大阪で死んだ。)

b) wenn は眞實の事件の生起せる時日ではなく、或事の生起する習ひであるところの時を示すに使はれる。又 wenn の代りに wann が使用される事もある。

Manchmal in tiefer Nacht, wenn (=in der) alles rings umher ruhte, sang sie mir.

(周囲のすべてが休んだところの深夜に、折々彼女は私に歌つて聞かせた。)

An schönen Abenden, wenn wir vor der Tür sitzen,.....

(われらに戸口の前に座せる美しき夕暮に.....)

c) wo は過去及現在の眞實の事件を示す際にも、未來の事柄を示す場合にも用ゐられる。即ち上掲の als 及び wenn の代りをなすものである。此 wo の代りに折々 da が使用される。

Den Augenblick, wo (=in welchem) sie im Garten ist, ist er auch da. (彼女が庭に出ると彼もすぐに出る。)

Ich war in den glücklichen Jahren, wo uns alles gefällt.

(私は、萬事がわれらの心に入るところの幸福な時代に居た。)

Zu einer Zeit, wo ich abwesend war,.....

(僕の不在であつた時に、.....)

Bis den Augenblick, da mich Ihr Brief aus dem Schlafe weckt,.....(貴君の手紙が眠から私をさます瞬間まで、.....)

【註】 I. wo (又は als) の代りに、wie が使用されることがある。

Es fällt in die Zeiten, wie (=wo) ich sie in der Wirtshauskuche fand. (それは、私が彼等を料理屋の食堂で發見した時期に當る。)

【註】 II. Zeit 又は Mal といふ名詞のうしろに、wo, als, daß 等が使用される。

In der Zeit, wo (=in welcher) ich noch Student war,..... (私がまだ學生であつたときに.....)

In dem Augenblick, daß (=in dem) er Amen sagte,.....

(彼がアーメンと云つた瞬間に、.....)

Das letzte Mal, daß (=als) ich ihn sah, war er wohl.

(私が彼に會つた最後のときには、私は健全であつた。)

3) 方法に關しては、wie (=auf die, auf welche) を使用する。

Wir waren sehr unschlüssig über die Art, wie (=auf die) der Krieg geführt werden sollte.

(われわれは、戦争のやり方について甚しく決心がつかずに居た。)

第 四 節

間 接 疑 問 文 章

14. 一個の獨立せる疑問文章を、一つの主文に從屬させて使用することがある。これが間接疑問文章 (indirekter Frage Satz) と云はれるもので、之に對して獨立せる疑問文章を、直接疑問文章 (direkter Frage Satz) と稱する。間接疑問文章は、疑問代名詞、wer, was; welcher, was für ein, 疑問形容詞又は疑問副詞、wie, wo, woher, wohin 等によつて、主文に接續するか、または接續詞 ob (whether) によつて主文につながる。直接疑問文章に疑問詞なき時は、この方法 (ob 使用) に依るのである。

〔直・疑〕 Wann kommst du?

〔間・疑〕 Sage mir, wann du kommst.

〔直・疑〕 Was ist geschehen?

〔間・疑〕 Erzähle mir, was geschehen ist.

〔直・疑〕 Wirst du kommen?

〔間・疑〕 Sage mir, ob du kommen wirst.

〔直・疑〕 *Weshalb ist er dorthin gegangen?*

〔間・疑〕 *Weshalb ist er dorthin gegangen ist, weiß ich nicht.*

〔註〕 最後の例は云ふまでもなく、間接疑問文章が、主文章に先行したもので、この際主文は勿論倒置法に依る。

15. 間接疑問文章は、間接説話文章（他人の言説を間接に傳ふるもの）の一種と見做すべきものであるから、間接説話文章に適用されるべき諸般の規則は、間接疑問文章に應用され得るのである。だからこゝではまづ、間接説話文章の規則について述べよう。

まづ第一に、間接説話文章に於ては、その定動詞を可能法にするのを原則とする。而して直接説話の文章の時稱と間接説話のそれとの對應は、次の如くなる。

〔直・説〕 (直説法)	〔間・説〕 (可能法)
I. 現在	{ (a) 現在 (b) 過去
II. 過去	{ (a) 現在完了 (b) 過去完了
III. 現在完了	{ (a) 現在完了 (b) 過去完了
IV. 過去完了	{ (a) 現在完了 (b) 過去完了
V. 未來	{ (a) 未來 (b) 第一約束法形
VI. 未來完了	{ (a) 未來完了 (b) 第二約束法形

上の表中、(a)の方を使用するのが、本體ではあるけれど、此際可能法の時稱の形と、直説法の時稱の形とが全く同一で、

辨別しがたきときには、(b)の方を使用して、そこには可能法の使用されてゐることを明示する。尤も此必要もないのに、好んで (b) を使用する人々もあるが、これは必要によるのではなく、趣味や習癖に基づくものである。

〔直・説〕	〔間・説〕
I. Ich bin krank. [現] Er sagte,	{ (a) er sei krank. (b) er wäre krank.
II. Ich war krank. [過] Er sagte,	{ (a) er sei krank gewesen. (b) er wäre krank gewesen.
III. Ich bin krank gewesen. [現・完] Er sagte,	{ (a) er sei krank gewesen. (b) er wäre krank gewesen.
IV. Ich war krank gewesen. [過・完] Er sagte,	er wäre krank gewesen.
V. Ich werde krank werden. Er sagte,	{ (a) er werde krank werden. (b) er würde krank werden.
VI. Ich werde krank geworden sein. Er sagte,	{ (a) er werde krank geworden sein. (b) er würde krank geworden sein.

上例では、(a)のみ使用すれば充分で、(b)形を使用する必要は決して發見されないけれど、好んで (b) 形を使用する人のあるのは、前述の通りである。例へば、次の文章では、(a)も (b)も全く意味上同一であることを見たら、この間の消息は解るであらう。

Er sagte, Marie wäre wohl verschlossen, aber sie sei tief von Gemüt. (彼は云つた、マリーは成程打解けないが、しかし彼女は情が深いと。)

【註】 (b) 形を好んで使用する地方は、東南獨逸と北獨逸とであると云はれて居る。

眞に (a) 形を避けて、(b) 形を用ひなければならぬ場合は、(a) と直説法とが、同形なる時である。例へば：

〔直・説〕	〔間・説〕
Sie sagten: „Wir haben es nicht getan.“	Sie sagten, daß sie es nicht getan hätten.

【註】 今間接説話に於て、getan habenと云ふと、直説法と同形になるから、過去完了形にあらためたのである。——序でに、間接説話に於て、daßを使用すれば、その語次が貶置法となることは云ふまでもない。此 daßがないときは、間接説話は主文の語次を探るけれど、意味の上から見れば、矢張副文で、所謂假裝副文 (verkappter Nebensatz) と稱するものである。

Er sagte mir: „Sie sehen blaß aus.“	Er sagte mir, daß ich blaß ausjäh.
-------------------------------------	------------------------------------

【註】 この場合、可能法現在の ausjeh を使用すれば、直説法と同形となるから、避けたのである。

Sie sagten mir: „Wir werden Ihnen gern helfen.“	Sie sagten mir, daß sie mir gern helfen würden.
(彼等は私に云つた: 『われわれはよろこんで貴君を助けませう』と。)	(彼等は私に云つた、彼等がよろこんで私を助けるだらうと云ふ事を。)

【註】 間接文に於て、helfen werden とすれば、直説法と同形となるからwürden としたのである。

^{Man sagte, sie}
 Man sagte: „Sie tragen viel Geld bei sich.“ Man sagte, sie trügen viel Geld bei sich.

【註】 間接文で tragen とすれば、直説法と同形となるからである。——又 bei sich tragen = 「携帯してゐる」義。

^{das sie verlieren,}
 Sie erklärten uns: „Wir verlieren unsere Zeit, indem wir das tun.“ Sie erklärten uns, daß sie ihre Zeit verlieren, indem sie das täten.

【註】 可能法の現在なる verlieren, tun は、直説法と同形だから、verlören, täten としたのである。又 indem = dadurch daß.

なほ次の例によつて、(a) 形と (b) 形との用法を會得するがよろしい。

Socrates erklärte, alles, was er wisse, sei, daß er nichts wisse; viel wüßten* aber auch dieses nicht.
 (ゾークラテースは説いた、彼が知つてゐるすべての事は、彼が何んにも知らないと云ふ事である; しかし多くの人々はこの事すら知らないと。)

【註】 I. *viel wissen とすれば、可能法と直説法とが同形となるから、前二者は現在であるのに反して、こゝでは過去を使用して viel wüßten としたのである。

【註】 II. 尤も可能法の形が、直説法の形と同じでも、委細構はず、前者を推し通す風が、西南獨逸や瑞西にはある。Der äußerste [sagte mir mein Führer].....sei der Saturnus; der mit rotem Schein.....sei der Mars, und beide bringen (普通なら brächten と云ふべきところ) wenig Glück den Menschen [Schiller]. (一番外にあるのはと [私に私の案内者が云つた]...土星であつて、赤い光のは.....火星である。そしてこの兩者は人間にあまり幸福を持つて來ないと。)

又直接説話に於ける可能法は、間接説話に於ても襲用する。

〔直〕	〔間〕
„Wäre ich doch bei dir!“ (私が君のところに居ればよいのだが!)	Er sagte, daß er bei dir wäre!
„Die Sache dürfte sich anders verhalten.“ (事情はちがふかも知れない。)	Er meint, daß sich die Sache anders verhalten dürfte.
„Ich täte es, wenn ich könnte.“ (私は出来るなら、するのだが。)	Er sagte mir, er täte es, wenn er könnte.

命令又は願望をあらはす直接説話は、話法の助動詞の *sollen* (命令) 又は *mögen* (願望) を以て置き換へる。

- (a) Ich habe ihm befohlen, daß er weggehen *solle* (od. *sollte*).〔命〕
 „Gehen Sie weg!“
- (b) Ich habe ihm gebeten, daß er weggehen *möge* (od. *möchte*).
 〔願〕

【註】 I. 主文の時稱が、現在なるときは、*sollen*, *mögen* も現在形が多く使用される。

„Gehe schnell!“ Sage ihm, er *solle* schnell gehen.

„Kommen Sie morgen wieder!“ Bitten Sie ihn, er *möge* morgen wieder kommen.

【註】 II. 命令の實行され又は同意されることに對する確信を有する事を示すには、動詞の直説法、又は *sollen* の直説法が使用される。

Sage ihm, er *soll* gleich kommen.

Ich gebiete dir, daß du pünktlich zurück *bist*.

(私はお前がきちんと歸つて來ることを、お前に命令する。)
又それほど確信なくとも、云はれたる行爲の遂行されることを期待すといふ意味を含ませて、直説法を使用する事もある。

Sagen Sie dem Zimmermädchen, daß sie meine Tasje und mein Plaid wieder hereinbringt! [Stern]
 (私のカバンと肩掛物をまた持つて來いと、部屋附きの女中に云つて下さい!; Plaid は、佛蘭西語でブレードと譯む。)

16. 以上は間接説話文章についての原則であるが、通則として記憶すべきことは、獨逸語にあつては、間接説話の副文章の時稱が、主文章の時稱によつて拘束されざることである。

Er sagt (od. sagte, hat gesagt, hatte gesagt), daß er im nächsten Sommer in der Schweiz sein werde.

Er sagt (sagte, hat gesagt, hatte gesagt), er habe dieses Buch schon gelesen.

しかし古くは、主文と副文との時稱の間に、一定の通則があつて、主文の現在の後には、現在・現在完了・未來・未來完了の形〔即ち上掲の (a) 形〕が用ゐられ、過去の後には、過去・過去完了及未來と未來完了との *werden* を *würden* にかへたる形 (*ich würde gehen; ich würde gegangen sein*) が使用されたものである。例へば:

Er sagt, er sei krank, er habe es schon gelesen, er werde morgen abreisen, er werde es innerhalb einer Woche getan haben.

Er sagte, er wäre krank, er hätte es schon gelesen, er würde morgen abreisen, er würde es innerhalb einer Woche getan haben.

今でも (b) 形は、何等の理由なきときにも、北獨逸及東南獨逸に於て愛用されるが、一般の原則としては、主文の時稱のために、何等の拘束をも受けないのが、今の規則だと記憶してよろしい。

17. 間接説話の副文を有する主文の動詞は、單に「云ふ」事を意味するものばかりでなく、思考し、經驗する事を意味する動詞をも含み、その思念なり經驗なりの内容を傳達するものであるが、その際いづれの意味に於ても自己の責任に關係なく、たゞ之を傳ふるにすぎぬときには、可能法を使用し、自己もかく信ずるとか、思惟するとかの如く、何等かの關係を自己に持たしめて云ふときには、直説法を使用することを原則とする。

Er sagte, daß du krank bist. (彼は君が病氣だと云つた。)

【註】 これは敘述された事を、話者も共に本當だと信ずることを示してゐる；單なる傳達ならば、Er sagte, daß du krank seiest. である。

Er erzählte mir, daß der Brief, den er geschrieben hat, nicht angekommen ist.

(彼は彼が書いた手紙が到着しなかつたと私に物語つた。)

【註】 これに對して、單なる傳達のためには、Er erzählte mir, daß der Brief, den er geschrieben habe, nicht angekommen sei. と云ふ形がある。

Sie glauben, daß die Erde rund ist.

(貴君は地球が丸いと信じてゐます。)

【註】 これと、Es gibt Leute, die glauben, die Erde flach sei. (地球は平らだと信ずる人たちがあつた) とを比較せよ。直説法を用ゐた方には、「自分もさう信ずる」事を、包含してゐるが、可能法の方は、自己に何等の責任や關係のないことを示してゐる。

上述の理由からではなく、敘述の活潑さに貢獻せんがために、直接法を使用することがある。これは間接説話に於て、現在完了形を使用すべきときに、過去を使用することに於て、最も多く行はれるらしい。

Man sagt, er war früher katholischer Theolog.

(彼は以前は舊教の神學者だつたと云ふ話だ。)

Ich erfuhr von dem Gastwirt, die Herrschaften kamen gerade aus hiesigem Ort.

(私は宿屋の主人から聞いた、此紳士淑女たちは、當地から來たものだ。)

18. 間接説話に就いては、悉しく云へば、まだ色々ある。こゝでは間接疑問文章の構造を説明するために、間接説話文章の一般法則に及んだのであるが、序でだから、次に間接説話文章に於て、なほ注意すべき二三の點を擧げて、それから間接疑問文章に移らうと思ふ。

i) 間接説話の副文中に、説話ではなく、事實を表はす副文が挿入されるときは、此副文だけは、直接法を使用する。

Er sagte, daß er das Haus, welches er von seinem Vater geerbt hat, verkaufen wolle.

(彼は彼が、「父から相續した」(事實) 家を賣らうと思ふと云つた。)

【註】 必ずしもさうではなく、敘述の活潑のために、前掲の如く、現在完了の代りに、直説法の過去を使用することもある。

Er erzählte, schon in der Jugend, da sie noch auf derselben Schulbank saßen (=geessen hätten (haben は同形だから避ける)), seien sie gute Kameraden gewesen.

(彼は物語つた、彼等がまだ同じ學校の椅子の上に座つてゐたところのあの少年時代に既に、彼等は親友であつたと。)

ii) 事實を述べつゝある文章中に、何等の前置きもなく、突然間接説話の可能法が表はれることがある。此場合は、間接説話副文に對する主文が略されたものと考へてよい。

Die Athener verurteilten Sokrates zum Tode, weil (sie sagten, daß) er die Jugend verderbe.

(アテンの人々は、ソークラテースが青年を害する〔と云ふ〕ので、彼を死刑に宣告した。)

Einem Gulden hat mir der Heilige geschenkt, (indem er sagte,) in meiner Tasche müßte er stecken.

(聖者は私に一グルデンを與へた、それが私のポケットのなかに、はいつて居ねばならぬと〔云つ〕て。)

Sage Er ihr, (daß ich sagte,) sie sollte sich in acht nehmen.

(あなたは彼女に云つて下さい、彼女は注意するがよいと〔僕が申したと〕; Er は古くは相手の敬稱であつた。)

【註】 此種の可能法ではあるが、もつと複雑したのがある。

Bringe Wendelin meine Grüße und (sage ihm, daß ich sagte,) es wäre hübsch von ihm gewesen, daß er dir diese Reise gönnt. (グエンテリーンに私から宜しくと傳言して呉れ玉へ、それから彼が君の此旅行を喜んで許したのは彼として結構なことだつたと、〔私しが申したと言つて呉れ玉へ。〕)

iii) 直接説話の過去も、現在完了も、過去完了も、みんな一樣に、間接説話では、現在完了形になるので、その間の區別をはつきりさせるために、無理ではあるが、直接説話の過去完了をあらはすためには、間接説話に於て、他動詞ならば更に *gehabt* を、自動詞ならば、更に *gewesen* を加へる風が起つた。

Er sagt, er habe die Straßen verlassen gehabt und sie schon in das Haus getreten gewesen, als der Schuß fiel.

(彼は云ふ、射撃があつたときには、彼は街上を辭して既に家のなかへ入つてしまつたと。)

受動に於ても、直接説話の過去完了をあらはす爲めに、特別の形を使用する人がある。元來直説法に於ける: Ich war gelobt worden [過・完] を間接説話にすれば、Er sagte, daß er gelobt worden sei. となり、元來現在完了なりしものと、過去なりしものと區別がなくなるので、worden の代りに、此場合だけ gewesen を使用すると云ふ風習である。

Sie hat ihm mitgeteilt, ihr Vater sei heute zum Reichskanzler geladen gewesen.

(彼女は彼に告げた、彼女の父は今日宰相のところへ招かれたと。)

然し上述の二つの特殊形を、われらは使用してはならないのである。

19. さてこれから、間接説話文章に移る。既に述べたとほり、間接疑問文章は、間接説話文章の一種と見做すべきものであるから、話法に關しても、時稱に關しても、同一の法則があてはまる。今一例をあげれば:

〔直・疑〕

〔間・疑〕

Was liest (od. liest) du?	} Ich fragte ihn, was er lese.
Was hast du gelesen?	
Was laßt (od. laßt) du?	} Ich fragte ihn, was er gelesen habe.
Was hatte er gelesen?	

Was wirst du lesen?	Ich fragte ihn, was er lesen werde.
Wissen Sie es?	Man fragte mich, ob ich es wisse.
Wie heißen Sie?	Ich fragte ihn, wie er heiße.

可能法と直説法とが、同形となる時は、既述の (b) 形を使用することも、勿論である。

Weiß er das?	Man fragte mich, ob Sie das wüßten (wissen の代り).
Haben Sie den Brief schon erhalten?	Er fragte mich, ob ich den Brief erhalten hätte (habe の代り).
Geht ihr mit mir?	Er fragte uns, ob wir mit ihm gingen (gehen の代り).
Denkst du daran?	Er wollte denken, ob ich daran dächte (denke の代り).

20. 間接説話文章が、云ふこと、考へる事、又は経験する事を云ひあらはす名詞の後にも用ゐられるように、間接疑問文章も、問ふ事、訊ねる事を示す名詞の後に置かれる。此場合は兩者とも、その名詞に屬する附加語文章 (Attributjah [B.]) となる。

〔間接説話〕

Er behauptet, daß wir das nicht durchführen könnten.
(彼はわれわれがそれを遂行し得ないと主張する。)
Sie teilte mit, daß sie

〔附加語文章〕

Seine Behauptung, daß wir das nicht durchführen könnten,.....
(われわれがそれを遂行し得ないとする彼の主張。)
Ihre Mitteilung, daß

selbst im gleichen Falle sei.	sie selbst im gleichen Falle sei.
(彼女は自身が同じ場合にありと告げた。)	(彼女自身が同じ場合にありといふ彼女の報告。)
Man wirft ihm vor, daß er dich habe täuschen wollen.	Der Vorwurf, daß er habe täuschen wollen,.....
(人は彼が君を欺かうと欲したと彼を非難する。)	(彼が君を欺かうと欲したと云ふ非難。)

〔註〕 上掲の文に於ける habe の所在は、「副文中に二個の不定法ある時は、定動詞はその前に置かる」と云ふ規則に依つたものである。

〔間接疑問〕

Er fragte mich, ob sein Brief noch rechtzeitig bei mir eingetroffen sei.
(彼は私に、彼の手紙がまだ間に合ふうちに私のところへ届いたかどうかを訊ねた。)
Der Lehrer fragte wer der Entdecker von Amerika sei.

〔附加語文章〕

Seine Frage, ob sein Brief noch rechtzeitig bei mir eingetroffen sei,.....
(彼の手紙が、まだ間に合ふうちに私のところへ届いたかどうかの彼れの問は、.....)
Die Frage der Lehrers, wer der Entdecker von Amerika sei,.....
(アメリカの発見者は誰れかと云ふ先生の質問は、.....)
Der Zweifel, ob Ostindien auf dem Seewege erreicht werden könne.

Man zweifelt, ob Ostindien auf dem Seewege erreicht werden könne.

(人は海路で東印度へ達し得 (東印度は海路で達せられるかどうかを疑つた。) 得るかどうかの疑は、...
...)

21. 前二節に述べた通り、間接説話文章に適用さるべき規則は、間接疑問文章にも當れるのであるが、只一つの異なるところは、後者では、主文が現在なる限り、副文は概して直説法を使ふ事である。

Warum er nicht ausgehen darf, wissen wir nicht.
(何故彼が外出してはいけないのか、私は知らない。)
Sage mir, ob dein Bruder kommen wird!
(君の兄弟が来るかどうか、私に言つて呉れ!)
Kein Mensch vermag zu sagen, ob er nicht des Helmes braucht. [Schiller]
(誰れも兜が不要かどうか云ふことは出来ぬ。)
Erzähle mir, was geschehen ist.
(何が起つたか、私に物語り玉へ。)

然し疑惑・疑問・不安等をあらはすべき場合には、勿論主文の現在に對しても、可能法を使用する。

Überlegen wir....., was zu tun sei.
(どうしてよいか、われわれは熟考ませう。)
Frage sie höflich, ob sie vielleicht zu Herrn Leutnant wolle.
(彼女に丁寧にたづねて見玉へ、彼女が中尉殿のところへ行かうとするのかどうかを。)

【註】 東南獨逸及び北獨逸地方には、主文の現在に對して、その要もなきに、副文に可能法の過去を使用する風がある: Seine bessere Hälfte schreibt's ihm, was er für ein Büffel wär' (=wäre). [Rosegger] (彼の妻は、彼が何たる野蠻人であるかを觸れ廻つ

た; [英] His better half is noising it about what kind of rude fellow he is.)

主文の時稱が過去なるときは、副文の時稱は、間接話法と全く同一に取り扱はれる。

Er erzählte mir, was er gesehen habe.
Wir waren lange ungewiß [darüber], ob er komme (ob käme.) (われらは長い間、彼が来るかどうかについて不確實であつた。)

これで大體間接疑問文章について注意すべき要點を述べ終つたと思ふ。最後に記憶すべきことは、間接疑問文の終りには、今では決して疑問符をつけないことである。即ち Ich weiß nicht, wann er kommt. であつて、kommt: のうしろに疑問符をつける事は、古くはよく見受けられたが、今では絶対にしてはならぬ事になつてゐる。尤、Wissen Sie, wann er kommt? に於ける疑問符は、當然の存在である。何故ならば、それは主文たる疑問文 Wissen Sie に屬するものだからである。

第五章

副文章の配置と語次

1. 副文章を主文章に対する位置から區別するときは、(a) 前(副)文章 (Vorderatz [M.]), (b) 後(副)文章 (Nachatz, Hinteratz [M.]) 及び (c) 間文章 (Zwischenatz [M.]) となることは既に述べた。またこれを主文に接續する詞の種類から見るときは、(a) 接續(詞副)文章 (Konjunktional-ebenzatz [M.]), (b) 關係(副)文章 (Relativatz [M.]) 及び (c) 從屬疑問文章 (Abhängiger Fragelatz) となることも既に述べた。今見方をかへて、副文章が主文章に対する意味上の價值・資格から分けると、(a) 主語の價值を有する主語(的副)文章、(b) 客語の資格を持つ客語(的副)文章、(c) 附加語の價值を有する附加語(的副)文章、(d) 補足語の意味ある補足語(的副)文章 (e) 副詞的規定の資格に立つところの狀況語(的副)文章の五種となる。

此章では、これらの五種の副文章が如何なるものであるかを検討し、その形態と位置とを前述の二個の分類法によつて觀察し、つゞいて副文と主文との配置法について注意すべきことを述べ、最後に副文それ自らの内部に於ける語次について解説しようと思ふのである。

2. 元來文の要素は、二個の主成分と三個の副成分とから成るものであることは、既に述べたが、副文章はその有する意味の上から見て、主文章に対して、これら五要素のうちのいづれか一つを代表するに過ぎない。従つて内容上から見た副文章は、上記の五種に區分されることになるのである。以下例によつて説明して見ようと思ふ。

[A] 主語文章 (Subjektatz, Gegenstandsatz [M.]) とは、上述の如く主語の價值を有するもので、悉しく云へば、主語的の副文章である。例へば、Es wurde gemeldet, daß die Feinde geflohen seien. (敵は逃げたと云ふ事が報告された。) と云ふ複合文章は、Die Flucht der Feinde wurde gemeldet. (敵の逃走は報告された。) と同じ價値で、daß die Feinde geflohen seien といふ副文章が、この複合文章に於て持つ役割は、單文章に於ける Die Flucht der Feinde と同じ役目で、即ち主語たる價值を持つが故に、これを主語文章と稱するのである。又 Ob der Onkel heute kommt, ist ungewiß. (叔父が今日来るかどうかは不確實だ。) といふ複合文章に於ける ob 以下の副文章も、die Ankunft des Onkels と同じだから、これも主語文章である。なほ二三の例を示すと：

Was diese Kästen enthalten, ist ein Geheimnis.
 (これらの箱が藏してゐるものは、或秘密です。)
 Ist dir nicht bekannt, wie tief Preußen von Napoleon gedemütigt worden ist?
 (プロシヤがどの位ひどくナポレオンに屈服させられたかと云ふ事は、君に知られてゐないのか?)
 Wem ich den Auftrag gegeben habe, ist mir nicht erinnerlich.
 (私が誰に委任したか、私には思ひ出せない。)
 Wer säet, wird ernten. (種蒔く人は、收穫するだらう。)
 Daß Du mir noch nicht geschrieben hast, macht mir Sorgen.
 (君が僕にまだ手紙をよこさなかつたことは、僕に心配させます; 書簡では du の代りに Du とする。)
 Ob ich kommen kann, ist zweifelhaft.
 (僕が來れるかどうか、疑はしい。)

Geheimnis

以上例示するとほり、主語文章は、その形態上から見て、(1) 関係文章か、(2) 接續文章か、(3) 又は従屬疑問文章かである。

【註】 後置の主語文章に對して、es 又は das を主文の先頭におく事がある。

Es ist nicht wahr, was du gesagt hast.
(君の云つたことはうそだ。)

〔B〕 客語文章 (Prädikat(iv)satz [M.]) は、極めて稀れに表はれるもので、客語の働らきをする。例へば、Du bleibst doch immer, was du bist. (君は實際いつも君があるところのもので居る、いつも相變らずである。) といふ複合文章に於ては、was du bist=derselbe (同一人) で、この文章は、Du bleibst doch immer derselbe. としてよろしい。即ち was du bist は、客語文章である。又 Gar mancher Mann scheint, was er gar nicht ist. (幾多の人は、彼れが全くそれでないところのものやうに見える。) に於て、was 以下は ein anderer (別人) と同じ價値で、此文は Gar mancher Mann scheint ein anderer. と同じである。別に二三の例をあげると：

Johann Gutenberg war es, der die Buchdruckerkunst erfunden hat.

(ヨハン・グーテンベルヒは、印刷術を發見した人である。)

Die Katholiken sind es, die die Mission in den Kolonien am meisten fördern.

(舊教徒は、殖民地に於て、最も多く傳道に努める人たちである。)

Der Sohn möchte werden, was sein Vater ist.

(息子は父がそれである處のものになりたがつてゐる。)

Was dem Obst der Duft ist, das sei dir Bescheidenheit!

(果實に對して香りがあるところのもので、謙遜がおんみに對してあれかし；謙遜がおんみに對するのは、香りが果實に對するやうなものであれかしの義； Bescheidenheit が、主文の主語である。)

【註】 この例では、客語文章が先行してゐる。この場合は、主文の方が高調されるのである。

Du bist nicht das, was du scheinst.

(君は君が見えるところのものではない；君は外觀とはちがつた人間だ。)

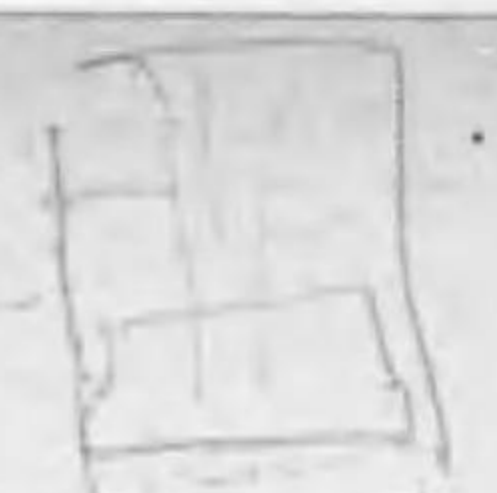
上例に示すとほり、客語文章は、その形態からと云ふと、關係文章である。又客語文章をうけるために、主文章に es 又は das を置くこと、上例の如くである。

〔C〕 補足語文章 (Objektsatz [M.], Ergänzungssatz [M.]) は、四格・三格・二格又は前置詞を有する補足語の價値を持つものである。例へば、Der Bote meldete, daß die Stadt eingenommen sei. (使者は市が占領されたことを報告した。) といふ文章に於ては、daß 以下の副文章は、die Einnahme der Stadt (市の占領) と同じ價値であるから、これは四格の補足語の代理をする補足語文章である。又 Wer einmal lügt, dem glaubt man nicht. (一たびいつはれる人には、人々は信を措かない。) に於て、wer 以下の文章は、dem Lügner (うそつき) と同價値で、即ち三格の補足語の役目を演じてゐる。又 Der Gefangene erinnerte sich nicht, ob er am Tage des Diebstahls im Dorfe anwesend gewesen war. (囚人は、竊盜の日に彼が村に居たかどうか思ひ出せなかつた； anwesend sein=居合はせる) と云ふ文章に於ては、ob 以下の副文は、sich erinnern の補足語の價値——簡短に云へば、

seiner Anwesenheit (sich erinnern は二格の補足語を取る)の價値を有するものである。又、Er fragte mich, wo der Freund wohne. (彼は友人が、どこに住んでゐるかを訊ねた)に於て、wo 以下を云ひかへると、nach der Wohnung des Freundes (友人の住居)で、これは前置詞(こゝでは nach)を有する補足語の代りをしてゐる。

二格の補足語又は前置詞を有する補足語の代りに使用せらるる副文章に對しては、この關係を明示すべき指示代名詞、又は代名詞的副詞を、主文の中に置くことがある。例へば、Er fragte danach, ob ich ihn kenne. (彼は私が彼を知つてゐるかどうかを訊ねた)に於ては、主文の代名詞的副詞なる danach が、上掲の關係を示してゐる。即ち nach は fragen の要求する補足語が持つべき前置詞であつて、da (それ)は ob 以下を指してゐる。又 Des rühme der blut'ge Tyrann sich nicht, daß der Freund dem Freunde gebrochen die Pflicht. (友人が友人に對して義務を破つたことを、殘忍な暴君が誇つてはならぬ; gebrochen が補足語の前に立つたのは、詩だからである; sich eines Dinges rühmen = 或事を誇る、自慢する; rühme は可能法で、命令・希望をあらはす)といふ文章に於ては、文頭の指示代名詞 des は、daß の二格 dessen の代りに使用されたもので、daß der Freund dem Freund..... 云々の副文を受けて動詞 sich rühmen と daß との關係を示してゐる。— 又四格の補足語の代りをする副文章に對しては、主文章中に es 又は das を入れることがある、Ich weiß es nicht, wer das gesagt hat. (誰れがそれを言つたか私は知らない)。

上述の諸例でわかる通り、補足語文章の形態は、關係文章・接續文章又は關接疑問文章である。



【注】補足語文章の接續詞が、daß なるときは、之を略すことが出来る。その際には、副文の語次は、主文のそれと同一となる。

Er hat gesagt, daß er krank gewesen sei = Er hat gesagt, er sei krank gewesen.

Ich hoffe, daß er mir helfen wird. = Ich hoffe, er wird mir helfen.

Ich glaube, daß du Wahrheit sagst = Ich glaube, du sagst Wahrheit.

Sei versichert, daß ich im Frühling zurückkomme. = Sei versichert, ich komme im Frühling zurück. (請合つて、春には歸つて來ます; Sei (dessen) versichert = 云々は請合です)。

念のため、次に更に二三の例をあけて置く。

Genieße, was dir Gott beschieden. [關]

(神がおんみに與へたものを享受せよ。)

Sie sagt mir stets, ich sei ihr Feind. [接]

(彼女はつねに私に云ふ、私は彼女の敵だと。)

Wer zweifelt daran, daß wir alle sterben müssen?

[接] (われわれすべてが死せざるを得ぬといふ事を何人が疑ふか?)

Gehorche dem, der dein Vorgesetzter ist. [關]

(おんみの上役に服従せよ。)

Der Angeklagte bestand darauf, daß er die volle Wahrheit gesagt habe. [接]

(被告は、彼が充分の眞實を云つたと主張した; auf etwas

[四] bestehen 或事を主張する。)

Er fragte mich, ob ich das Buch gekauft hätte. [間]

(私は私が本を買つたかどうか訊ねた。)

[D] 附加語文章 (Attributsatz, Beifügungssatz [M.]) は、勿論

附加語の役目を有する副文章ではあるけれど、これには二種あつて、一つは形容詞的の附加語の價値を有するもの、他は名詞的の附加語の價値を有するものである。

i) 形容詞的の附加語文章 (adjektivischer Attributsatz) は、附加語たる形容詞の價値を有するもので、例へば *Das Lied, das aus der Kehle dringt, ist Lohn, der reichlich lohnt.* (咽喉から迫り出づる歌は、豊かに報ゆるところの報酬である) といふ文章に於て、*das* から *dringt* までと *der* から *lohnt* とまでの二個の關係文章がそれで、*das* *Lied, das aus der Kehle dringt* は、*das* *aus der Kehle dringende Lied* と云ひ換へ得るから、此副文章は *aus der Kehle dringend* の價値を有し (*dringend* は現在分詞にして、こゝでは形容詞に使はれてゐる; *aus der Kehle* は *dringend* に對する副詞的規定の役目を有する)、*Lohn, der reichlich ist* は *der reichliche Lohn* と同義であるから、副文章は形容詞 *reichlich* の價値を有するのである。なほ形容詞的附加語文章の例を、二三擧げれば:

Dem Feind, der flieht, (=Dem fliehenden Feinde) muß man goldene Brücke bauen.

(逃れる敵には、黄金の橋を架けてやらねばならぬ。)

Die Wolken, welche den Himmel verdecken, (=Die den Himmel verdeckten Wolken) sind vom Winde zerstreut worden.

(天を蔽へる雲は、風によつて吹き散らされた。)

Verachte die Güter, die vergänglich sind (=Verachte die vergänglichen Güter)! (無常の財を輕蔑せよ!)

So weit geht niemand, der nicht muß.

(必要のないものは、誰だつてそんな所までは行かぬ。)

【註】この副文はむしろ、*wenn er nicht muß* と云ふ條件を云ひあらはす狀況語文章の義で、かく形は關係文章でありながら、意味は狀況語文章のものは往々ある。例へば、*Veräume die Zeit nicht, die gemessen ist!* (測定されてゐる時間を逸するな!) に於ける關係文章は、むしろ *weil sie gemessen ist* (測定されてゐるので) と云ふ理由をあらはす狀況語文章の意味を有するものである。[Gehje.]

Vielen gefallen ist eine schwindelnde Höhe, von welcher Eitelkeit leicht herabstürzt.

(多くの人に氣に入るといふことは、眩暈を催すやうな高さであつて、それから虚榮心がややもすれば墜落して來るのである; *vielen gefallen* は補足語 (*vielen*) を有する不定法である。)

Gleiß und Sparsamkeit sind die sicherste Art, wie (=auf welche) man zum Wohlstand gelangen kann.

(勤勉と節儉とは、人が富裕に達し得る最も安全な方法である。)

上掲の諸例でわかるやうに、この種の附加語文章は、その形から見るときは關係文章で、*der, welcher* (又はそれに前置詞のついたもの)、*was* 等の關係代名詞、*wo* (*worin, womit*) 又は *wie* などの關係副詞によつて導かれてゐる。悉しくは關係文章の條を看よ。

ii) 名詞的の附加語文章 (*substantivischer Attributsatz*) とは、二格の附加語的名詞又は前置詞を有する附加語の價値を有するもので、例へば、*Die Gewißheit, daß wir ewig leben werden, tröstet uns.* (われらが永久に生きるであらうといふ確信は、われらを慰める。) に於ては、*daß* から *werden* までの副文章は、*des ewigen Lebens* (永遠の生命の) と云ひ換へることが出来る

から、該副文章は二格の附加語の價値を有するものである。又 Die Frage, ob Gespenster vorhanden seien, kann kein Vernünftiger bejahen. (幽霊が存在するかどうかと云ふ問を、理性のある人はだれも肯定することは出来ない) に於ては、ob から seien までの文章は、über das Vorhandensein von Gespenstern と同じ價値であるから、これを die Frage の後につければ、前置詞を有する附加語となるのである。

【註】 文法家の中には、この種の附加語文章を認めない人もある。例へば、die Frage とか、das Gerücht (風評) とか、die Furcht (恐怖) とか云ふ名詞につゞくところの daß……とか、ob……とか云ふ副文章は、これらの動詞的名詞 (Verbalsubstantiv [M.]) のうちに存在する動詞概念 (Zeitwortbegriff [M.]) に從屬するところの補足語文章 (Objektivsatz [M.]) であると見做すべしと Menzing 氏は説いて居る。

次に三四の例をあげる。

Die Hoffnung, daß sie den Sieg davontragen würden, erhielt unsre Truppen aufrecht.

(彼等が [unsere Truppen を指す] 勝利を得るであらうと云ふ期望が、われらの軍隊の士氣を維持した。)

Mancher hat keine Ahnung davon, daß Lehren ein schweres Geschäft sei.

(幾多の人は、教へることが、一つの難かしい仕事であるといふことに就いては、少しの察しも持たない。)

【註】 上の如き文章に於ては、daß-Satz は davon にのみかゝるやうに見える。即ち此副文章は、davon の附加語文章のやうに見えるが、此際は Sütterlin の云ふとほり、davon, daß と結合して、一つのものとするのがよからう。次の例もさうである。

Seine Angst darüber, er könnte nie etwas erreichen, hat ihn furchtbar gequält.

(彼が決して何事をも達成し得なからうといふ事についての心配が彼をひどく苦しめた。)

【註】 上の er könnte nie etwas erreichen. といふ文章は、文頭に來るべき接續詞 daß を略したるもの。

Sein Verzicht darauf, daß er zuerst rede, hat allgemein befriedigt.

(彼が最初に話すといふことに對する斷念は、一般に満足を與へた。)

Die Frage, wie er zu dieser Auffassung komme, verblüffte ihn.

(どうして彼がこの考へになるかといふ問が、彼を吃驚させた。)

【註】 間接説語文又は間接疑問文に於ける可能法はこゝに於ても、勿論保存される。——又不安不確實をあらはす名詞に屬する附加語文章に於ても、さうである。例へば次の例を看よ。

Die Ungewißheit, ob sein Sohn glücklich aus dem Kriege heimkehren werde, ließ ihm keine Ruhe.

(彼の息子が無事に歸つて來るかどうかの不確實は、彼に少しの落着きをも與へなかつた。)

Die Behauptung, daß die Erde sich um die Sonne drehe, setzte Galilei manchen Verfolgungen aus.

(地球が太陽の廻りを旋轉するといふ主張が、ガリレーイをいろいろの迫害に陥らせた。)

【註】 上掲の副文章の可能法は、間接説語法から來たものであるが、間接文でも、必ずしも可能法を採るとは限らない。次の例を見よ。

Die Ursache, warum (od. weshalb) dies geschehen ist, habe ich och nicht erfahren.

(何故に此事が起つたかの原因を、私はまだ聞かなかつた。)

上掲諸例に見る如く、名詞的の附加語文章は、その形態上から見ると、接續文章・間接説話(疑問)文章の二つであるが、Weigel氏は、その文典に、可成り多くの關係文章を例示して居る。例へば、Wer sich auf Gott verläßt, des (=dessen) Hoffnung steht felsenfest. (神に信賴するものの期望は、岩の如く固く立つ。)

と云ふ文章に於ては、wer 以下の關係文章が、主文の Hoffnung に對して附加語文章となるもので、此關係を明示するために、指示代名詞 dessen が主文に置かれたものであると説く。今これを詳説すると、蓋し上の副文は des と共に働いて、Die Hoffnung des sich auf Gott Verlassenden (神にたよるものの期望) と同價値のものとなるからであらう。又 Die Menge und das Ansehen derer, die seine Person umgaben, machten seinen Wohnsitz einem souveränen Fürstenhofe gleich. (彼の人物を繞れる人々の澤山[なこと]と聲望とが、彼の住居を至尊の宮廷のやうにした。)

に於ても、die 以下の關係文章は、die Menge und das Ansehen の附加語文章となるもので、derer は兩者の關係を示し、言ひ換へれば、die Menge und das Ansehen der seine Person Umgebenden. (彼の人物を繞れる人たちの澤山[なこと]と聲望) となる。この意味で、なほ二三の例を示すと、

Wem ein offener Sinn für die Schönheiten der Natur verliehen ist, dessen Leben wird reich an Freuden sein.

(自然の美に對する打開いた感覺が與へられてゐる人の生活は、喜びに富んでゐるであらう。)

„Ich habe keine Zeit,“ ist die gewöhnliche Entschuldigung aller, die ihre Zeit nicht richtig einguteilen verstehen.

(『私には時間がない』と云ふのは、自分たちの時間を正しくわけることを心得て居ない凡べての人々の普通の言ひ譯けである。)

Ein schimpflicher Tod ist das Ende mancher, deren Erziehung in der Jugend vernachlässigt worden ist. (耻づべき死は、それらの人の教育が、少年時代に閑却されたところのあまたの人々の最後である。)

iii) 最後に一個特別の形がある。それは文章附加語文章 (Satzattribut[iv]; [W.]) と稱するもので、これは個々の詞に對してではなくて、一個の文章に對して一個の文章が附加語文章たる場合である。これは關係文章の項に出るところの前文をうける was (wozu, wodurch, womit 等) を以て初まる副文章である。

Offentlich kehrt ihr bald gesund zurück, was ich euch vom Herzen wünsche.

(望むらくは、君たちが間もなく健康で歸來することを、—それを私は君たちに祈つてゐる。)

So wisset ihr denn nicht, was im ganzen Gebiet von Fryburg und weit darüber hinaus bekannt ist, daß unsre liebe Frau ein Wunder an mir getan hat.

(それならあなたたちは實際知らないのだね、—それはフリーブルクの全地方や、それを遠く越えたところで知られてゐる事なのだが—聖母様が私に一つの奇蹟をなしたと云ふ事件を; was 以下 ist までの挿入文は、daß 以下の事を指す; 而して daß 以下は、wissen の補足語文章である; unsre liebe Frau=聖母 Maria.)

【註】文章附加語文章を導く詞は、今は was であるが、古くは welches も使用された: Ferner den Mischeberg hinauf, welches eine saubere Arbeit ist. [Goethe] (それからアッセンマルヒへと、それは一つの骨折仕事だ。)

【E】状況語文章 (Adverbialsatz [M.], Umstandsatz [M.]) は、言ふまでもなく副詞的規定の代りをなすものであるが、副詞的規定が、時・處・方法・原因の四つに大別される如く、状況語(的副)文章もまた四種に大別される。

Er kam, bevor die Sonne aufging (=vor Sonnenaufgang). [時]

(彼は日の出前にやつて来た。)

Soweit die Sonne leuchtet, (=Im ganzen Bereich der Sonne) ist niemand schattenlos. [處]

(太陽の照らす限り [太陽の(照らす)全範圍に於て]、何人も影がなくはない。)

Wie man die Ausfaat hier bestellt, (=Wie die Ausfaat hier (od. Gemäß der Ausfaat hier) so erntet man in jener Welt. [方法]

(この世にて種まけるやうに [この世の種蒔きの通りに] [此世の種蒔に應じて]、あの世にて收穫する; die Ausfaat bestellen==種まきをする。—この世にてなしたる善惡に應じて、あの世で酬られる義。)

Der Mensch kann den Weg der Tugend und des Lasters wandeln, weil er freien Willen hat (=infolge freien Willens). [原因]

(人間は自由な意志を持つてゐるから [自由意志の結果]、徳と不徳との道を歩むことが出来る。)

【註】既に主語文章その他の副文章に於て見たとほり、これらの副文章

は、何等かの方法で、名詞又は名詞句に言ひ換へて、單文章の一成分となすことは出来るけれど、この言ひ換へは、極めて大體を寫す丈で、副文章にあらはれた細かい點は、移し得ることが多い。例へば、Daß der König gefiegt hat, ist gewiß. (王の勝つたことはたしかだ。)に於ける副文章を、名詞に云ひかへれば、Der Sieg des Königs とはなるけれど、これでは「時」の觀念が、充分にあらはれて居ない。又 Woher die Seiden auch kommen mögen, trage sie mit Geduld. (苦難がどこから來やうとも、それを辛棒して忍べよ。)に於て、この副文章を名詞になほして、Trog der Seiden では、あまりに簡單だし、bei jedem Ursprung des Leidens (苦難のどんな起源にあつても)では、や、ぎこちなく感ぜられ、共に原意を充分に寫しては居ない。だから副文のかゝる言ひ換へは、器械的でまた不十分な事が多いと心得ておかれねばならぬ。

次には時・處・方法・原因の順序で、一わたりその意味の副文章の例をあげるが、必要ない限り、細説はしないつもりである。

【I】時の状況語文章 (Temporalsatz [M.], Zeitatz [M.])

Als Menelaus den Räuber seiner Gemahlin erblickte, geriet er in Zorn.

(メネラーウス [王] が彼の妃 [ヘーレナ] の強奪者 (パリス) を見たときに、彼は憤怒に陥つた。)

Solange der Mensch jung ist, will er auf niemand hören.

(人間が若い間は、何人の云ふ事も、聞かうとはしない; auf einen hören=或人の云ふ事に耳を假す。)

Nachdem Epaminondas gestorben war, verloren die Thebaner ihre Macht.

(エバミノンダスが死んだ後、テーベ人はその勢力を失つた。)

Bevor der Retter erschien, versank der Nachen.

(救助者があらはれる前に、小舟は沈んだ。)

【註】詳細は、接續文章の各項に就て見よ。

〔II〕 處の狀況語文章 (Ortsatz [M.], Lokalsatz [M.])

Nicht überall, wo Wasser ist, sind Frösche; aber wo man Frösche hört, ist Wasser.

(水のあるところでは、どこにも蛙がゐると云ふわけではないが、蛙の聲の聞えるところには、水はあります。)

Wo viele Feinde sind, da ist viel Ehre.

(多くの敵のあるところには、多くの名譽がある。)

【註】略して Viel Feind', viel Ehr'! と云はれてゐる。

Ich reife dahin, wo er ist (wohin er geht, woher du kommst).

(私は彼の居るところ〔彼が行くところ、お前がそこから來るところ〕へ行く。)

〔III〕 方法の狀況語文章

(Modalsatz [M.]; Adverbialsatz der Art und Weise)

方法の副詞的規定の種類については、副詞的規定の項で述べられてゐるが、その細則はこゝにも適用され得るから、種類について繰返へして云ふ必要はない。僅かに數個の例をあぐるに止める。

Endlich sagte ich Ja, indem ich die Beistimmung meiner Eltern zur notwendigen Bedingung machte.

【Goethe】〔狹義の方法〕

(とうとう私は、私の両親の賛成を、必要な條件として、承諾した。)

Man muß nicht reicher scheinen wollen, als man ist.

【Lessing】〔比較文章〕

(人は自分が實際あるよりも、もつと金持ちのやうに見えようと思つてはいけない。)

Es sieht aus, als wolle dieser Mensch uns neue Götter verkünden. 【Luther】〔同〕

(この人はわれらに新しい神々を宣べ傳へやうとするかに見える。)

Es hat schon seit mehreren Woche so stark gefroren, daß alle Gewässer mit Eis bedeckt sind. 【結果文章】

(數週間前から既にひどく凍てるので、すべての湖川は氷で蔽はれてゐます; Gewässer=河海湖沼。)

Er verließ uns, ohne daß er von unsern Bitten gerührt worden wäre. 【同】

(彼はわれらの願ひによつて動かされないうで、われらのところを去つた。)

〔IV〕 原因の狀況語文章

(Kausalsatz [M.], Adverbialsatz des Grundes)

原因の副詞的規定も、いろいろに細別されることは既に述べた。それらの細別が、こゝでも適用されることは、〔III〕と同じである。

Weil es regnet, bleiben wir zu Hause. 【原因】

(雨が降るから、われらは在宅する。)

Darum eben leih' er keinem, damit er stets zu geben habe. 【目的】

(彼はいつも與へるものを持つてゐるために、正にそのために、彼は誰れにも金をかさない。)

【註】 darum eben=eben darum; darum は、副文の damit と相呼應する。

Falls sein Zustand sich verschlimmert, schide mir Nachricht. [條件]

(彼れの容態がわるくなつたら、私に知らせて下さい; schide [送れ] は命令法。)

Mancher hält sein Wort nicht, wiewohl er es verpfändet hat. [認容]

(幾多の人は、言質を與へても、約束を守らない; wiewohl=obgleich; das Wort verpfänden=言質を與へる。)

Wie groß die Gefahr auch ist, ich will sie bestehen. [同] (危険がいかに大きくとも、私はそれを凌がうと思ふ)

3. この項に於ては、上掲五種の副文章の主文章に対する位置について述べようと思ふ。

由來五種の副文は、その價值に於て、五個の文章成分を代表するものであるから、その位置も亦、自らの代表する成分の置かるべきところに位置するのが原則である。それと共に、單文章に於て、これらの五成分の位置に對して、許されたる移動的位置も、また出來得る限り認容されなければならない。これを原則として個々の種類に就いて見ると:

a) 主語文章は、主語の居るべき位置、即ち文頭に位置する。即ち前文章 (Vorderatz [M.]) の形を採るのである。

Was er sagt, ist richtig. (彼の云ふ事は正しい。)

Daß er das Wort übel genommen hat, wundert

mich. (彼がその言葉を悪く取つたのは、私を不思議がらせる; 云々を私は不思議に思ふ。)

然し單文章に於て、主語を強調せんがために、主語の普通に居るべき位置に、文法上の主語 es を置き、自らは後退して、文末又は文末に近い位置に来るように、主語文章もまた、複合文章の文頭に es を置いて、自らは退いて、後文章 (Nachatz [M.]) の形態を採る。

(I) 單文の例。

Es irren in Fällen von so mißlicher Natur selbst weisere Männer.

(かくもむづかしい性質の場合(事件)に於ては、より賢い人すら迷ふのである。)

【註】 平らに云へば、Selbst weisere Männer irren in Fällen von so mißlicher Natur. となるのである。

Es haben in Fällen von so mißlicher Natur selbst weisere Männer geirrt.

(かくもむづかしい性質の事件に於ては、より賢い人すらも迷つたのである。)

(II) 主語文章の例。

Es ist eine verbreitete Ansicht, daß der Mond auf die Bitterung Einfluß übt.

(月が天氣模様に影響を持つと云ふことは、廣くひろがつた意見である; auf etwas [四] Einfluß üben=或ものに影響を及ぼす。)

【註】 之は勿論、Daß der Mond auf die Bitterung Einfluß

übt, ist eine verbreitete Ansicht. に於ける前文章を云ひかへたものである。

Es steht dahin, ob mein Bruder auch kommen wird.
(私の兄弟もまた来るであらうかどうかは未定である;
dahin stehen=to remain to be seen=未定である。)

【註】 これもまた、Ob mein Bruder auch kommen wird, steht dahin. に於ける前文章を、後文章にしたものである。

この es は疑問文の場合にも、消失しない。

Ist es denn so nötig, daß er sich entfernt?
(彼が遠ざかるのは、一體そんなに必要なのか?)

客語名詞又は客語形容詞が強調のため、文頭に來るときには、特に es を有する形が愛用される。

Möglich (od. Eine Möglichkeit) ist es, daß er morgen kommt. (彼が明日來ることは、可能である。)

但しこの場合は、客語を強調するためであつて、若し主語文章を強調する必要がある場合には、es を除く習慣である。

Möglich (od. Eine Möglichkeit) ist, daß er morgen kommt. (彼が明日來ることは可能である; ist にアクセントがある。)

Fraglich (od. Eine Frage) ist, ob meine Eltern seiner Meinung beistimmen werden.

(彼の意見に私の両親が賛成するであらうか、どうかは疑問である; ist 同上; bestimmen は三格を要求する。)

又主文中の客語形容詞又は客語名詞のみが、残留してゐる形もある。

Gewinn genug [ist es], wenn wir nur soviel erreichen.
(われらがそれ丈到達しさえすれば、充分の利得だ。)
Bergebens [war es], daß ich durch Hin- und Hergehen mich zu erwärmen suchte.
(私があちこち歩いて體を暖くしようとしたことは無駄であつた。)

【註】 Mein Haupteinwand gegen ihn ist der, daß er so selbstisch ist. (彼に對する私の主なる反對は、彼が甚利己的と云ふ事である) に於ては、上掲の es の代りに、Haupteinwand の性に應ずる指示代名詞が使用されて居る。かゝる例は、乏しくはない。此際主語が女性ならば、ist die となる事は言ふまでもない。

b) 客語文章については、前掲の事柄のほか、特に云ふべきことはない。

c) 附加語文章についても同様であるが、前行詞と出來得る限り密接におかれるがよろしい。しかし意味が誤解されない限り、口調よくば、前行詞と附加語文章との間に、二三の詞の挿入されることは差支へない。例へば、Notwendig wird der Edle alles, was niedrig und gemein ist, hassen. (必然的に、氣高い人は、低級卑俗なるすべてのものを憎むであらう。)と云ふ文章は、勿論正しいけれど、Notwendig wird der Edle alles hassen, was niedrig und gemein ist. と云つた方が、耳に快く、且つ意味の明瞭をも妨げない。

時々附加語文章が先行する事があるが、これは主文よりも、副文の方が、より大なる重要さを持つ時に於て行はれるのである。

Ob auch die Fixsterne den Kepler'schen Gesetzen gehorchen, diese Frage ist jetzt mit ja nicht zu beantworten.

(恒星も亦ケプレルの法則に従ふかどうか、この問題は
今然りとは答へられない。)

d) 補足語文章の位置についても、大體は單文章に於ける補
足語の位置についての規則が適用される。即ち普通は、後文章
又は間文章となるのであるが、特に注意すべきことは

i) 主文が強調さるべき場合には、それが後退して、補足語
文章が前進する。

Wie groß die Erde eigentlich ist, das weiß man erst
seit verhältnismäßig kurzer Zeit.

(地球が本來どの位大きいかを、人々は比較的近い時代
に漸く知つた; seit kurzer Zeit=短い年月以來; weiß=過
去から現在についてゐる有様を云ふ現在。)

ii) 三格の補足語文章は、四格のそれに先行する。

Sage allen, die nach mir fragen (三), daß es mir
wohlgeht (四). (私の事をたづねる凡べての人に云つて
呉れ、私は無事息災であると; daß 文章は四格の補足語
の價值を持つてゐる。)

【註】 四格の意味の副文の代りに、四格の名詞が用ゐられるときも、同
様である。

Berjage denen, die unverschuldet in Not geraten, deine
Unterstützung (四・名) nicht!

(罪なくして窮困に陥つた人たちに、おんみの扶助を拒むこと
なかれ!)

但し三格の意味の副文 (Datibjakt [四.]) が強調される場合に
は、それは後退して、後文章となる。

Die höchste Vorsicht (四・補) rat' ich euch, die ihr nach
hohen Dingen strebt.

(最高の用心を私は、高い事物に向つて努力するところ
の君たちにすゝめる; einem etwas raten=或事をなすや
うに、或人に勧める。)

iii) 引用文・直接説話等は、普通は、主文の後に來るが、そ
れが強調せられるときには、前文章となるか、或は主文によつ
て中斷される。

„Noch einen solchen Sieg, und ich bin verloren!“
rief Phrykus.

(『もう一度こんな勝利を得て見ろ、おれの萬事は休する
ぞ!』とピュルスは叫んだ。)

„Noch einen solchen Sieg,“ rief Phrykus, „und ich bin
verloren!“

iv) 以上は、補足語文章が、客語動詞に關係する場合である
が、客語形容詞に關係するときは、大抵後文章となる。

Ich bin nicht wert, daß ich dein Sohn heiße. (Luther)
(私はおんみの息子と呼ばれる價值はない。)

e) 最後に狀況語文章の位置について述べるのであるが、こ
れに就ても、i) 單文章に於て、副詞的規定が入るべきところ
に、据ゑられるのが原則である。例へば、Ich aber nach dem
Theater dachte an Hamillax. (私は然し芝居がすんだ後で、ハミ
ルカ〔カルターゴの人名; こゝではハン=ハルの父のことならん〕
の事を考へた。) と云ふ單文に於ては、副詞的規定たる nach
dem Theater の置きどころは間違ひで、この副詞的規定は、少
くとも定動詞の後に來なくてはならぬ。即ち、Ich aber dachte
nach dem Theater an Hamillax. とするか、又は文頭に置いて、

Nach dem Theater dachte ich aber an Hamillar. としなければならぬ。副文章に於ても、これと同じ理窟で、Ich aber, als das Schauspiel beendigt war, wiederholte in meinem Sinne die Worte, die der Karthaginischer Hamillar gesprochen. [Börne] (私はしかし演劇が終つたときに、心のなかで、あのカルターゴ人ハミルカアの話した言葉を繰り返へした。)と云ふ文章に於ては、時の状況語文章の置きどころが正しくない。これは少くとも、定動詞の後ろにして、Ich aber wiederholte, als das Schauspiel.....war, とするか、文頭に持つて来て、Als das Schauspiel beendigt war, wiederholte er.....とすべきである。又 Hannibal, da er sich auf die Ketten Oberitaliens stützen wollte, wählte den Weg über die Alpen. (上伊太利のケルト人に頼らうと欲したので、ハンニバルはアルプス越えの道を選んだ。)に於ては、da 以下の副文章の置きどころが間違つてゐる。上と同じやうに、Hannibal wählte, da er sich auf die Ketten Oberitaliens stützen wollte, den Weg über die Alpen. とするか、又は副文章を主文の前に置いて、Der sich Hannibal auf die Ketten Oberitaliens stützen wollte, wählte er den Weg über die Alpen. とするか、又は副文章を全然後文章にする。然らずんば、Hannibal, da er sich.....wollte を改めて Hannibal, der sich.....wollte とする; 即ち状況語文章を改めて、關係文章にするのである。兎に角與へられたる原文は、上掲四個の方法のうち、いづれか一つによつて改められなければならぬ。即ち間文章は、それが關係文章でない限り、少くとも定動詞を自らの前に据ゑなければならぬのである。

【註】 上の如く、主語の直後に副文章を置くのは、ラテン語法 (lateinische Wortstellung) と云はれるもので、獨逸的の云ひ方ではな

いけれど、一時は昌人に行はれたものである。例へばクライスト (F. v. Kleist) や、グリム (Grimm), メーリケ (Mörike) の如き文士が、屢之を使用してゐる。„Kohlhaas aber, als die Frau zu ihm eintrat, meinte an einem Siegelring die alte Zigeunerin wiederzuerkennen. [Kleist] (コールハースは然し、この婦人が入つて来た時、印章付きの指輪でもつて、昔しのチゴイネルの女を再び認めると思つたのである)。 または、Mozart, nachdem man ausgestiegen, überließ der Frau die Bestellung des Essens. [Mörike] (モーツァルトは人々が下車した後に、いつもの通り食事の注文を妻に委せた。) などがそれである。

iv) 状況語文章が強調せられる場合には、それは後文章となる。

Ich will dich führen lassen und verwahren, wo weder Mond noch Sonne dich bescheint. [Schiller]
(私はお前を、月も日もお前を照さざるところに、お前をつれて行かせ、そして守らせておかうと思ふ。)
Das Leben überwiegt alles, wenn die Liebe in seiner Seele liegt.
(愛が彼れの心のうちにあれば、生は何ものよりも重いのである。)

原因・條件・認容をあらはす副文章及び方法の副文章は、大抵は先行する。蓋しこれらの副文で云はれたことの結果なり結論なりが、主文で云ひあらはされるから、思考の順序の上から云ふと、副文を先きにするのが順當だからである。

Weil die schöne Jugendzeit nie wiederkehrt, so sollte sie jeder treulich benutzen.

(美しい青春時代は二度と再び歸つては來ないから、人々はこの誠實に利用すべきであらう。)

Willst du die andern verstehen, blick' in dein eigenes Herz. [Schiller]

(おんみ他人を理解せんと欲するならば、おんみ自らの心中を眺め見よ。)

v) 状況語文章が先行するときには、主文は倒置法の語次を採るのが通則であるけれど、既に述べた通り、認容文章(稀れには單なる Wenn 文章)が先行する時、主文は往々正置法に依ることがある。

Wo er auch sei, ich werde ihn zu finden wissen.

(どこに彼が居やうとも、私は彼を見つけ出すことが出来るであらう; etwas zu tun wissen=etwas tun können).

[認容文章の例]

Mag es recht oder nicht recht sein, ich werde es nicht tun.

(それが正しからうと正しくあるまいと、私はそれをしないであらう。)[認容文章の例]

Wenn ich wollte, ich könnte ihm recht Böses tun.

(若し私が欲するならば、私は彼に眞に多くの害を加へることが出来るやう。)[單なる Wenn 文章の例]

【註】I. 但し眞實の事實をあぐる obgleich を有する副文の後では、正置法になることはない。

【註】II. 後續主文でも、或副詞成分を主文の文頭に置くことが出来る。その際は云ふまでもなく、倒置法に依る。

Stets übe deine Kraft, ist sie dir gleich bekannt (=wenn sie dir gleich bekannt ist).

(おんみの力がおんみに知られて居ようとも、いつもそれを練り鍛へよ!)

vi) 最後に、状況語文章は、一つ文け文頭に立ち得ること、一個の副詞的規定が文頭は立ち得ると同じ譯であるが、同一種類の副詞的規定なら二個またそれ以上が文頭に立ち得ると同じく、状況語文章もそれが同一種類のものである限り、二個又は二個以上主文に先行することが出来る。此規則は、一つが副詞的規定であり、他のものが状況語文章である場合にも適用される。例へば、Wenn der Kranke erregt wurde, wenn er mit seiner Nervosität sich und andern lästig fiel, so nahm sie das geduldig ohne ein Wort der Klage hin. (病人が興奮した度毎に、また彼がその神經過敏でもつて、自分や他人を煩はした度毎に、彼女はそれを辛抱強く甘受した。)と云ふ複合文章に於ては、主文の前に二個の状況語文章があるけれど、共に同一種類の(即ち「時」の)状況語文章だから、構はないのである。また Am Morgen, während ich mich wusch und anleidete, erzählte sie mir dann, was ihm geträumt hatte. (朝、私が顔を洗ひ、衣服を着かけてゐる間に、彼女は彼がどんな夢を見たかを、私に物語つた。)と云ふ文章に於ては、am Morgen と云ふ副詞的規定と、während.....anleidete と云ふ副文章とは、共に時をあらはすものだから、主文の前に並び立つてよろしいのである。然るに Sobald er ein Stückchen Brot bekam, obwohl er selbst großen Hunger hatte, teilte er es seinem Hunde. (彼は一片のパンを得るや否や、彼自身非常に空腹ではあつたけれど、それを犬に分けてやつた。)と云ふ文章は正しくない。何となれば種類を異にする二個の状況語文章が、文頭に置かれてゐるからである。即ち sobald を有するものは「時」の状況語文章であり、obwohl を有するものは「認容」を示すものである。だからこれを改めて、Sobald er ein Stückchen Brot bekam, teilte er es mit seinem Hunde, obwohl er selbst

großen Hunger hatte. とするか、obwohl を有する副文章を前に、als を有する副文章を後ろに置き、主文を中央に据ゑるかである。

但し、第二の副文章が、第一の副文に従屬してゐる場合は、云ふまでもなく別である。例へば、Sobald er erfuhr, daß seine Mutter krank wurde, machte er sich auf den Heimweg. (彼は、彼の母が病氣になつたことを聞いたときに、彼は歸途に就いた。) に於ては、daß 文章は、第一の副文に従屬するものであるから、この順序で勿論よろしいのである。

4. 更に主文と副文との關係について注意すべきことは：

(A) 副文が主文に先行する場合に、兩者の主語が同一事物たるときは、名詞は副文に於て用ゐ、主文には代名詞を用ゐる方がよろしい。これは、理解を容易ならしめんがためである。

Als der Doktor den Kranken zu Gesicht bekam, schüttelte er mit dem Kopf.

(醫師は病人を見たときに、彼は頭を振つた； einen zu Gesicht bekommen=或人を見る； mit dem Kopf schütteln=den Kopf schütteln=頭を振る。)

然し、副文が間文章となつてゐる場合は、これの主語を代名詞にしてよろしい。

Der Doktor schüttelte, als er den Kranken zu Gesicht bekam, mit dem Kopf.

副文が後文章なるときは、勿論代名詞でよろしい。

Der Doktor schüttelte mit dem Kopf, als er den Kranken zu Gesicht bekam.

(B) 副文が先頭に立ち、これに直ちに後續する主文の語次は、屢述べたとほり倒置法ではあるけれど、この主文に und 又は oder を以て連續する主文の語次は正置法である。

Als er zurückkam, war sein Gesicht stark verweint und er schloß sich mehrere Stunden in sein Zimmer ein.

(彼が歸つて來たときに、彼の顔はひどく泣き崩れてあつた、そして[それから]數時間、室に閉ぢこもつた。)

第二の主文の先頭に、倒置を引き起すべき詞の來たときは、云ふまでもなく、倒置法となる。

Während wir beim Essen saßen, farbte sich der Himmel immer dunkler, auch verschwand die Sonne.

(われらが食事をしてゐた間に、空は段々暗くなつて、太陽もまた消えた； sich färben=色づく； auch が文頭にあるから主文は倒置法を採つたのである。)

【注】 なほ副文と主文との配置については、複雜複合文章の條で、今一度述べるであらう。

5. 次に述べるのは、副文章の語次である。

副文に於ける語次が、貶置法に依るべきものであつて、先頭に從屬的接續詞を置く以外に於ては、正置法又は倒置法に行はるべき法則が、こゝでも通用するものであることは、既知の事實であらうと思ふ。こゝでは、それ以外に於て注意すべき二三の事項を掲げるつもりである。

(A) 副文章に於ては、定動詞の後に、往々あまり重要ならざる副詞的規定が來る。例へば、Wenn der Kaiser nicht sofort nach Wien geht unter die Demokraten. (Laube) (もし皇帝が直ちにヴェーンへ行つて、民主黨員の間に入らなければ) に於

ては、nach Wienの方は重要だが、unter die Demokratenはさほど重要ではないからである。又 Gib ihm einen Tellervoll zum Lohn, daß er mich zum Lachen gebracht hat mit seiner Schlaueheit. [Hans Hoffmann] (彼がその狡猾(さ)さを以て私を笑はせた禮として一皿あの人にあげるがよい。)に於ても、mit seiner Schlaueheitは、左程重大でないから、かく後置されると見られ得やう。

然し副文に於ける或副詞的規定のかゝる後置は、必ずしも意味の重要非重要な關係からのみ、來るものではない。

【註】意味の重要非重要さから説明するのは、Behaghel氏であるが、これも勿論一つの説明には違ひない。——なほ序でに擧げるのであるが、單文にも、かうした副詞的規定の後置はある。Curme氏は、これを二つの原因から説明する。即ち(1)雄健な散文では、重要な限定詞を、特に文末に抽出し、(2)俗語に於ては、非重要な限定詞を、後置するのである。前者の例は、Sie haben Ihr Lebensglück geopfert um meinerwillen. [Eudermann] (あなたはあなたの生涯の幸福を、私のために犠牲にした)。後者の例は、Ich behaupte, auf wen dein Vater einwirkt, der kann gar nie gänzlich verfluchen im Leben. [Hauptmann] (私はその人の上に、君のお父さんが働きかける人は、生涯に於て平凡化することは、決して全くあり得ないと主張します)だと云つてゐる。なほ氏は、別に躊躇(suspense)の感じをあらはすために、或ものを後置することがあるとしてゐる。これは、至極尤な説明である。Ich werde euch etwas Neues erzählen — von Fritz. (私は君たちに或新しい事柄を話ませう——フリッツについて。)

この後置は、打解けた氣樂(きらく)な民衆的調子の散文——殊に會話などに、多く發見されるやうである。例へば、Sieh doch, wie es gegangen ist mit dir! とか、Es gibt so viel Dummheit in

der Welt, daß man sich immer freuen muß über eine kleine Ausnahme. [Hans Hoffmann] (世の中には、人が小さい除外例をいつもよろこばなければならないほど、澤山の馬鹿げた事がある。)などに於ける如きがそれである。

【註】もつと前進した定動詞の置き方もある。Es ist nicht anzunehmen, daß dies lebendige, unendlich alte Daseinsgefühl nicht sollte schon Körper gehabt haben, Mensch gewesen sein. [W. Scholz] (この生々(きんげん)した無限に古い生存感が、すでに肉體を取つたこと、人間であつたことがあつてはならぬと云ふことは承認され得ない。)と云ふ文章で見るに、正しくはsollteは、文末に來るべきであるが、大變前進してゐる。かうした躍進的進出の例は、話法の助動詞に多いらしく思はれる。

(B) いくつかの副文が und 又は oder によつて連結されるときは、これらの接續詞の後に於ては、正置法に歸らうとする傾きがある。例へば、Ich mag das nicht, wenn einer aus meiner Küche kommt und hat noch eine Ede im Magen leer. [Hans Hoffmann] (私はだれかが私の臺所から出て來て、胃袋の一隅がまだ空いてゐるなら、私はそれを好まない。)に於ては、副文は悉しく云ふと、wenn einer aus meiner Küche kommt und wenn er noch eine Ede im Magen leer hat で、第二の副文の wenn er は、前の副文と共通だから、それを除けば(これについては次の章に於て「省略」を説く場合に述べる筈である)、第二のものは und noch eine Ede im Magen hat となるべきであるのに、hat は前進して正置法の位置を取つてゐる。次の文例に於ける hat も同様である。

Wer einen solchen Schritt unternimmt und den immer noch fest gefügten Bau der Kirche zertrümmern will und

hat sich nicht besser alles vorher überlegt, der kann sich nur lächerlich machen.

(かゝる行を企て、教會のなほ依然として堅固に作られた建物を破却しようとする、しかも萬事をもつとよくあらかじめ熟考して置かなかつたものは、只自らを物笑ひにするだけだ。)

(C) 副文に於ては、定動詞は文末に来るのが常則だけれど、二個の不定法が存するときには、定動詞はその前に立つことは既に述べた。

Er fand kein Tier, das er hätte kaufen mögen. (Scholz)
(彼は買ひたかつたような動物は、一つも見つけ出さなかつた。)

Ich weiß nicht, ob ich die Seereise und das Neue alles werde aushalten können. (Scholz)
(私は航海と、それから新らしいこととを、みんな耐え忍び得るかどうか、自分でもわからない。)

【註】 否定の副詞 nicht は、此場合定動詞の前に置かれる。

Weil er mir nicht hat arbeiten helfen,.....
(彼が私の働らくのを手助けしなかつたので、.....)

但しこの際、不定法を強調しようと思ふときには、それを定動詞の前に置く。

Nicht weil sie ihm schützen hätten können, nein! (Bartisch)
(彼等が彼を保護し得ただらうと云ふわけではなく、否、さうではなく!)

Man sagt, daß Österreich „zerfiel.“ Nein: es war gar nichts da, das es nicht „zerfallen“ hätte können. (Bab)

(人々は城壁が崩壊したと云ふ。否々：今になつてなほ崩壊し得たやうなものは、何んにもそこに存在してはゐなかつた)

(D) 副文中に於ては、代名詞の補足語又は再歸代名詞は、主語の前に置かれ得ること、倒置文と同じである。

Während ihn die Rache sucht, genießt er seines Frevels Frucht. (Schiller)

(復仇が彼を探してゐる間に、彼は自らの悪行の結實を楽しんでゐる。)

Er sah mich verwundert an, vielleicht, weil ihn der fremde Aktzent aufgefallen war.

(彼は不思議相に私を眺めた、恐らく、聞き慣れぬアクセントが、彼に變に聞えたからだつたらうが。)

【註】 I. 主語が代名詞のときには、此前置法をしない例である。但し不定代名詞には、次のやうな例がある。

Ich liebe ihn auch, wie ihn alle lieben.
(私は彼を萬人が愛するやうに愛する。)

【註】 II. 再歸代名詞が主語の後に來るときには、むしろそれが強調されるべきである。

Daß das Pflänzchen sich auswächst, während wir leben, das dürfen wir nicht hoffen. (Hauptmann)

(われらが生きてゐるうちに、此小さい植物が充分に生長することを、われらは期待してはならない。)

(E) 名詞補足語も、副文の主語に先立つことがある。これには主語を強調するための時と、補足語を強調する時とがある。

In einem Lande, wo den Frieden die Armee beschützt, wird der Plan der Abrüstung schwerlich allzuviel Anklang finden. (軍隊が平和を守つてゐるところの或國に於ては、軍縮の計畫はあまり多くの賛同を得る事はむづかしからう。) Der Wert seiner Publikation beruht allein auf den drei Schriftstücken, von denen das mittlere wir nur durch ihn kennen. (彼の出版物の價値は、單に三つの著作文に基くのであるが、それらのうちの眞中のものを、われらは只彼によつて知つてゐるだけである。)

【注】 上掲の二例は、Curme 氏の擧げるところで、氏に依ると、初めの例は die Armee の強調、次の例は das mittlere の強調であるが、かゝる見別けは、——耳でよくきゝわけぬ限り、——われら邦人には、極めてむづかしい事だと思ふ。

(F) 副詞的規定も、往々副文の主語の前に置かれ得る。
 Habt Ihr denn jeder Ahnung Euch verschlossen, daß über Schuld und Unschuld ein rettend, rächend Wesen schwebt? (罪と無罪との上に、救ひの、復仇の靈が翔つて居ると云ふ各の豫感に對して、あなたはあなたの心を閉したのであるか?; rettend, rächend は rettendes, rächendes の義である。)

Wie heutzutage in unserer und durch unsere Weltliteratur die Gegensätze der zivilisierten Nationen aufgehoben sind, so hat die griechische Dichtkunst das dürftige und egoistische Stammgefühl zum hellenischen Volksbewußtsein und dieses zum Humanismus umgewandelt. (Mommsen)

(今やわれらの世界文學において、又われらの世界文學によつて、開明せる諸國民の諸對立が撤廢されてゐるやうに、希臘の文藝は貧弱な而して利己的な種族感を、希臘

の民族意識に、而してそれをフマニスムス〔人本主義〕に變へたのである; 序でながら: hellenisch と hellenistisch とを區別せよ; 前者は「希臘の」、後者は「東洋文明と融合したる希臘文化の」の義である。)

6. 副文だけで、主文のない形があるが、これは何等かの主文が略されたものと見なければならぬ。例へば、Daß er immer noch nicht kommt. (彼はなほ依然として來ないこと)と云ふ文章は、主文として Ich wundere mich (私は不思議に思ふ)と云ふ文章があるべきのを略したもので、咄嗟の發言、活潑なる疑問又は感動をあらはすものには、かく主文の省かれたものが多い。又その二三の例をあぐれば、

Daß er doch bald käme! [wünschte ich.]
 (彼がすぐに來ればいゝ [と私は願つてゐる]。)
 Wenn er nur bald käme! [würde ich mich freuen.]
 (彼がすぐに來てくれるなら [私は喜ぶのだが]。)
 [Sie fragen mich] Ob ich ihn kenne!
 (私が彼を知つてゐるか [お問になるのですな]!)

【注】 第一の文の doch, 第二の文の nur は、かく現状に反對する希望を示す文に使用されるもの; 又第三の文は、驚きを示してゐる。なほかゝる省略についての詳細は、「省略」を述べる章に仰ぐ。 (第八章参照)

第 六 章

副 文 の 短 縮

1. 前章に於ては、意味によつて副文を分けて、五種となしたが、今改めてこれを、それらが云ひあらはす概念 (Begriff [M.]) によつて分けて見ると、上掲五種の副文章は、實は三種の範疇に包攝せられるのである。即ち主語文章・補足語文章及び名詞的附加語文章の三つは、その概念上名詞の價値を有するものであるから、これを名詞(的副)文章 (Substantivsatz, Hauptwortsatz) と云ひ、形容詞的附加語文章は、その概念上形容詞の價値を持つものであるから、これを形容詞(的副)文章 (Adjektivsatz, Eigenschaftssatz [M.])、狀況語文章は副詞の資格を有するものだから、これを副詞(的副)文章 (Adverbialsatz, Umstandssatz [M.]) と稱する。

【註】 主語文章の何であり、狀況語文章のどんなものであるかを、既に知悉した人には、「名詞の價値」とか、「副詞の資格」とか云ふ言葉の意味を再説する必要もあるまいと思ふ。何となれば、それらの意味については、前章五個の副文章を説明する場合に述べられてあるからである。然し念のため、極めて簡短に解説すると、*Das Magdeburg zerstört wurde, war nicht Gustav Adolfs Schuld.* (マールブルク[市]の破壊されたのは、グスタフ・アドルフの罪ではなかつた) に於ては、主語文章たる *das* 文章は、*die Zerstörung Magdeburgs* であり、*Der schönste Lohn für den guten Bürger ist, daß sein Streben von seinen Mitbürgern anerkannt wird.* (良き市民にとつての最も美しい報酬は、彼の努力が全市民たちに承認されることである) に於ては、客語文章たる *das* 文章は、*die Anerkennung seines Strebens von seinen*

seiner Mitbürger (彼の全市民たちからの彼の努力の承認) であり、*Die Gewißheit, daß wir ewig leben werden, tröstet uns.* (われらが永遠に生きるであらうと思ふ確信がわれらを慰める) と云ふ文に於て、*das* 以下の名詞的附加語文章は、*des ewigen Lebens* の義であり、*Lehre mich, was du von ihm gelernt hast!* (おんみ彼から學んだことを私に教へよ) に於て、*was* 以下の副文は、*die von ihm empfangene Wissenschaft* (彼から受けた學問) と同じ資格である。即ち以上の四つは、云ひかへると皆かやうに名詞となり得るものであるから、これを「名詞文章」といひ、*Die Schüler, die besonders fleißig sind, werden öffentlich belobt.* (特に勤勉な生徒たちは公然と賞せらるる) に於て、形容詞的附加語文章たる *die besonders fleißig sind* を云ひなほして *die besonders fleißigen* となして、これを前に置くことが出来るから、これを「形容詞文章」といひ、*der Mensch strebt, solange er lebt, nach dem Glücke.* (人間は生きてある間は、幸福を得ようと努力する) に於て *solange er lebt* は副詞 *zeitlichens* (一生運) と同意義だから、これを「副詞文章」となすのである。

2. さて副文中の或ものは、その意味を變へないで、その形を短縮することが出来る。これを副文の短縮 (Verkürzung [K.]) と稱するのである。例へば、*Er behauptet, daß er heute immer zu Hause gewesen ist.* に於ける *das* 文章を短縮して、*Er behauptet, heute immer zu Hause gewesen zu sein.* (彼は今日いつも在宅してゐたと主張した。)となし、*Auch die Schwachen werden mächtig, wenn sie verbunden sind.* (弱者どもでも結合すれば強くなる) の副文章を短縮して、*Verbunden, werden auch die Schwachen mächtig.* とするが如くである。次には上述三種の副文の各について、その短縮法を述べよう。

3. 第一は、名詞文章の短縮法であるが、まづ最初に考ふべ

きことは、いづれの名詞文章も短縮し得る譯ではなく、たゞ daß を有する名詞文章のみに、その資格があると云ふ一事である。又 Daß 文章がみな短縮されると云ふ譯ではなく、第一の條件は、その上に主文と副文との主語が同一だといふ事である。この場合には、副文の主語を略し、その定動詞を不定法にし、これに zu (to) をつける。

Er hat das Lob, daß er ein besonders fleißiger Student sei. [附加語文章]=Er hat das Lob, ein besonders fleißiger Student zu sein. (彼は特に勤勉であるといふ賞讃を有してゐる[……と褒められてゐる。])

Ich erinnere mich nicht, daß ich ihm Besuch gemacht habe. [補足語文章]=Ich erinnere mich nicht, ihm einen Besuch gemacht zu haben. (私は彼を訪問したことを覚えて居ない。)

副文にある話法の助動詞は、短縮の際、省くのを常則とする。

Er versprach, daß er heute abend wieder kommen wolle. [補足語文章]=Er versprach, heute abend wiederzukommen. (彼は今夕また来ようと約束した。)

【註】 未來の werden もまた省かれる。

Ich hoffe, daß ich das Werk vollbringen werde. =Ich hoffe das Werk zu vollbringen. (私は、自分が仕事を仕上げるのであることを期待する。)

名詞文章を短縮するにあつての第二の條件は、副文の主語が主文の主語と同一ではなくとも、それが主文の或副成と同一なものをあらはしてゐることである。而して短縮法は、勿論上述のとほりであり。

Der Wunsch, daß er selbst einmal eine Bibel besitzen möchte, ward Luther erfüllt. [附加語文章]=Der Wunsch, selbst einmal eine Bibel zu besitzen, ward Luther erfüllt. (いつかは自分で聖書を所有したいといふ願ひがルテルに成就した; Luther は三格; erfüllt werde. =實現される。)
Die Feinde des Alkibiades beschuldigten ihn, daß er die Götter beleidigt hätten. [補足語文章]=Die Feinde des Alkibiades beschuldigten ihn, die Götter beleidigt zu haben. (アルキビアーデスの敵たちは、彼が神々を侮辱したといふ罪を彼にきせた。)

Es war mir angenehm, daß ich ihn wieder sah. [主語文章]=Es war mir angenehm, ihn wiederzusehen. (彼に再會したのは愉快であつた。)

Es freut mich (od. Es macht mir Freude), daß ich Sie wieder gesund weiß. [主語文章]=Es freut mich (od. Es macht mir Freude), Sie wieder gesund zu wissen. (貴君にまた後丈夫なのを承知いたして喜ばしく思ひます。)

短縮され得る名詞文章の第三の條件は、上述二個の資格なくとも、副文の主語が不定代名詞 man である場合は、上記の手續で短縮され得る。

Es ist nicht gut, daß man allein ist. [主語文章]=Es ist nicht gut, allein zu sein. (單獨で居るのは良くない。)

かく短縮された副文章は、最早文章たる形を失つては居るけれど、矢張不定法文章 (Infinitivsatz [無.]) と呼び、主文とそれとの間に、依然 Komma を入れて置く。

Daß man vorsichtig ist, ist ratsam. [主語文章]=Vorsichtig zu sein, ist ratsam. (用心深いのは得策だ。)

【註】 かく不定法文章が、先行する場合には、zu を除くことも出来る。Vorjichtig sein ist ratsam. 然しこの際には、zu なき不定法は、もはや短縮された副文といふ性質を失つて、あたりまへの主語となる。故にその後に Komma を入れる必要はなくなる。別の例をあげると、Seinen Feinden zu verzeihen, ist edel. 敵たちを宥すのは(氣高い)に於て、seinen Feinden zu verzeihen は短縮された副文であるが、zu を除いて Seinen Feinden verzeihen ist edel. とするとき、それは單なる主語となる如きである。

名詞文章の短縮について、最後の條件となるものは、上記の如き短縮法を施しても、そのために意味の曖昧を來さぬといふ事である。

今 Weigel 氏の擧げる例によると、Ich bitte, die Folgen zu bedenken. (結果を考へるように私は御願ひする。) と云ふ短縮文に於ては、bitten する人と、bedenken する人とは、理窟上同一人ではなく、相手方の人であることが明瞭であるから、これはよろしいが、Ich wünscht, wohl zu leben. と云つた文だけでは、誰れが無事息災に生活するのを私が願ふのかわからないから、これは短縮の結果、意味の不明を來したものととして排斥しなければならないのである。獨りこの例ばかりではなく、縮すると、折々意味に差障を來すことがあるから、注意を要する。

【註】 I. Gebje には、なほ短縮不可能のものとして、補足語文章が、考へられ又は發表されたる觀念或は認識の對象たる場合をあげて居る。一云ひ換へると、主文の動詞が知覺し・思考し・報告し又は知る事・云ふ事を意味するもの (sehen, bemerken, wahrnehmen, wissen, erkennen, sagen 等であるときには、之に附隨する副文の短縮は不可能なりとする。之に反して、意欲・要求・願望・企圖・主張・約束・信念等をあらはすもの——例へば wünschen, verlangen, beabsichtigen, behaupten, versprechen, glauben 等の動詞の後に

は、短縮が可能だとするのである。例をあげると、Er sah(, mußte, bemerkte, sagte), größer als sein Bruder zu sein. 彼は彼の兄弟よりもより大きいことを見た〔知つた・認めた・云つた〕のつもり) とは云へないけれど、Er behauptete, größer als sein Bruder zu sein. と云ひ、Er erzählte (, sagte, schrieb), mich im Garten gesehen zu haben. とは云へないけれど、Er beteuerte, (glaubte,) mich im Garten gesehen zu haben. (彼は私を庭園で見たと確信した〔信じた〕) とは云へるとしてある (Deutsche Grammatik 1923. S. 582).

【註】 II. 又折々は短縮すると、別の意味となるものもあるから注意せよ。かゝる恐れあるものは、短縮してはいけない。

Er weiß, daß er seinen Willen durchsetzt.

(彼は彼が自分の意志を貫徹することを知つてゐる。)

Er weiß, seinen Willen durchzusetzen. (彼は自分の意志を貫徹する方法を知つてゐる、貫徹することが出来る; etwas zu tun wissen = etwas tun könne: なることは前に云つたが、また etwas zu tun wissen = etwas zu tun verstehen と云へる。)

最後に、記憶すべき事は、上掲諸例は、副文章の動詞が主文のそれと連結するとき、zu を間に取り得るものの例だけであつたが、採り得ざるものゝ時は、短縮文の不定法は、zu なき形となる。例へば Lehren は他の動詞と連結する時、間に zu を採らしめない。故に Die äußerste Not lehrt ihn, daß er die Wahrheit sage. (極端な難場(苦境)が彼に眞實を云ふ事を教へる。) と云ふ複合文の副文章を短縮する時は、die äußerste Not lehrt ihn die Wahrheit sagen. となつて、zu sagen とはならないのである。

【註】 以上は名詞文章の短縮法の概論であるが、客語文章には、この法の施しやうがないから、之に加はつては居ない。今前述の諸條件を概括すれば:

- (1) 短縮され得べきものは、*Daß* 文章に限ること。
- (2) しかも *Daß* 文章中、下の一項に該当するものなることを要件とする。
 - a) 副文の主語が、主文のそれと同一なること。
 - b) 副文の主語が、主文の副成分と同一なること。
 - c) 副文の主語が、*man* なること。
- (3) 而して短縮して、疑義を生じたり、別義を生じたりしないことが、すべてに亘つての要件である。
- (4) 短縮法は、*daß* と主語とを撤し、定動詞を不定法にし、これに *zu* をつけること (但しつけないものもあること)。

4. 第二は形容詞文章の短縮法であるが、こゝでは関係代名詞が、同時に副文の主語たることを要件とし、次の三つの方法で短縮される。

I. 客語動詞が、現在又は過去なる時は、関係代名詞を除き、客語動詞を現在分詞に變ずる。

Das Kind, welches vor Schmerzen weinte, legte sich nieder.
 = *Das Kind, vor Schmerzen weinend, legte sich nieder.*
 (苦痛のために泣いたところの小兒は横臥した。)
Im Schatten sah ich ein Blümchen stehen, das wie Sterne leuchtete, wie Auglein schön war. = *Im Schatten sah ich ein Blümchen stehen, wie Sterne leuchtend, wie Auglein schön.* (私は蔭で、星のやうに輝き、眼のやうに美しい花を見た。)

【註】 なほ状況語文章の短縮の項を見よ。

II. 客語が、形容詞又は過去分詞と定動詞とだけであるときは、主語たる関係代名詞及定動詞を除く。例へば、*Ehemistolleß, der von seinen Freunden verraten und von seinen Feinden ver-*

folgt wurde, floh nach Asien. (彼の友人たちに裏切られ、彼の敵に追究されるテミストクレスは、亞細亞へ逃げた。) と云ふ文章に於ては、形容詞的附加語文章は、*der* から *wurde* までであるが、これを短縮するには、関係代名詞の *der* を除き、客語中の定動詞 *wurde* も除いて、その他はそのまゝに保留して置く。かくして出來た短縮文は、*Ehemistolleß, von seinen Freunden verraten und von seinen Feinden verfolgt, floh nach Asien.* となるのである。なほ二三の例を示すと：

Wohltaten, die still und rein gegeben werden, sind Tote, die im Graben leben. = *Wohltaten, still und rein gegeben, sind Tote, die im Graben leben.* (ひそやかに而して純潔に與へられた善行は、墳墓の中で生きてゐる死人の如きものである。)

Gib mir ein Herz voll Zubericht, welches mit Lieb' und Ruhe erfüllt ist! = *Gib mir ein Herz voll Zubericht, erfüllt mit Lieb' und Ruhe!* (愛と安らひとで充たされ、確信に充ちた心を、私に與へよ。)

【註】 短縮の際に於て、上掲の例に於ける *erfüllt* の如く、過去分詞が前置することは、往々にある。

Sein Haupt, welches entstellt und blutig war, hängt rücklings erdenwärts. = *Sein Haupt, entstellt und blutig, hängt rücklings erdenwärts.* (醜くなり血まぶれになつた彼の頭は、仰向けにぶらさがつてゐた。)

Der Angeklagte, der des Diebstahls schuldig war, wurde zu sechs Wochen Gefängnis verurteilt. = *Der Angeklagte, des Diebstahls schuldig, wurde.....verurteilt.* (竊盜の罪を犯したところの被告は、六週間の禁錮に宣告された。)

【註】 上掲の二例は、客語が共に形容詞と定動詞とから出来てゐるのであるが、後者は特に形容詞が二格の補足語を採つてゐる。

Dort erblick' ich schöne Hügel, die ewig jung und ewig grün sind.=Dort erblick' ich schöne Hügel, ewig jung und ewig grün. [Schiller] (あそこにわれらは、永久に若く永久に緑であるところの丘を見る。)

【註】 上掲文例として掲げた五個のものうち、第二・第五のものは補足語に附屬する附加語文章の短縮の例である。かゝる短縮文は、いつも主語にのみ關係しなければならぬと説く文法家がある相であるが、それは Sebje の指摘するとほり、明瞭な錯覺である。しかし次のやうな文章に於ては、短縮文のかゝりどころがわからないから、排すべきだと、同じところで Sebje が云つて居る。(S. 586) Von Etifette ringsum eingeschlossen, wie font! ich ohne Zeugen mich ihr nah! [Schiller] (禮儀作法で周りをかこまれて、私はどうして証人なしに、彼女に近づくことが出来たらうか!) これは筆者の意圖から云へば、文頭の短縮文を、補足語 ihr に關係させたのだ相であるが、それは無理で、普通に讀めば、ich にかゝるやうに感ぜられる。かゝる誤解を招くやうな短縮法は、心して避けなければならない。

III. 形容詞的附加語文章の客語が、—前項の形容詞又は過去分詞なるに對して、—名詞である場合にも、同一の短縮法が行はれる。而して短縮の結果、残つた名詞と、主文に於ける先行名詞とが、格に於て一致しない時は、残留名詞の方の格となほす。かくして出来たものが所謂同格名詞 (Apposition [S.], Beiadj [M.]) と云はれるものである。

Berlin, welches die größte Stadt des Deutschen Reichs ist, liegt an der Spree.=Berlin, die größte Stadt des Deutschen Reichs, liegt an der Spree.

(獨逸國の最大の都市なる伯林は、シュプレー河畔にあり。)
Die Griechen verurteilten den Sokrates, der ein großer Weltweiser war.=Die Griechen verurteilten den Sokrates, einen großen Weltweisen. (希臘人は偉大なる哲人なるゾークラテースを決罪した。)

Die Tugend sieht nach ihrem Schatten, welcher der Ruhm ist, sich niemals um.=Die Tugend sieht nach ihren Schatten, dem Ruhm, sich niemals um.

(徳はその影なる名譽を、決して顧みない。)

Der Redner gedachte Schillers, der ein großer Dichter war.=Der Redner gedachte Schillers, des großen Dichters. (辯士は大詩人なりシラアの事を述べた; gedenken は二格の補足語を採る。)

【註】 上掲の四例のうち、第一のものは、之を短縮しても客語名詞たるものと、その先行詞とが初めから同じ格であつたから、面倒はないが、第二の例で、短縮すると、ein großer Weltweiser となり、第三の例では、der Ruhm が残り、第三の例では、ein großer Dichter が残つて、共に先行名詞と格を異にするから、わざわざ同格に改めたのである。

又客語名詞として、不定冠詞を有したるものを、同格名詞にした場合には、不定冠詞はそのまゝにするか、又は定冠詞を付ける。

【註】 本頁 2—4 行目に於てそのまゝの例、10—12 行目に於て改める例をあげておいた。

Sein Vater, der ein rechtschaffner Mann ist, hat viele Freunde.=Sein Vater, ein rechtschaffner Mann (od. der rechtschaffne Mann), hat viele Freunde.

(正しい人であるところの彼の父は、多くの友人を持つてゐます。)

【註】 I. *Sehse* は今あげたる此文例と、*Sein Vater hat viele Freunde, weil er ein rechtschaffner Mann ist.* とを比較して云ふ、状況語文章を有する後者は、此副文の意味を、*als* を使つて附加格的同格にすることが出来る。即ち、*Sein Vater hat als ein rechtschaffner Mann viele Freunde.* と書き換へることが出来るが、これは最早副文の短縮ではなくて、完全なる言ひ換へであり、かくして出来たものは、純然たる單文章であると。

【註】 II. 序でに云ふが、*als* を頂くべき同格名詞が、往々その *als* を落してゐることがある。*Ich stehe nur ein Jüngling zwischen euch, den Vielerfahrenen.* [Schiller] (私はおんみたち、多くの経験ある人たちの間に、只一人の青年として立つてゐる。)は、*Ich stehe nur als ein Jüngling zwischen euch, die ihr Vielerfahrne seid.* の義である。——此際 *den Vielerfahrenen* と、その不短縮形なる副文ともも観察せよ。

Der Greis, welcher der würdigste ist, dem eine Krone das Haupt be'astet. = *Der Greis, der würdigste, dem eine Krone das Haupt be'astet.* [Goethe] (その人の頭を王冠が蔽ふところの最も尊嚴なる人たる老人は……)

同格名詞の中には、上の如く一個又は數個の先行名詞に關係しないで、先行文章に關係するものがあるが、これは實は、眞に述べた先行文章の意味を受ける *was* を主語とした關係文章 (273 頁参照) の短縮に外ならぬのである。例へば、*Diesen Mangel zu ersetzen, bewaffnete man die Bürger, ein verzweifelter Ausweg,……* (この缺陷を補ふべく、人々は市民を武装した、それは絶望的な逃路であつた、……) に於ては *Diesen* から *Bürger* までの文章に對する同格語たる *ein verzweifelter Weg* は、*was ein verzweifelter Weg war* の短縮で、此 *was* は先行文を受けてゐる。

【註】 *Apposition* は、格が先行詞と一格すること、主眼とするもので、數・性等の不一致は問題にならぬ。*Da lebten die Hirten, (牧羊者ら) ein harmloses Geschlecht.* に於ては、數が一致せず：*Die Epre (河名), der wichtigste Nebenfluß (支流) der Gabel (河名)* に於ては、性は一致しない。かゝることを顧みる必要は、少しもないのである。

5. 第三は副詞文章の短縮である。これには副文の主語と、主文の主語とが同じものであることを條件とし、大略次のやうな三種の方法で短縮される。

i) *Wenn, als, da, indem, weil* 等を以て初まるものは、形容詞文章と同様に取扱つて短縮される。但し形容詞文章にあつては、關係代名詞が同時に主語たることと文けが相違である。

【註】 このうち *indem* は時の状況語文章と方法のそれに関し、*da* は時と理由、*wenn* は時と條件との状況語文章に關係する。

(A) 形容詞文章の (I) の場合と同じく、過去又は現在の定動詞は、現在分詞に變へられる。接續詞・主語は勿論省かれる。

Indem ich dies bei mir dachte, schlief ich ein. [時] = *Dies bei mir denkend, schlief ich ein.* (この事を獨りで考へながら、私は眠に落ちた。)

Indem ich mich auf mein früheres Schreiben beziehe, wiederhole ich meine Bitte. [方法] = *Mich auf mein früheres Schreiben beziehend, wiederhole ich meine Bitte.* (私の以前の手紙に關係して、私は私の御願を繰返へします。)

Wenn du zögerst, beschleunigst du die Gefahr. [條件] = *Zögernd, beschleunigst du die Gefahr.* (躊躇すれば、君は危険を早める。)

Weil er den Betrug fürchtet, zog er sich zurück. [原因]=Den Betrug fürchtend, zog er sich zurück.
(偽購を恐れて彼は手を引いた。)

【註】 I. 此際、所持をあらはす現在分詞、habend (having), haltend (keeping), tragend (carrying); 又は存在をあらはす seiend, wohnend, lebend, sich aufhaltend 等はこれがなくとも、短縮文の意味が明かなるときは、之を省く。例へば Freudenstrahlend lehrte der Knabe zurück, in jeder Hand einen Krügel (tragend (od. haltend)) (よろこびに輝いて男の兒は歸つて来た、各の手に一つの巻きパンを持ちながら) に於ては、tragend や habend はなくとも、明かにわかるから、略してよい。——此場合 einen Krügel が四格で、これに副詞的規定がついてあるのだが、この四格こそ、所謂絶対四格 (absoluter Akkusativ) と云はれるものである。——Seit wenig Tagen zum erstenmal hier (seiend (od. sich aufhaltend)), kann er sich noch nicht zurecht finden. (一寸前から初めてこの地に滞在してゐるので、彼はまだ案内が解らない) に於ては、seiend 又は sich aufhaltend を略しても意味は解る。これを省略的短縮 (elliptische Verkürzung) と稱する。この省略的短縮は、形容詞文章に於てもまた行はれる。Gustav Adolf, an der Spitze einer siegreichen Armee (stehend), hatte von Leipzig bis Prag, Wien und Preßburg wenig Widerstand gefunden. (Schiller) (戦勝多き軍隊の先頭に立てるグスタフ・アドルフは、ライプチヒからプラークやヴィーンやプレスブルクに至るまで、ほとんど抵抗を見しなかつた) に於ては、省略された短縮文は、主語に關係する形容詞文章から来たものである。

【註】 II. 上述の短縮法を施した附加語文章と、状況語文章とは、結果に於て、同一形式となるから、本来いづれなりしやが、能かに判断しがたい場合も生ずる。然し兩者の主要な區別點は、短縮された

ものの主文に對する位置に存するので、前者ならば、主文中の或(代)名詞に關し、後者ならば主文中の動詞に關するが故に、前者は先行詞に接近して置かれ、後者は動詞に關係して据ゑられると云ふ事にある。例へば、前掲の Gustav Adolf, an der Spitze einer siegreichen Armee stehend, hatte von Leipzig bis Prag.....gefunden. に於ける短縮文は、主語に附屬せる形容詞文章のそれであつて、Das Kind fiel, vor Freude jubelnd, der Mutter um den Hals. (子供は喜びのために歡呼して、母の頸にかちりついた) に於ける短縮文は、状況語文章のそれである。これは客語動詞の直後に短縮文が來て居るが、意味に不明を起さざる限り、主文に先行し、又は後續する。[先行の例] Für sein Vaterland kämpfend, starb er den Heldentod. (祖國のために戦つて、彼は勇ましい最後を遂げた); [後續の例] So stürzt er zu meinen Füßen, meine Knie umklammernd. (彼はかくして私の素を抱きながら、彼の脚下に倒れる)

(B) 形容詞文章 (II) と同一の場合で、(i) 客語に形容詞又は過去分詞が存するときは、主語・接續詞・定動詞(連辭)を除く。

Als er arm war, hatte er sich noch satt gegessen;.....[時]
=Arm, hatte er sich noch satt gegessen;.....(貧乏だつた時には、彼はそれでも尙充分に食つた;.....)

Indem ich zufrieden bin, daß ich nicht alles verloren habe, trage ich leichter mein Schicksal. [原因]=Zufrieden, daß ich nicht alles verloren habe, trage ich leichter mein Schicksal.=Ich trage leichter mein Schicksal, zufrieden, daß ich nicht alles verloren habe.

(私がすつかりは失はなかつたことに満足して、私はより容易く私の運命を忍ぶ; daß 文章は、indem 文章に従

屬する副文章だから、上掲の全文は、複雑複合文章(349頁以下に掲ぐ)ではあるが、こゝでは、indem 文章の短縮法を示さんがために、この文を掲げたのである。

Da ich gegenwärtig von Gelde gänzlich entblößt bin, so kann ich die Rechnung gleich nicht bezahlen. [原因]=Gegenwärtig von Gelde gänzlich entblößt, kann ich die Bezahlung gleich nicht bezahlen.

(今金がすつかりないので、すぐに勘定を拂ふことは出来ません。)

Wenn der Bogen zu straff gespannt ist, zerreißt er [條件]=Zu straff gespannt, zerreißt der Bogen.* (弓はあまり強く張られてゐると、それは断れる。)

【註】 I. *副文の主語を略したから、主文の代名詞を、名詞に改めたもの。かゝる用意はいつも必要である。

【註】 II. 此項の場合にも、勿論副文の主語と、主文のそれとが同一であることを要件とする。夫故にもし両者が異つてゐるなら、之を同一にしてから短縮する。此場合もし同一になり得なければ、それは本来短縮し得ざるものである。例へば、Wenn man die Sache nüchtern betrachtet, sieht sie nicht so schlimm. 「事件を冷靜に觀察すると、それはそんなに悪くはない」と云ふ文章は、この儘では、主語が互に相違するから短縮されない。依つて副文を改めて、Wenn die Sache nüchtern betrachtet wird, sieht sie nicht so schlimm. とすればすぐに短縮されて、Nüchtern betrachtet, sieht die Sache nicht so schlimm. となる。

【註】 III. 前項 (A) [註] II. にあげたと同じく、形容詞文章の短縮したものと、状況語文章の短縮したものは、この項でも、場合によつて區別しがたい事がある。例へば、Die Eilenden hielt

Diana zurück, erzürnt auf ihren großen Führer. と云へば、此短縮文章は Diana (女神の名) にかゝるところの附加語文章、即ち die auf ihren großen Führer erzürnt war (auf einen erzürnt sein=或人に對して怒つてゐる) から來たのであるか、或は原因の状況語文章たる weil sie auf ihren großen Führer erzürnt war から來たのか、解らない。夫故に前者なら、先行詞と密接させて、(Diana, erzürnt auf ihren großen Führer, hielt die Eilenden 急ぐ人々) zurück, (zurückhalten=引きとめる) としなければならぬ。——尤最後に擧げたやうな語次で、なほ且つ状況語文章の意味を持つこともあるから、(例へば、前に述べたラテン語的語次 lateinische Wortstellung を想起せよ)、一切の場合かうだと斷言は出来ないけれど、通例の場合には、この法則を適用して考へてよい。——又短縮したものに於ける erzürnt の位置を見よ。現在分詞・過去分詞は、短縮の際かやうに位置を變ずることがある。

(ii) 客語動詞が、現在又は過去であるとき。

- (a) 主文に so を置き、副文が daß を以て初まる結果文章は、接續詞と主語とを除き、定動詞を不定法に改め、これに zu を附す。
- (b) 副文が ohne daß (結果文章), anstatt daß (方法文章) で初まつたものは、同じくその定動詞を不定法に改めた上、ohne.....zu, anstatt.....zu を附す。
- (c) 副文が daß, auf daß 又は damit を以て初まる目的文章であるとき、又は主文に zu を有し、副文の文頭に als daß を有する結果文章であるときには同じく、定動詞を不定法に改め、これに um.....zu を附ける。

但し上掲のすべての場合に於て、いづれも主文と副文との主語が、同一であることを要件とする。

(a) の例: Ich bin so glücklich, daß ich ihn kenne. = Ich bin so glücklich, ihn zu kennen. (彼を知つて仕合に思ふ。)
Sei so gut, daß du mir deinen Regenschirm leihst. = Sei so gut, mir deinen Regenschirm zu leihen. (どうぞ君の雨傘を僕に貸して呉れ給へ; 主文は命令法を用ゐて居るから、主語を略するのである。)

Man ging so weit, daß man uns schimpfte. = Man ging so weit, uns zu schimpfen.

(人々はわれらを罵ることまでした。)

【註】 近來此 zu の代りに um.....zu を使用する風がある。Eine Stadt muß so gebaut sein, daß sie die Menschen zugleich sicher und glücklich macht. (都市は、人間を安全ならしめると同時に幸福ならしめるやうに、作られなければならぬ) の daß 以下を短縮するに際して、um die Menschen zugleich sicher und glücklich zu machen とするが如きである。本來、um は不用なのである。

(b) の例: Er leistete das Menschennögliche, ohne daß er den geringsten Erfolg hatte. = Er leistete das Menschennögliche, ohne den geringsten Erfolg zu haben. (彼は人間に出来得る限りの事をやりとげたが、ちつとも成功しなかつた; [英] He accomplished as much as is possible for men without meeting with the least success.)

Lerne Beleidigung verschmerzen, ohne daß du sie ahndest! = Lerne Beleidigung verschmerzen, ohne sie zu ahnden! (侮辱を復讐しないで、我慢することを學べ!)

Sie schweigen, anstatt daß sie sich beklagen. = Sie schwei-

gen, anstatt sich zu beklagen.

(苦情を云ふ代りに彼等は沈黙する。)

Du solltest fleißig arbeiten, anstatt daß du spielst. = Du solltest fleißig arbeiten, anstatt zu spielen.

(君は遊ぶ代りに勤勉に仕事をやらなければなるまい。)

(c) の例: Er fordert das Unmögliche von sich, damit er es von andern fordern dürfe. = Er fordert das Unmögliche von sich, um es andern fordern zu dürfen.

(彼はそれを他人から要求してもよいやうに、自分自身から不可能な事を要求する。)

【註】 上掲の如く、目的文章或は結果文章に於ては、完全なる副文に存する説話法の助動詞を、副文に於て略すときと、略さないときとがある。一に意味の現はし方に依る。

Er trank ein Glas Wein, daß er sich erwärme. = Er trank ein Glas Wein, um sich zu erwärmen.

(彼は暖まるために一杯酒を呑んだ。)

【註】 目的の觀念が主文で明瞭に解つてあるときには、um.....zu の代りに、單なる zu が使用され得。

Es lebt ein Gott, daß er straft und rächt. = Es lebt ein Gott, zu strafen und zu rächen.

(神は罰したり復讐したりするために在る)

【註】 表面から見ると、短縮の出来ないやうな目的文でも、實は主文が略してあるので、そのために短縮可能なものもある。例へば、Daß ich es nicht vergesse, gestern war dein Bruder bei mir. と云ふ文に於て、Daß 文章を短縮して、Um es nicht zu vergessen となし得るけれど、それはその次に、will ich dir sagen と云ふ主文が略されるからで、上掲の文は、本來は、Daß ich es

nicht vergesse, will ich dir sagen, daß dein Bruder gestern bei mir war. となるのである。そこで初めの Daß 文章の主語と主文のそれとが同一だから、前者を短縮したのである。又 gestern war..... は勿論 daß dein Bruder..... の daß を除いたものである。

Er ist zu edel, als daß er sich räche = Er ist zu edel, um sich zu rächen. (彼は氣高いから復仇はしない。)

【註】 此場合 um.....zu の代りに zu (to) を使用してもよろし。—のみならず、zu の方が正しいと主張する文法家もある。

Wir waren zu ermüdet, als daß wir unsere Wanderung hätten fortsetzen können. = Wir waren zu ermüdet, um unsere Wanderung fortsetzen zu können. = Wir waren zu ermüdet, (um) unsere Wanderung fortzusetzen. (われわれはあまりに疲れて居たので、われらの旅をつゞけ得なかつた。)

【註】 結果文章の説語法の助動詞については、上に既に述べた。

(iii) Obwohl, obgleich, obschon, wiewohl 等を文頭に有する認容文章は、接續詞丈けを残し、主語及び定動詞 (現在又は過去なるもの) を除くことによつて短縮される。但し副文の主語と、主文のそれとが、同一なものを示してゐることが、要件である。

Obwohl Schweden arm an Geld und Menschen war, war es seinem König mit Enthusiasmus ergeben. = Obwohl arm an Geld und Menschen, war Schweden seinem König mit Enthusiasmus ergeben. (金と人間とに乏しくはあつたが瑞典は熱誠を以てその國王に歸服してゐた。)

Obschon er mein nächster Verwandter ist, ließ er mich doch im Stiche. = Obschon mein nächster Verwandter, ließ er

mich doch im Stiche. (彼は私の最近の親戚だけれど、彼は私を見すてました; einen im Stiche lassen = 或人を見棄てる。)

【註】 I. Obgleich, Obschon 等が全然略されることもある。これは略しても、意味の通る場合に限ることは、云ふまでもない。

Obgleich du immer gut und schuldlos bist (= Immer gut und schuldlos), scheinst du stets der Schuldige. (君はいつも善良で罪がないのに、いつでも罪ある人のやうに見える。)

【註】 II. Wenn auch を有する文章は、wenn auch を残すか、又は auch のみを残す: Wenn das Unkraut auch ausgeraut ist, wächst es doch bald wieder. 雑草は引抜かれても、またちに生長する) は、(Wenn) auch ausgeraut, wächst das Unkraut doch bald wieder. とする。

【註】 III. 俗語調では、副文と主語とが、その主語を異にしても、意味の通ずる限り、これを短縮することがある。

Ob es wahr oder unwahr ist, man glaubt es. = Ob wahr oder unwahr (od. Ob wahr, ob unwahr), man glaubt's. (それが本當であらうと虚偽であらうと、人々はさう信ずる; 此 ob は「かどうか」の ob ではなく、「云々でも、云々でも」の義)。Den 2. März bestieg ich den Vesuv, obgleich (es) bei trübem und unwolktem Gipfel (war). (Goethe) (三月二日に、私はヴェズーフ山に登つた、頂は曇つて雲に蔽はれてゐたが!)

6. 上來說いたやうに、副文中で短縮し得べきものは、

(I) 不定法 (Infinitiv [Pr.]) により、

(II) 分詞 (Partizip [R.]) により、

(III) 形容詞又は名詞によつて、

短縮するのであるが、こゝに注意すべきことは、凡べて短縮文の形を示してゐるものは、まづ初め完全なる副文が存し、次にこれを短縮したものだと思惟しない事である。成程、上掲諸種の短縮文は、これを充填し整頓すれば、完全なる副文章にはなり得るけれども、初めから完全なる副文を備えつけて置いてからの話ではない。短縮の方法についての知識が、得られて仕舞へば、何もわざわざ完全副文をつくり上げる勞は要らない。それは自ら短縮文となつてあらはれ得るものである。副文の短縮と云ふ名稱に驅られて、完全副文の製造を、前提條件とするには決して及ばないのである。

【註】 I. そこで短縮文といふ名を忌みてか、此名稱の代りに、『文節』(Satzabschnitt [R.]) と稱する文字を使用する文法家もあるし、單に『副文の代理者』(Vertreter des Neben[ab]s) と稱する人もある。しかし上記の事さへ解れば、名稱はごうでもよい譯である。

【註】 II. 短縮文と主文との間には、Kommaを残して置くのが原則である。例へば、Traurig über den Tod des Feldherrn, kamen die Soldaten aus der Schlacht. (將軍の死を悲しみつゝ、兵士は戦から歸つて來た) に於ては、初めの部分に、Indem sie über den Tod... traurig waren の短縮であるから、主文との間に Komma を置き、Traurig kamen die Soldaten aus der Schlacht. では traurig (悲しんで) は、單なる副詞だから、次に Komma がないと云ふ事になるのである。——以上は Menzinger 氏の解釋であるが、成程これは原則的には正しいけれど、個々の細かい場合には、必ずしも適應されない。例へば前に述べた Wenn du zögerst, beschleunigst du die Gefahr. (307 頁参照) に於て Wenn 文章を短縮すると Zögernd になるが、このうしろに

Komma を置かない文法家もあるし、Seinen Feinden verzeihen, ist edel. と書いて verzeihen のうしろに Komma を入れるやうな人もある (299 頁参照) から、細かい點は、個人的に違ふと考へる外はない。元來 Komma は、此場合計りでなく、いろいろな場合に於て、可成り不統一に使用されてゐるのが、今の實情であるけれど、われらの如き異邦人にとっては、文典上の原則に據る外に途がないのである。

7. 副文は上掲の規則以外のものによつても、屢切りつめられる。これらは前述の省略的短縮 (effiziente Verkürzung) と稱するものである。

i) 客語形容詞又は過去分詞の代りに、二格の名詞又は前置詞を有する規定詞が存するときは、副詞文章 i) の (B) (309 頁参照) と同一に取扱つてよろしい。

Da ich eines Sinnes mit ihm war (=Eines Sinnes mit ihm), folgte ich gern seinem Räte. (彼と意見が同じであるので、私は喜んで彼の忠告に従つた。)

Als ich im Begriff auszugehen war (=Im Begriff auszugehen), wurde ich durch seinen Besuch überrascht. (私が外出しようとしてゐたときに、私は彼の訪問によつておどろかされた。)

Obwohl mein Onkel im Besitz unermesslicher Reichtümer ist, hat er doch selten eine frohe Stunde. (=Im Besitz unermesslicher Reichtümer, hat mein Onkel doch selten eine frohe Stunde.

(彼の伯父は無限の富を所有してゐるけれど、それでも一愉快な一時間を持つのは稀れだ。)

ii) 或種の副詞文章では、接續詞と主語とを略し、四格補足

語に附隨する動詞を過去分詞の形にし、定動詞を用ゐざる短縮法がある。これは所謂過去分詞の絶對用法と稱せるものであるが、かゝる時はこの過去分詞に haltend, tragend 又は habend を附して考へれば、意味は通するのである。但此際は副文の主語と、主文の主語とが同一なることを要する。

Den Hut in die Augen gedrückt (=Den Hut in die Augen gedrückt haltend=Indem er den Hut in die Augen gedrückt hielt), trat er ein.

(彼は帽子を目深に被つて入つて來た。)

【註】 gedrückt haltend は、また gedrückt habend と云ふ事が出来る。此場合注意すべきのは、gedrückt と云ふ過去分詞は、haltend なり、habend なりに對して、副詞的の意味を持つもので、夫の或事の完了を示すところの過去不定法から來たものとは、形が同じでも、意味が全く異なるのである。此事は habend の代りに、haltend を用ゐて考へれば、容易く解る筈である。——序でながら haben に對して、過去分詞が副詞的の作用をなす例を、別にあげると、Du mußt stets deine Gedanken auf das Schiff gerichtet haben. [Sift] (お前はいつも君の思想を舟へ向けておらなければならぬ。こゝでは gerichtet haben は過去不定法の義ではない。——なほ過去分詞が一般に動詞に對して副詞的の意味をなす例をあげれば、Er mußte ungeessen (not having eaten) zu Bette gehen. (彼は食事をしないで就寝しなければならなかつた。)

Dies gesagt (=Dies gesagt habend=Nachdem er dies gesagt hatte), ging er davon.

(彼はかう云つて立ち去つた。)

【註】 此場合は gesagt habend の代りに、gesagt haltend とは云へない、即ちこゝでは完了の意味を有する方である。

Lange saß er da, den Kopf zurückgelehnt (=den Kopf zurückgelehnt haltend=indem er den Kopf zurücklehnte). (彼は頭を後ろに靠せながら長い間座つて居た。)

Diese Arbeit vollendet (=Diese Arbeit vollendet habend=Nachdem ich diese Arbeit vollendet hatte), ging ich zu Bette. (私はこの仕事をなし終つて、就寝した。)

iii) Man を主語とし、wenn を有する條件又は認容文章が、能働形なるときは、上掲 ii) の如く、接續詞及び主語を除き、補足語と、その客語動詞を過去分詞の形になほしたものとを以て短縮する。

(Wenn man diesen Mangel abrechnet=) Diesen Mangel abgerechnet, ist die Wohnung gut.

(この缺陷を差引けば、この住居は良い。)

(Wenn man von diesem Lärm abjah=) Abgesehen von diesem Lärm, an den man sich bald gewöhnte, konnte man in Versailles glauben, im tiefen Frieden zu leben. [Wolke]

(此騒ぎを別にすれば、——此騒ぎには、ちきに慣れたが、——ヴェルサイユに於て人々は、深い平和の裡に生活すると信じた; davon abgesehen (od. abgesehen davon) は極めてよく見受ける形である。「それを別にすれば」の義) Die Sache richtig angesehen (=Wenn man die Sache richtig ansieht), handelt es sich um etwas ganz anderes. (事件を正當に調べると、それは全く別な或事に關係してゐる。)

此過去分詞は漸次に受働形の一部として感ぜられて來て、受働文の短縮に使はれこととなつた。例へば、offen gestanden は、

wenn* offen gestanden werden soll (もし打あけて自白するなら; [英] to tell the truth) の短縮であるが如きである。

Gelinde gesprochen (=Wenn* gelinde gesprochen werden soll), ist das eine Übertreibung.

(おだやかに云ふなら、それは誇張である。=[英] Speaking in mild terms that is an exaggeration.)

【註】*受働文章の主語が、非人称の es なるときは、自己が文頭に來ない限り消失する。

iv) 上記の過去分詞の代りに、現在分詞を使用するものもある。

Die Sache selbst betreffend (=Was die Sache selbst betrifft), so ist zunächst zu merken.

(事柄そのものに関しては、まづ第一にその事が言はれなければならぬ; [英] Concerning the point itself, it is necessary to remark).

Die alte Sprache anfangend, so denke ich ganz wie Sie.

(古い言語に関しては、僕は貴君と全く同じやうに考へる。)

【註】I. 上記 iii) 及 iv) についての詳細は、Curme (1922) 五百五十二頁を見よ。

【註】II. 存在をあらはす seiend, wohnend, lebend 又は stehend 等; 携帯をあらはす habend, tragend, haltend 等による短縮形、及びそれらの省略に就いては、既に (308 頁) 述べた。

第七章

對結文章の收縮

1. 對結的に結びつけられたるいくつかの主文、又は對結的に結ばれたるいくつかの副文(茲では此兩者を總括して對結文章と名づけて置く)の中に、共通の成分ある時は、共通の成分を只一つ残し置き、共通ならざる部分を、接續詞 (und, aber 等)により、又は何等の接續詞をも用ゐないで結びつける事がある。これを對結文章の收縮 (Zusammenziehung beigeordneter Sätze) と稱する。例へば、Der Mensch vergißt leicht überstandene Leiden, aber er vergißt selten genossene Freuden. (人間は凌いだ苦惱を容易に忘却するけれど、[人間は]享受した喜をなかなか忘れない。)と云ふ對結文章に於ては、共通成分たる er vergißt を一つ除いて、Der Mensch vergißt leicht überstandene Leiden, aber selten genossene Freuden. とすることが出来る。又 Wenn Betrübnis meine Seele umgibt, wenn Elend meinen Leib umgibt; dann bete ich. (憂鬱が私の心を圍む時、不幸が私の體を圍む時、その時私は祈る。)に於ては、二個の並列的な副文の共通成分たる wenn と umgibt とを削つて、兩文を收縮する。

【註】收縮 (Zusammenziehung [Z.] od. Zusammenfassung [F.]) はまた縮合とも云はれてゐる。

2. かやうな收縮は、いろいろな對結文章に亘つて施し得るけれど、denn を以て接續するもの丈は別である。

まづ主文に於ける收縮から初める。

I. 同一主語の場合。

Ich habe ihn diesen Morgen gesprochen, (ich) gehe jetzt

wieder zu ihm, (ich) werde aber erst morgen mit ihm abreisen. (私は今朝彼と話をした、今私はまた彼のところへ行く、しかし私は明日になつてから、彼と一緒に出發するであらう。)

Der fortdauernde Krieg löst die Bande des Gesetzes, und (er) verwildert die Gemüter.

(長く続く戦争は、法律の羈絆を緩め、人心を兇暴にする。)

【註】 und 以下の文章の主語を略するとき、und の前の Nomina が消失することに留意せよ。

Bald eilt der Fluß, bald stodt er.=Bald eilt, bald stodt der Fluß. (流れは或はいそぎ、或は停滯する。)

【註】 共通の二者のうち、いづれを略してもよいが、一は調子の長否により、他は意味上の関係による。

II. 同一の客語動詞の場合。

Aus dem Gespräch verschwindet die Wahrheit, Glauben und Treue (verschwindet) aus dem Leben. (對話からは眞實が消え、信仰と誠實とは生活から消える。)

III. 同一の主語と同一の客語動詞の場合。

Dieser Soldat hat keine Ausdauer, (er hat) aber alle anderen militärischen Eigenschaften.

(この兵士は忍耐心はないが、彼は然しすべての他の軍人的の性質を持つて居る。)

Das Spiel macht einen reich, und (es macht) hundert arm. (賭博は一人を金持にし、百人を貧しくする。)

【註】 收縮する (zusammenziehen) 際には、Nomina に注意せよ。本頁八行目参照。

Entweder ich werde schreiben, oder er (wird) schrei-

ben). (私が書くか或は彼が書くかであらう。)

【註】 第一の例は、定動詞たる一個の客語動詞が共通の場合、第二の例は、客語動詞全部、即ち定動詞と不定法とが共通の場合である。——此際特に注意すべきは、收縮の際には、定動詞の數に顧慮する必要のない事で、こゝで云へば第二の定動詞は wird で、第一の定動詞とは、その形を異にするが、これは顧みないのである。

IV. 主語と定動詞とが同一の場合。

Wir haben zuerst gelesen, dann (haben wir) geschrieben, darauf (haben wir) gerechnet und zuletzt (haben wir) gerechnet. (われらは初めには読み、次には書き、次には算術をやり、仕舞ひには、圖書を描いた。)

V. 定動詞と補足語の一部とが共通の場合。

Schönheit des Leibes gleicht einem vorüberreisenden (Freunde), Schönheit des Geistes (gleich) einem bleibenden Freunde. (肉體の美は通過し行く友人に似、精神の美は止まつてゐる友人に似てゐる。)

VI. 補足語と客語動詞を共通にする例。

Teils hat sein Vater ihn dazu veranlaßt, teils (haben ihn) seine Brüder (dazu veranlaßt).

(一部は彼の彼の父が彼にさうさせたし、一部は彼の兄弟が彼にさうさせた。)

【註】 定動詞の數は顧みられざること、既述の通りである。

VII. 主語と補足語と定動詞とが共通なるもの。

Er hat mir dieses Buch nicht geschenkt, sondern (er hat mir dieses Buch) nur geliehen.

(彼は私に此本をくれたのではなくして、彼は私に貸したばかりだ。)

VIII. 主語と客語動詞と副詞的規定とが同一の場合。

Die Mutter stürzte erst ihre Söhne (in die Flammen, sie stürzte),* dann sich selbst in die Flammen (母はまづ自分の息子たちを、次に自分自身を火焰の中に投じた。)

【註】* 收縮したるために位置を變じたる Komma に注意せよ。初めにはこの Komma なし。

IX. 副詞的規定のみが同じ場合。

Aus der Wolke quillt der Segen, (aus der Wolke) strömt der Regen. (Schiller)
(雲から祝福が湧き出で、雨が流れ出づる。)

X. 連辭のみが共通の場合。

Die Römer waren gebildet, aber die Griechen (waren) noch viel gebildeter. (羅馬人は教養があつたが、希臘人はもつとずつと教養があつた。)

XI. 主語と連辭とが同一の場合。

Der Mensch ist kein Tier, aber (er ist) auch kein Gott.
(人間は動物ではないが、然しまた神でもない。)

【註】此文章は、Der Mensch ist weder ein Tier, noch ist er ein Gott.=Der Mensch ist weder ein Tier, noch ein Gott. と云ふと同じである。

XII. 連辭と客語形容詞(又は名詞)が共通なるもの。

Alle Schüler sind fleißig und gehorsam, aber ein Schüler (ist) nicht fleißig und gehorsam.

(凡ての生徒は勤勉で従順であるが、只一人の生徒のみ勤勉で従順ではない。)

【註】同様の場合、fleißig u. gehorsam の代りに、何等かの名詞を用ゐても、同じ收縮法を行ふことが出来る事は勿論である。

XIII deshalb, deswegen, daher 等を有する文章を收縮する場合には、und を入れて、共通成分を除く。

Heute ist er krank, deshalb kann er nicht in die Schule kommen.=Heute ist er krank, und deshalb kann nicht in die Schule kommen. [主語の共通]

(彼は今日病氣です、夫故學校へ來ません。)

Er ist immer nicht wohl, darum ist er immer so blaß.=

Er ist immer nicht wohl und darum immer so blaß. [主語と連辭とが共通] (彼はいつも丈夫でない、それ故彼はいつも蒼白い。)

【註】これだけでは、十分に盡しては居ないかも知れないが、大要は盡きて居る筈である。また別な收縮法によるものでも、上掲の見方で検査したら、收縮の経路はすぐに解らう。

3. 收縮の目的は、それによつて文に簡潔の趣を添えんがためである。然し往々意味を明瞭ならしめるために、或は調子のために、或は文に力を添えんがために、收縮を故らに行はざる場合もある。

Das Wasser raucht, das Wasser schwillt. (Goethe)

(水はざわめいた、水は漲つた。)

Sie hat unrecht, aber er hat auch unrecht.

(彼女は間違へて居る、然し彼もまた間違つてゐる。)

Man suchten sie die Gnade, nun fanden sie den Born.
 (今や彼等は恩寵を求めた、今や彼等は激怒を發見した。)
 Der Mensch ist durch seinen Willen sehend, aber auch
 durch seinen Willen blind; er ist durch seinen Willen
 frei und durch seinen Willen ein Sklave; er ist
 durch seinen Willen redlich und durch seinen Willen
 ein Schurke. (Pestalozzi)

(人間は彼の意志によつて明視であるが、然しまた彼の意志によつて盲目である。彼は彼の意志によつて自由であり、また彼の意志によつて奴隸である；彼は彼の意志によつて正直であり、彼の意志によつて無頼漢である。)

4. 或文章が收縮文であるか、或はその或成分が單に重複して居るに過ぎないかと云ふ事を檢別するのは、往々にして困難である。或文法家は、或成分の重複と云ふ現象それ自體を以て、すでに收縮作用の結果であるとする。例へば、Eichen, Buchen, und Birken sind Waldbäume. (櫟と山毛櫸と白樺とは林樹である。)と云ふ文章は、Eichen sind Waldbäume. Birken sind Waldbäume. Birken sind Waldbäume. と云ふ三單文章の收縮であり、かくして出來た上掲の文章は、所謂收縮文章 (der zusammengezogene Satz) だと云ふ。同様に、Nützbare Kunst bringt Brot und Günst. (有益な藝術はパンと恩寵とを齎らす。)と云ふ文章は、Nützbare Kunst bringt Brot. と云ふ單文と、Nützbare Kunst bringt Günst. と云ふ單文とから出來た收縮文章だと考へるのである。即ちかゝる考方では、單なる主語の重複や單なる補足語の重複などは、認められないのである。これは一切の接續詞を以て、語と語とを結ぶものではなく、實は文と文とを結ぶものだが、收縮の結果、それらが語と語とを結ぶやうに見えるのだと定義すると同様で、理窟に捕はれた究屈な理論である。今日の文法では、或『文章成分の重複』を認め、例へば『多くの主語

を有する文章』(Satz mit mehrfachem Subjekt) と云ふ名稱を用ゐるやうになつてゐる。従つて、Die Sonne erleuchtet und erwärmt die Erde. (太陽は地球を照らし又暖める。)と云ふ文章は、多くの客語(動詞)を有する文章 (Satz mit mehrfachem Prädikate) の一つとなるのである。

5. そこで第二の問は、文中に於ける或成分の重複といふ事を認めるにしてからが、このものと收縮文章との區別點は、どこにあるかと云ふ事である。これは實際上、中々むづかしい問題であるが、Sebste の文典によると：『一文章に於て、種々の文章の殘形が明瞭に認識される時に於てのみ、それは收縮文章と見做される』と定義されてゐる。例へば、Luft und Liebe zum Dinge macht alle Mühe und Arbeit geringe. (事物に對する興味と愛とは、すべての骨折と勤勞とを僅かにする。)と云ふ文章は、勿論單文章で、二個の主語と二個の四格補足語を有するに過ぎないし、Die Lehrer und Schüler haben gestern unsern Garten besehen. (先生たちと生徒たちが昨日われわれの庭を見物した。)と云ふ文章も同様に、二個の主語を有する單文章にすぎない。然るに Die Lehrer haben gestern, die Schüler heute unsern Garten besehen. (教師達が昨日、生徒たちは今日われわれの庭を見物した。)に於ては、一つは Die Lehrer haben gestern unsern Garten besehen. と、一つは、Die Schüler haben heute unsern Garten besehen. と云ふ文章との收縮であることは、一目して解るから、後者は明かに收縮文章だと云ふのである。似た例であるが、Ich habe gestern meinen Onkel besucht und heute einen Freund. と云ふ文章に於ては、und 以下が ich habe heute einen Freund besucht であるのを、前の文章と收縮せしめたために heute einen Freund だけ残つたのであることが明瞭だから、これは收縮文

で、Ich habe gestern meinen Onkel und einen Freund besucht. と云ふ文章は、二個の補足語を有する單文章に過ぎないのである。

重複せる成分を有する文章と、收縮文章との區別は、かく説明すれば、一見明瞭のやうに見えるが、實際に亘つて明確に區別する事のむづかしいのは、Blatt もまた認めるところである。

6. 次には對結的に連ねられた副文間に於ける收縮に就いて述べよう。

I. 接續詞を共通にするもの。

Wenn es beginnt zu tagen, (wenn) die Erde dampft und blinkt, (wenn) die Vögel lustig schlagen, daß dir dein Herz erklingt: da mag das trübe Erdenleid vermischen, da solltest du in junger Herrlichkeit auferstehen.

(夜が明け初め、大地がけぶり、かゞやき、百鳥が囀つて、おんみの心も唱ひ初めるなら、そのときには憂はしき地上の惱みは飛び去るであらう、そのときはおんみは若やかな美しさに於て蘇生しなければならぬ。)

【註】上掲の文では、三個の副文が對結的に連れられてある。而して接續詞 wenn が共通である。

II. 主語・接續詞・定動詞を共有するもの。

Weil du nicht auf deine wahren Freunde (hörst), (und) weil du nur auf falsch Schmeichler hörst, wirst du stets betrogen werden.

(君は君の本當の友人の云ふことを聞かないから、又君はうそつきのおべつか者の云ふことだけ聞いてるから、君はいつも欺かれるであらう。)

Der Mensch vergißt leicht überstandene Leiden, aber er selten genossene Freuden, weil die Erinnerung an jene

angenehm (ist), (weil die Erinnerung) an diese (hingegen) unangenehm ist.

(人間は凌いだ苦難をたやすく忘却するが、享受した喜悅はなかなか忘れない、前者に對する思出は愉快で、後者に對する思出は、之に反して不愉快だからである。)

III. 定動詞と不定法又は過去分詞とが共通なるもの。

Ob der Tag sich neigt, muß es sich erklären, ob ich den Freund (entbehren soll), ob ich den Vater entbehren soll. (日が傾むく前に彼が友をなくすか、父をなくすかのそれが宣言されなければならない。)

IV. 接續詞と定動詞との共通なもの。

Er hat mir gesagt, daß sein Bruder gestern ein Buch von seinem Onkel (bekommen habe), und (daß) seine Schwester heute einen Ring von ihrer Tante bekommen habe. (彼は私に云つた、彼の兄弟は昨日一冊の本を彼の叔父から、また彼の姉妹は彼女の叔母から一つの指輪をもつたと。)

V. 接續詞・主語・副詞的規定を共有するもの。

Er mußte, daß seine Frau jetzt in ihrer Stube saß und (daß sie jetzt) die nötigen Vorbereitungen für seine Reise traf. (彼は彼の妻が、今彼女の部屋に居て、今彼の旅行に對する必要な準備をしてゐるといふ事を知つた。)

VI. 接續詞(關係代名詞)と補足語を共有する例。

Ich verachte die Stutzer, die uns besuchen und (die uns) überschwenglich verehren.

(私はわれわれを訪問して、われらを過度に尊敬するハイカラどもを軽蔑する。)

VII. 補足語・定動詞を共有する場合。

Ich habe gelesen, daß vor längerer Zeit eine Feuerbrunst (den alten Dom bedrohte, und daß),* kürzlich ein Erdbeben den alten Dom berohete.

(私は、少し前に火事が、ほんの先日は地震が、古い伽藍を脅した事を読んだ; *附の Komma に就ては上に述べた。)

VIII. 接續詞のみを残して、他は全く共通の場合。

Wann (er geboren ist) und wo er geboren ist, weiß man nicht mit Gewißheit.

(いつ彼が生れたか、どこで彼が生れたかを、人々は確實には知らないである。)

7. 以上述べ來つたのは、對結的に結ばれた副文章の共通成分を除くことであるが、今度は、同一の副文を有する二つの主文の收縮される場合を述べる。

(A) Daß er seine Abreise verzögerte, hat dich gefreut.
(彼が彼の出發を延ばしたことは、君をよろこばした。)

(B) Daß er seine Abreise verzögerte, konnte mir aber nicht willkommen sein.
(彼が彼の出發を延ばしたことは、私の歡迎出來なかつたことだ; einem willkommen sein=或人の歡迎するところである。)

今、共通の副文を一つにして、

Daß er seine Abreise verzögerte, hat dich gefreut, konnte mir aber nicht willkommen sein.

とする。但しこの場合、特に注意すべきことは、元の二つの副文の主文に對する文法的論理(意味)的關係が全く同一なることである。上例に就て云へば、二つの副文の主文に對する關係が、共に主語文章なのである。

【注】 上掲の例は、『全く同一の副文を共有する複数の主文』の場合であるが、この場合を考へると共に、その反對なる『全く同一の主文を共有する複数の副文』の場合が考へられるのであるが、これは既に掲げたところのもの・うちに存する。例へば、第六項第二の例に於ては、一個の主文を、二個の副文が共有してゐるのである。此場合も、二個の副文の主文に對する文法的乃至意味的關係が、全く同一でなければ、收縮は出來ないのである。

以上の二項は大要を述べたのであるが、細かく調べたら、これらのもの以外の場合もあるかも知れないが、大體これで解つたと思ふ。

【注】 收縮され得る場合にも、好調のため、或は文を力づよくせんがために、わざと收縮を行はない場合もある。

Er hatte das ungewisse Gefühl, als ob er auch nach dem Tode nicht vergessen werde, als ob er auch dann weiter dulden müßte. (彼は彼が死後もまた忘れられないかのやうな、又そのときには引きつづいて辛抱しなければならぬかのやうなぼんやりした感じを持つた。)

8. 次は附結文章に於て、その副文章と主文章とに、同一のものが存する場合、これを削つて文を收縮する場合である。

Er ist, weil (er) tapfer (ist), des Sieges gewiß.
(彼は勇敢だから勝利は確かである。)
Sein Naturereignis wird von der Jugend freudiger begrüßt als der Schnee (begrüßt wird).
(いかなる自然の出來事でも雪〔が歡迎される〕よりも、もつとよろこばしく歡迎されるものはない。)

Er ist bei weitem reicher, als ich (reich bin).
 (彼は私〔が金持である〕よりも、ずっと金持ちである。)
 Wenn nicht er (verloren war), wart Ihr verloren.
 (彼が亡びなかつたら、貴君が亡びたのだ。)
 Hütten und Lager sind, wie (sie) die frühesten (Freistät-
 ten des Verdienstes sind), so auch die letzten Freistät-
 ten des Verdienstes. (小屋と寝床とは、勤勞〔ある人〕
 の、最も早い時代の安息所であると共に、その最終の
 安息所である。)

【註】 定動詞の人称・数が、この際顧みられざる事は、既述の通りである。
 然し此種の削除は、比較文章・原因文章・条件文章又は認容文
 章に於てのみ行はれ、その他の副文には及ばない。

Es ist zweifellos, daß wir durch die Entdeckungen Dr.
 Schliemanns, die wohl meist aus urältesten Zeit sind,
 der berühmtesten Homerfrage einen wichtigen Schritt näher
 gekommen sind. (われらが、ドクトル・シュリーマンの發
 見物—それは蓋し大部分までは、大古の時代からののであ
 らるが—によつて、悪評あるホメーヤ問題に重大なる
 一步を近づけたことは、疑もない。)

此文章に於ては、Daß 文章 (第一副文) の副文 (第二次副文)
 たる關係文章の定動詞 sind を、Daß 文章に於ける sind の存在
 によつて、削除することは出来ない。

9. 以上列挙するところに依ると、收縮は容易な様であるけ
 れども、實は餘程注意を要するもので、間違つた收縮は、高名
 な文士に於ても、屢發見される。今收縮にあたり考慮すべき條
 件を挙げると：

(I) 共通成分を省くに當つては、たとへ同一の形の詞であつ
 ても、意味を異にするか、格を異にするか、或は數を異にして

使はれて居る時は、省略を施してはいけない。まづ(a)意味を異
 にする場合をあげると、Er wird solider, also auch mehr Kräfte
 haben. (彼は、より物固くなりつつある、夫故に彼はより多く
 の力を持つであらうの義) と云ふ文章は間違であつて、それは
 Er wird solider, wird also auch mehr Kräfte haben. としなけれ
 ばならない。何故なら初めの wird は「なる」(become) と云ふ
 動詞の意味に於て使用されてゐるが、「あらう」(shall, will) と云
 ふ意味の助動詞としては使はれて居るのではないから、「あらう」
 の意味の wird は繰り返へされなければならないからである。

今一つ同じやうな例をあげると、Wir haben viel zu tun und
 deshalb gestern unseren Lehrer nicht besuchen können. (われわれは
 多忙である、夫故に昨日われわれの先生を訪問することが出来
 なかつたの意) の意といふ文章は間違である。それは und haben
 deshalb gestern unseren Lehrer nicht besuchen können. と云はなけ
 ればならぬ。即ち第二の haben は、略す事が出来ない。その
 譯は最初の haben は、「持つ」と云ふ意味の動詞で、後の haben
 は、時の助動詞だからである。—又同じ形で意味を異にする例
 を、今一つ挙げると、Der Präsident hat sich nach Ems und wird sich
 dann nach Stiffingen begeben. (大統領はエムスへ行つた、そして
 それからキッペンゲンへ行くであらうの意) と云ふ文章は誤り
 である。何故なら成程 sich begeben は「行く」「赴く」であるが、
 第一は Der Präsident hat sich begeben. で、此場合の begeben は
 過去分詞であり、次の文章の、Er wird sich dann nach Stiffingen
 begeben. に於ては begeben は不定法の形だからである。之を同
 意語の gehen で書き換へると、上の文章の誤謬が明白に解る
 であらう。即上文は、Der Präsident ist nach Ems und wird dann
 nach Stiffingen gehen. となる。即ち前半に必要な過去分詞の缺け
 てゐる事が、直ちに眼に映ずるであらう。だから第一の文章に過

去分詞 *begeben* を入れて、*hat sich nach Ems begeben* とする。然し第二の文章で、不定法 *begeben* を繰り返す事は、文法上は正當であつても、耳に聞いて面白くないから、後半の文に於ては、同意語 *gehen* を使用して、*Der Präsident hat sich nach Ems begeben und wird dann nach Stiffingen gehen.* とするのがよい。上記の誤りは、不定法と過去分詞とが同一形のもの、例へば *verlassen, vertreten, ertragen, ergeben, vergeben* 等に於て、折々起る現象である。かやうな時は一方を除かないと共に、出來得る限り他方を、その同意語で置換へるか、他の云ひ現はしに直すのがよい。例へば、*Er hat bisher meine Kohlen verladen und wird sie auch fernhin verladen.* (彼は今迄私の石炭を積出した、將來も亦それを積出すだらう。) は、寧ろ *Er hat bisher meine Kohlen verladen und wird fernhin auch so tun.* とするのがよい。—同形で意味を異にする例を、今一つあげると、*Die geplante Reise unterblieb, weil sie ihm zu viel Kosten machte und ich mir nichts daraus machte.* (計畫された旅行は中止となつた、と云ふのは此旅行が彼には餘り多くの費用となつたし、私はそれ(旅行)を少しも重くは思はなかつたから。); 第一の *machen* は *verursachen* (惹起すの) 意味で、*einem große Kosten machen* は、或人の大散財となる義; 又 *sich aus etwas viel machen* は「或事を大した事、大に價值ある事だと思ふ義で、*sich daraus nichts machen* は、或事をなんでもない事、つまらぬ事、無價値な事と思ふ義である。即ち上の文章に於ては、括弧中の註釋が示してゐる通りに、二つの *machte* は、各別な意味に於て使用されてゐるから、そのいづれをも略す事は出來ない。

次には (b) 詞の「格」の相違の問題であるが、*die Wohnung, die er gemietet hat und die er vorrichten läßt* (彼が借りて、彼が整備せしむる住居) に於て、第二の *die* 及び *er* を除去し、

die er gemietet hat und vorrichten läßt と收縮するの正しい。しかし、*die Wohnung, die er gemietet hat und vorgerichtet wird* といふ云ひ方は間違である。何となれば *und* の次にあるべき筈の *die* は、一格であるから、四格の意味を有する第一の *die* によつて代理させる譯には行かない。これはどうしても、*und die vorgerichtet wird* としなければ、意味が通らない。即ち形の同じなことに釣られてはいけない。従つて *Das Buch, das er geschrieben hat und ihm viel Geld eingebracht hat* (彼が書き而して彼に多くの金を齎らしたる本のつもり) と云ふ文もまた誤りである。何となれば、*und* の次に來るべき *das* は一格であるが故に、これを第一の *das* で代らせるわけには行かないからである。即ち *Das Buch, das [四] er geschrieben hat und das [一] ihm viel Geld eingebracht hat*, としなければならぬ。—なほ今一つの例を挙げると、*Dies ist es, was die Volksverhetzer immer wieder vorbringen und was doch undurchführbar ist.* (これは民衆煽動家がいくたびも持ち出したもので、しかも實行の出來ないものである) と云ふ文章では、第一の *was* と第二の *was* とは形こそ同じけれど、格を異にするから、これも後者を省く譯には行かない。

【註】 然るに此種の誤謬は、甚屢發見される。例へば詩人 Hölderlin は、*Wir wissen nicht mehr, was wir sind und haben.* (われわれは最早、われわれが何であるか、またわれわれが何を持つかを知らない) と書いて居るが、これは當然間違ひであつて、*was wir sind und was wir haben* としなければならぬ。何故なら、初めの *was* は一格で、次の *was* は四格だからである。

以上は關係代名詞の例であるが、普通の補足語でも、理窟は同様で、例へば、*Das wird euch heitere Stunden bereiten und euch zu neuem Lächeln.* (それは汝等に快活な時間を與へ而して

汝等を新らしい行爲へと力づけるであらう。)と云ふ文に於て、第二の *eu*ch を略す譯には行かない。何となれば、第一の *eu*ch は三格、第二の *eu*ch は四格だからである。

【註】然るにかやうな誤謬は、屢發見せられる。例へば、Schopenhauer には、Das Beste und das Meiste muß daher jeder sich selbst sein und leisten. (夫故に各人は自分自身に對して最良最多のものでなければならず、また自分自身に對して最良最多のものを成しとげればならぬ。)に於ては、das Beste und das Meiste が一方に於て、sein の Prädikativum (連辭と結合する名詞又は形容詞)として一格で使用されてゐると共に、他方では leisten の補足語として四格で使はれてゐる。これは leisten の前に das Beste und das Meiste を代表するものたる es を入れなければ正しくはない。

以上は詞の格の問題であるが、副文章全體の格にも、この理窟は妥當する。例へば、Ob das Wort schon früher in Gebrauch war, können wir nicht feststellen, ist auch ohne Belang. (此詞が既に昔から使用されてあつたかどうかを、われわれは確定することは出来ないし、又重要なことではない。)と云ふ文章に於て、ob 以下を二個の主文に共通なものとして收縮したのは、間違である。何となれば第一の主文に對しては、Ob 文章は補足語文章であつて、四格の意味を有し、第二の主文に對しては、主語文章であつて一格の意味を持つからである。故に第二の文章を、und diese Frage ist auch ohne Belang. とすれば宜し。又 Daß der Verfasser eines solchen Buches ein Jurist ist, kann man nicht vermuten, ist aber wirklich wahr. (かやうな本の著者が法律家だと云ふ事を、人々は推測することが出来ないが、然し、實際本當である。)も同様に、主文に對する格

の關係がもがうから、此收縮は無理である。やはり第二の文章は、das ist aber wirklich wahr. としなければならぬ。

曩に關係文章に就て述べて置いたが、なほこの方面で注意すべき事は、(c) 一方の關係代名詞(又は關係副詞)に前置詞があつて、他方のものにはこゝがないか、或はあつても前置詞そのものが異なるときには、後者を削除することは許されない。例へば、Der Mann, mit dem ich gesprochen und mein Bedauern ausgedrückt habe. (その人と私が話をし、その人に私の遺憾を云ひあらはしたところの人、のつもり)といふ云ひ方は、間違ひである。何となれば、mit dem は初めの副文の動詞には關係するが、第二のものには關係し得ない。それは ausdrücken と云ふ動詞が、一個の三格と一個の四格とを採るからである。随つて、第二の副文は、三格の關係代名詞を要する。だから第二の副文は、und dem ich mein Bedauern ausgedrückt habe, としなければならぬ。—同じやうに、Flechten, an denen ich ein volles Jahr litt und keine Hilfe fand. (私が丸一年間それに罹り、そしていかなる治療をも私が見出さなかつたところの疱疹、のつもり)と云ふ文もまた間違である。第一の副文に於ける關係代名詞 denen の前にある an は、an etwas leiden (或ものに罹る・悩む)の an だから、それは差支へないが、この an denen を Hilfe の方にかけるわけには行かない。『云々に對する救治法』と云ふ意味では、die Hilfe gegen etwas と稱する。だからこれは、Flechten, an denen ich ein volles Jahr litt und gegen die ich keine Hilfe fand とすべきである。—次は關係副詞の例である。Der Verfolgte traf am Abend in Leipzig ein, wo er übernachtete und am nächsten Tage nach Halle fuhr. (追跡〔迫害〕された人は、夕方ライプツヒヒに到着し、そこに一泊して、翌日ハレへ行

つた、のつもり) どいふ文章は、一見差支へないやうではあるが、これも間違ひで、wo は静止點を示すが、出發點は示さない。『そこから』は von wo aus である。従つて後半は、von wo aus er am nächsten Tage nach Halle fuhr. である。

(II) 一個の文章に對して、文法上又は論理上の關係を異にする二つの文章を收縮してはならない。たとへば、Weil er mehrere Verbrechen begangen hatte, wurde er im Gefängnis gesetzt und gestern wieder freigelassen. (彼はいろいろの犯罪をしたので、投獄せられ、昨日また放釋された、のつもり) と云ふ文章に於ては、weil 文章は、第一の主文の理由を述べるだけで、第二の主文には何等の論理上の因縁もない。だからこれは間違つた收縮で、und gestern wurde er wieder freigelassen. と云はなければならぬ。

(III) 一個の肯定文章と否定文章とを收縮するのは間違ひである。例へば、Er würde glücklicher gelebt haben, wenn er nicht von einem krankhaften Ehrgeiz besessen gewesen wäre und die Grenzen seiner Begabung besser erkannt hätte. と云ふ文章の意味は『彼が病的な名譽心を持つてゐなかつたら、而して彼の天賦の限界を知つて居たら、彼はより幸福に暮したらう』のつもりであるが、此書き方では、nicht が第二の主文にかゝるか、かゝらないか不明である。従つてこの場合は、wenn er を繰り返へして、und 以下を完全な文章として、nich: のかゝらぬ事を示すべきである。即ち und wenn er die Grenzen seiner Begabung besser erkannt hätte となるのである。

【註】 序でながら、Der Weise prüft — und achtet nicht, was der gemeine Pöbel spricht. (賢者はしらべる—そして賤民が云ふこ

とを重んじないの義) と云ふ書き方も亂暴で、これは nicht が prüft にかかるとも云へる。従つてこの文章は、Der Weise beachtet das Pöbelgeschwäg nicht, sondern prüft selbst. (賢者は賤民のおしやべりを重んじないで、自ら檢べる) とするか、Der Weise prüft, ohne die Reden des gemeinen Pöbels zu beachten. (賢者は賤民の言説を重んじないで、しらべる) とすればよろしい。(Saunders)

(IV) 附結文章に於て、前行文章が正置法で、後續文章が倒置法である場合には、之を收縮することは出来ない。

Ich bin gestern im Theater gewesen und dort habe ich Ihren Bruder gesehen. (= Ich bin gestern im Theater gewesen und habe dort Ihren Bruder gesehen.)

(私は昨日芝居へ行つた、そしてそこで貴君の兄弟に會つた。)

【註】 括弧中の文章の und 以下は、正置法による配語中から、ich を略して收縮したものである。

第 八 章 省 略

1. 對結文章の收縮 (Zusammenziehung [Z.], Zusammenfassung [Z.]) と、附結文章の縮減 (Verkürzung [Z.]) とについては、既に述べた。今こゝに述べようとする省略 (Ellipse [Z.], Auslassung [Z.]) と稱するものは、前二者と異なり、文章中に於て、文法上に必要な部分ではあるけれど、これを除いても、聽者が習慣上、その文の意味を直ちに理解するから、之を省略することを云ふもので、例へば、朝の挨拶に、Guten Morgen! と云ひ、夕の挨拶に、Guten Abend! と云ふけれど、これを完全に云へば (Ich wünsche Ihnen (einen) guten Morgen (Abend). (私はあなたに良き朝[夕]を祈る) である。然し、Ich wünsche Ihnen (einen) と云ふ文章部分を略しても、聽者は何人でも、直ちにその省略部分を補つて考へ得るから、簡潔・迅速を目的として、各人が共通的に之を省いて使用するのであつて、その結果丁寧に云ふと、却つて言語上の習慣に違反するやうな感じを生ずるに至るのである。— なほ一二の例をあげると、Gewiß! (たしかに!) と云ふ。これは (Die Sache ist) gewiß! (その事は確か!) の略で、Glück auf den Weg! は、(Ich wünsche) Glück auf den Weg! (道中御無事で!) の省略である。

【註】 I. これは云はゞ、各人一致の默契から行はれるもので、自分一人で決めるわけには行かないのである。話者自身の便宜・意圖又は感情によつて、隨意に或部分を略したものは、中斷文章 (abgebrochene Sätze) と稱せらるるもので、これはその時々事情から、聽者が推定・補足して理解するのである。例へば、Ich

wäre gern zu Ihnen gekommen, aber..... (私はあなたのところへ行きなかつた、然し.....) と云へば、『時間がなかつたから』 (ich hatte keine Zeit) とか、『用が多かつたから』 (ich hatte viel zu tun) とか、或はその外の前後の事情から推量すべき文章が略されてゐるのである。又 Du gehst, oder..... (君は行くんだ、でなければ.....) に於ては、語勢にも依るけれど、『罰せられるぞ』 (es gibt Strafe) が略されて居るかも知れない。かゝる一時的なもの、本文所載のものと混同してはならぬ。

【註】 II. 既に述べたとほり、省略は、一般の默契の下に行はれるのであるから、その省略されたもの、何であるかは、聽者が直ちに理解する筈のものであるが、これは獨逸人同志の間のことであつて、われわれには、とんと通用しない。上に挙げたところの Guten Morgen! や、Gewiß! 位の程度ではすぐわかるであらうが、今少し立入つたものでは、最早解らない。上述の Glück auf! もさうであるし、Das ist nicht ohne! (これは ohne Grund の Grund を略す; それは理由根據のないことではない) なども、邦人にとつて厄介千萬な表現である。況んや Da soll doch! が Da soll doch der Teufel dreinschlagen! (忌々しいな!) の省略であり、Er zieht den kürzern. が Er zieht den kürzeren Salm beim Losen. (彼は抽籤の際短かい方の莖[籤]を引いた、損をする馬鹿を見る) の省略であるなどは、解らう筈がないのである。否、前掲の最も簡明な種類のものさへ、解らない事がある。例へば、人の旅立ちを送る辭なる „Glückliche Reise!“ (これは勿論 (Ich wünsche Ihnen (eine) glückliche Reise! 幸福なる旅行を祈る、御無事で!) の略である) を、(Es ist eine) glückliche Reise! の意味と考へ、『結構な旅ですなあ! と譯した本を、筆者は見た事がある程である。だから獨逸人の極めて容易に解る事が、われらには極めて解りにくいのである。従つて、かやうなものは、一々字引にあつて見なければならぬ。

2. 省略の目的は、語勢の簡勁・表現の澄冽たることによつて、印象を力づよくし、又は感情の高揚せることを示す事にある。従つてその使用せらる場合は、格言・諺・命令・願望・呪咀・誓約・確言又は挨拶及び標題などであり、又急速なる間、或は激發せる話方などに使用される。

I. 格言・諺

Ehestand (ist) Ehestand. (結婚は煩累なり; Ehestand= 悲しむべき状態、又は境遇)
Wenn das Ende gut (ist), (so ist) alles gut.
(終り良ければ、萬事よし。)
Wie du mir (tust), so (tue) ich dir.
(お前が私にするやうにお前にしてやる。)
Man soll erst besinnen, dann beginnen.
(まづ思案して、それから初めよ。)
Obgleich man heute rot (ist), (so ist man) morgen tot.
(今日は紅顔、明日は死人。)

II. 命令・願望・呪咀

(Komm) rasch! (早く来い!) [單數]
(Kommt zur) Hilfe! (救助に来て呉れ!) [複數]
Laß mich (sein, sowie ich bin). (私に構はずに!)
(Ich bitte um) Verzeihung! (御免下さい; Um Verzeihung! と云ふこともある。)
(Gott) bewahre! (とんでもないこと!)
Zum Henker (schere dich)! (こん畜生め!; sich scheren= 去る; Henker= 刑手。)

III. 誓約・確言

(Ich schwöre) bei meiner Ehre! (私の名譽にかけて [誓ひます]!)
Auf (meine) Wort (schwöre ich)! (私の言葉にかけて!)
Bei Gott (schwöre ich)! (實に! 誠に!)
(Das ist) ganz recht! (全くその通り!)

IV. 挨拶

(Seid uns) willkommen! (よく入らしやいました!)
(Ich hoffe) auf Wiedersehen!
(またお目にかゝりませう! 左様なら!)
(Ich wünsche) viel Vergügen! (面白く遊んでいらつしやい! 愉快にやつていらつしやい!; 物見遊山などに出る時に送る言葉)
(Haben Sie) ausge schlafen?
(よくおやすみになりましたか?)

V. 標題・日附・宛名等

(Hier soll) die Eaglehre (behandelt werden). [標題]
(こゝでは [文章論] が取扱はれる筈である; 單に die Eaglehre となつてゐる標題は、實はこの義だと云ふ事である。)
An Herrn Prof. Dr. Walzel (ist dieser Brief gerichtet). [手紙の宛名] (教授・ドクトル・ヴァルツェル殿に此手紙は宛てられてゐる; 單に An den Herrn.....としてあるのは、實はこの義である。)
(Dies ist geschrieben zu) Sendai, den 29. Juli 1932.
[手紙等に書かれるもの。] (千九百三十二年七月二十九日仙臺にて [誌さる。])

VL 急速なる問、又は激して發した言葉

Wer (ist, steht, geht) da?

(そこに居る〔立つてる、歩く〕のは誰れだ?)

Woher des Weges (bist du gekommen)?

(どこから〔君は〕来たのか?)

Was soll das (heißen, bedeuten od. nützen)?

(それは何の意味か〔何の役に立つか?])

Wozu (dient od. nützt) das? (それは何の役に立つか?)

(Sind Sie damit) einverstanden?

(〔貴君は〕同意ですか?)

Ich (hätte) dich getadelt! (僕が君を非難したつて!〔とんでもないの義])

(Das ist) schade! (残念だ!)

Von Erbarmen (findet man) keine Spur!

(情けは痕跡もない、塵ほどもない!)

3. 上掲の諸收縮文 (elliptische Sätze) の大部分は、單文章の或部分を省略したもので、今單文章に於ける省略の各種の例をあげて見ると:

(Ich) bitte! (どうぞ!)

[主・略]

Frische Fische (sind) gute Fische. (早い丈けよい。)

[連辭 (定動詞)・略]

Ich (sollte) Sie ehren? (貴君を尊敬しろですか?)

[定動詞・略]

(Ist es) nicht wahr? (さうぢやないですか?)

[主・連辭 (定動詞)・略]

(Haben Sie) Geduld! (忍耐し玉へ!)

[主・定動詞・略]

(Ich) wünsche dir (einen) guten Abend.

[主・定・補・略]

Er ist in die Kirche (gegangen). (彼は教會へ行つた。)

[過去分詞・略]

Was soll das (heißen, bedeuten)? (それはどう云ふ意味か?)

[不定法・略]

【註】 命合法に於ては、初めから主語が略されて居るから、定動詞のみが略される。(Gebt) Feuer! (火を呉れ!) (Gehe od. Geh) frisch ans Werk! (元氣よく仕事にかゝれ!)

4. 複合文章に於ても、或文章部分の省略は行はれる。その場合を擧げると:

I. 主文全體の省略されるもの。

Wenn er sich nur nicht irrt (, so freue ich mich).

(彼が迷ひさへしなければ、「私はうれしい」。)

(Es ist fraglich,) ob er glücklich sei?

(彼が幸福かどうか、「疑問だ」。)

(Ich) wundere mich,) wie du dich beeilt hast!

(君の急いだのには、「僕はおどろく」!)

(Ich) würde mich freuen,) wenn er doch käme!

(彼が来てくれるなら、「僕はうれしいが」!)

【註】 上掲の文例は、その省略した主文を補はないでも、今では意味が明瞭なる程度に達してゐるから、獨立文章と同じ價値を有するのである。Sütterlin は夫故に、これらを、「變化して主文となれる副文」(Zum Hauptsatz erstarrte Nebensätze と呼んでゐる)。

II. 副文全體を略せるもの。

Ich täte es nicht (, wenn ich Sie wäre)!
(「もし私が貴君であるなら」、それはいたしますまい。)

III. 主文及副文の各一部が省略されたもの。

(Wenn) Ehre verloren (ist), (so ist) alles verloren.
(名譽が失はれば、萬事が失はれたものだ。)
(Was man) jung gewohnt (ist), (wird) alt getan.
(若いときに慣れたことは、年とつてから爲される。)

IV. 主文の一部が省略されたもの。

(Es ist) gut, daß du kommst. (君の来るのは結構だ。)
Richt (sage ich), daß ich wüßte. (僕は知らんよ。)
Wie (wäre es), wenn man ihm die Sache erzählte?
(彼にあの事柄を話したらどうだろうか？ 副文の定動詞は、勿論可能法である。)

V. 副文の一部が省略されたもの。— これは副文の定動詞に於て特に見られる。

Man sagte mir, daß du hier gewesen (seiest).
(君がこゝに居たと人が私に話した。)
Genieße, was dir Gott beschieden (hat).
(神がおんみに與へたものを享樂せよ。)

【註】 副文に於ける定動詞の省略は、屢起ることで、Eichendorff の如きは、極めてこれを好んだ。しかし此省略は、折々時語の不明を來す。— 例へば、單に……gesagt と云つたのでは、gesagt hatte の略なりや、gesagt hat の略なりや不明なるが如きが、それである。故に、かかる場合には、省略せざることにしなければならぬ。Weyl 氏は通常の場合に於ける定動詞省略を、

推薦出來ない (nicht zu empfehlen ist) 事だとしてゐるけれど、副文の定動詞を主文のそれとが相連続して同形となる場合には、副文の方の定動詞を略すべしと云つてゐる。例へば Die Kunde (報知), daß er krank ist, ist betrübend (悲しむべき)。に於て、daß 文章の ist を略し、又 Daß er dich gekränkt (感情を害する) hat, hat niemand geleugnet (否定する)。に於て、副文の hat を省くが如き事である。

Du mußt, wo (es) möglich (ist), ins Bad reisen.
(君はもし出来るなら、湯治場へ旅行しなければならぬ。)

【註】 かかる省略文 (wo möglich) は、最早『文章たる性質をほとんど失つて、單なる文章成分と云つてもよい位になる』(Weyl) ののである。上例に於て、Du mußt womöglich ins Bad reisen. と云へば、純然たる單文章で womöglich は、單なる副詞である。

5. 上に述べ來つた省略とは、やゝ異つて、一般的默契の下でと云ふ程ではないが、次のやうな場合に於て、折々一つの文章又はその短縮文が省かれる。

i) 二個の文章の間の思想的聯絡をなすものが、省略されてゐる例。— 言ふまでもなく括弧内のものが擧げられてゐないのである。

Ich besuchte ihn, (um zu sehen,) ob er noch lebe und gesund sei. (私は彼が生きてゐてなほ丈夫であるか。どうかを見るために、彼を訪問した。)
Ich will hinaufsteigen zu dem Herrn, (um zu versuchen,) ob ich vielleicht eure Sünde verfühnen möge.
(私は、私がおんみたちの罪を或は贖ひ得るかどうかを試すために、主のもとに登つて行かうと思ふ。)

Ich bin ehrliches Mädchen, (sage ich,) daß Sie es nur wissen. (あなたがそれを御承知下さるために、申しますが、私は手がたい娘で御座いますよ。)

Wenn Sie mir schreiben wollen, (so wissen Sie,) ich wohne in Berlin in der Goethestraße Nr. 38.

(もしお手紙を私に下さるなら、私は伯林ゲテ街三十八番地に住んで居りますと御承知下さい。)

ii) zu を有する不定法文章に對する主文的文章の省かれてゐることがある。

Und (wie hätte ich denken können), so zu enden!
(こんな終りにならうとは [どうして私に考へることが出来たらうか]!)

Ich fand in dem Korbe einen Ölkrug, (der dazu dienen sollte,) das Licht zu unterhalten.

(私は籠のなかで、燈火を保つことに役立つべき油壺を見出した。)

第 九 章

複 雑 複 合 文 章

1. 二個の主文から、或は一個の主文と一個の副文とから成る複合文章 (der zusammengesetzte Satz) を單純複合文章 (der einfach zusammengesetzte Satz) と稱し、それ以上の複雑なる構成を有する複合文章を、複雑複合文章 (der mehrfach zusammengesetzte Satz) といふ事は、既述の通りである。さて單純複合文章については、その各種に亘つて一應の検討を遂げたのであるから、今度は複雑複合文章に就いて述べる順序であるが、この種の文章の形態は、種々さまざまで、容易く概説するわけには行かない。こゝでは、主として實用上の見地から、要點だけを述べて置かうと思ふ。

2. 上述の目的のために、本章では、まづ複雑複合文章を、三大別する。

i. 複雑對結文章

ii. 複雑附結文章

iii. 雙對文章

【註】一般の文法書の説明は、——英獨のものでも、邦文のものでも、——大抵單純複合文章に終つて、複雑複合文章に就いては、全く述べて居ないか、或は述べてあつても、漠然たるものであるやうに思はれる。これは文章論の此部分が、實用的の見地から考へて、左程重要でないことにも由るであらう、——例へば Schelling でも、Strauss-Rerger でも、Blag でも、乃至 Curme でもさうである。比較的この方面で詳しいのは、Bethel と Schje とであるが、前者の分類は、あまり大まかで、これには據りがたい。繼かに Schje 丈けが、充分とは云へないが、やゝ細しい分類法を採つて

あるから、こゝではこれを基礎として、Bippert, Wasserzieher 等を参照して述べようと思ふ。こゝで注意しなければならないことは、文法の此部分に對する分類法が、明確でないやうに、そこに使用される術語すらも、使用者によつて相違するといふ事實である。例へば複雑複合文章と云ふ名稱夫れ自身についてすら、相異なる見解が存するのである。かう云ふことは、文法の他の部分に於ても、ないことはないが、この部分に於て特に顯著な現象のやうに思はれる。

3. そこで、第一の種類なる複雑對結文章 (die mehrfache Satzverbindung) には、二種ある。

I. 三個又はそれ以上の對結的に結ばれた主文から成るもの。—それらには、對立的接續詞の存するものと、存せざるものがある。

Ringsum grünen die Feden,
Ringsum blühen die Bäume,
Ringsum zwitschern die Vögel,
Ringsum summet das Bienenvolk. (Gölty)

周圍には生垣が緑なす、
周圍には木々が花咲く、
周圍には禽が囀づる、
周圍には蜂が群れ飛ぶ。
(Bienenvolk=蜂群; summen=飛びながら唸るやうな音を立てる)

【注】 以上は接續詞なくして、四つの主文が内容的に相關聯して並置されたものである。接續詞なき結合を、*asyndetische Vereinigung* と云ひ、接續詞ある結合を、*syndetische Vereinigung* と稱する。(syndetisch=結合的)

II. 對結的に結びつけられた一つ又は多くの文章が、既に複合文章たるもの。

a) Nun ist wieder Morgen, die Nacht vollendet ihren Lauf;
nun wachen alle meine Sorge auf einmal wieder mit mir
auf; die Ruh' ist aus, der Schlaf ist hin, der Tag ruft zum
Geschäfte.

(今やまたもや朝である。夜はそれの歩みを終る; 今や私の凡べての憂が、一どきに私と共に目覺める; 安らひは終つた、眠は去つた、日は仕事へと喚ぶ。)

【注】 上例に於ては、第一のセミコーロンまでが、既に對結文章をなし、次は單文、その次はまた對結文章である。

b) Die Zwietracht flieht, die Donnerstürme schweigen, gefesselt
ist der Krieg, und in den Krater darf man niedersteigen,
aus dem die Lava stieg.

(不和は去り、雷電風雨は黙す、戰は縛しめられ、人々は熔岩が立ち上つて來た噴火口へ降りて行ける。)

【注】 これは終りの文章だけが、附結文章であるが、此複合文章と他の單文とは、對立的に結びつけられてゐる。

c) Die Leidenschaft flieht, 激情は去る、
Die Liebe muß bleiben; 愛は止まらねばならぬ。
Die Blume verblüht, 花は凋む、
Die Frucht muß treiben. 實は結ばねばならぬ。

[Goethe]

【注】 上例は、二個の對結文章の結合である。即ち上二行と、下二行とは、各一個の對結文章である。

d) Sage nicht alles, was du weißt; aber wisse immer, was du
sagst.

(汝が知れるすべては云ふ勿れ、然し汝の云ふことを常に知るべし。)

【註】 第一の文章も第二の文章も、共に附結文章で、これを對結接續詞 aber が結んでゐる。

4. 第二の種類なる複合附結文章 (das mehrfache Satzgefüge) と稱するものを、二つに大別する。

I) 一個の主文章に、複数の副文章が附いたもの。—これにはまた三個の場合がある。

a) いろいろの種類副文章が、主文のいろいろな部分に關係する場合。

Das Beste, was die Geschichte uns bietet, ist die Begeisterung, die sie erweckt.

(歴史がわれらに提供する最上のものは、それが呼び起す感激である。)

Wer die Hand nicht brauche, der ist nicht wert, *daß er sie hat.
(手を使用しない人は、それを持つ價はない。)

【註】 *daß 文章は、wert の補足語文章である。

Es ist ein großer Unterschied zwischen der Beruhigung, die aus der Überzeugung entspringt, und der Ruhe des Trägen, die sich nicht um Wahrheit bekümmert. (Fr. Jakobs)

(確信から湧き出づる安心と、眞理を念とせざる怠惰者の安らかさとの間には、大なる差別がある。)

【註】 第一の副文章たる關係文章は、Beruhigung に屬し、第二の副文章は、der Ruhe につくのである。又 des Trägen の一格は der Träge (=なまけもの) である。

b) いろいろの副文章が主文の全體に關するもの。

Wenn du einmal von einem außerordentlichen Umdau hören solltest, so untersuche ja alle Umstände genau, bevor du einen Menschen mit einem so abscheulichen Schandfleck brandmarken lässest. (Bessing)

(君が時あつて非常な忘恩について聞くやうなことがあるなら、君が或人間にかやうな忌むべき汚名をきせる前に、是非一切の事情を精密に検討せよ。)

【註】 主文は so から genau まで、wenn は條件文章、bevor 以下は時の狀況語文章である。—主文全體にかゝるかやうな副文章は、大抵一個の副文章を、主文の前に、別の副文章を、主文の後にする習はしであるが、全部を後置することもある。

c) 複数の副文章が一個の主文中の同一成分に關係する場合。

【註】 今 Bebel 氏の文典の例に従ひ、主文を A, 又 A に直屬する副文章はいづれも a¹ とし、a¹ に關する副文章は a²; a² に關する副文章は、a³ とする。

Ich soll erkennen [A], daß mich niemand haßt (a¹), daß niemand mich verfolgt (a²). (Goethe)

(私は誰れも私を憎まぬこと、何人も私を迫害しない事を認識しなければならない。)

【註】 二つの daß 文章は、共に erkennen の補足語たる價値を有する副文章であつて、erkennen に対する資格は、全く同一である。

Brauch' ich zu sagen [A], wie bedenklich dieser Umstand sei (a¹), welche Umkehrungen dieser Geist vorbereite (a²), welche Gewalttätigkeiten er drohe (a³), in welches Chaos er alles zu verwandeln strebe (a⁴)?

(此事情が如何に重大であるか、いかなる變革をこの精神が準備するか、いかなる暴行をそれがやらうと脅威するか、いかなる混亂に、それ(精神)がすべてを、變へようと努力するかを、私は云ふ必要があるか?)

【註】 この文例に於ては、四個の間接疑問文章が *sagen* に、同じ資格を以て從屬してゐる。

Das ist des Deutschen Vaterland (A), wo Eide schwoört der Druck der Hand (a¹), wo Treue hell vom Auge blüht (a²), wo Liebe warm im Herzen sitzt (a³).

(これは、握手が誓ひをなし、誠意がはつきりと眼から閃めき、愛が暖かく心に存するところの獨逸人の祖國である。)

【註】 此例では関係副詞 *wo* を有する三つの副文が、同一の資格を以て、*Vaterland* に從屬してゐる。

上の如く複数の副文が、一個の主文中の同一成分に、同じ資格を以て、並列的 (*nebengeordnet*) に從屬するものを、連鎖文章 (*der fettengliedrige Satz*) と稱する。

【註】 複数の副文が、同一の主文へではないが、同一の他の副文へ並列的に從屬するものもある。

Die Reue eines verlorenen Lebens wird zum Furie mancher Menschen (A), die zu spät einsehen (a¹), was sie tun sollten (a²) und was sie wirklich getan haben (a³).

(失敗せる生涯の後悔は、自分たちが何をなすべきであつたか、及び何を實際なしたかを、あまりに遅くなつてから見抜くところのあまたの人々のフーリエになる; フーリエとは、罪を犯せる人に永久に跟從して行く復仇の女神である。〔羅馬神話〕)

連鎖文章の如き形態は、平明にして解り易いけれど、長く續くと、單調に流れ、讀者を倦ましむる弊がある。

II. 一個の主文章に從屬する副文章それ自らが、複合文章なるもの、—これには、また二つの場合が存する。

a) 副文章が對結文章なるもの。

Nicht was das Vaterland einst war, sondern was es jetzt ist, können wir an ihm achten und lieben. (Herder)

(祖國が嘗つてそれでありにしものではなく、現在それであるところのものを、われらはそれ〔祖國〕に於て重んじ且つ愛する。)

【註】 *was* は *that which* の義; — 副文は *nicht.....sondern* で結んだ對結文章である。

Wenn man von den Leuten Pflichten fordert und ihnen keine Rechte zugestehen will, muß man sie gut bezahlen. (Goethe)

(もし人々から義務を要求し、彼等に何等の權利をも、承認しようと思はないなら、彼等によい報酬を與へねばならぬ。)

b) 副文章が附結文章なるもの。

Ehe der Tag, der jetzt am Himmel verhängnisvoll heranzieht (a²), untergeht (a¹), muß ein entscheidendes Los gefallen sein (A). (Schiller) (今大空に、禍に充ちて明け初むる日が、沈む以前に、決定的な運命が、きまらなければならない。)

【註】 *Ehe* から *untergeht* までの副文は、關係文章を有するから、これは附結文章である。

Man muß den schlechten Menschen beachten, der nie bedacht, was er vollbringt.

(人は、自分が何を完成するかを、決して熟考したことのない劣等な人間を輕蔑しなければならぬ。)

【註】 der.....bedacht は、Mensch に関する關係文章で、was 以下は此副文に隸屬する副文である。又 bedacht の後に hat を略してある。

上例所見の如く、第二の副文は第一の副文に隸屬してゐるのであるが、更に之を續けて第三の副文は、第二の副文に屬し、第四の副文は、第三の副文に屬するやうに階段的 (untergeordnet, stufenartig) の關係で、副文をつないで行く方法がある。これは段階文章 (der stufengliedrige Satz od. Treppensatz [M.]) と稱せらるるもので、第一の副文を第一階(又は第一次)副文 (Nebensatz der ersten Stufe), 第二の副文を第二階(又は第二次)副文 (Nebensatz der zweiten Stufe) と稱する。これは前掲の連鎖文章の對偶をなす特殊の配文法である。

【註】 上の Stufe の代りに、Grad [M.] (等級) といふ詞を使用する人もある。例へば、第一級の副文 (Nebensatz des ersten Grades), 第二級の副文 (Nebensatz des zweiten Grades) と云はんが如きである。

今この階段文章について、二三の例を擧げやう。

【註】 主文を A, B; A に直屬する副文 a¹ とし、a¹ に直屬する副文は a² となすこと、前の通りである。

Der Gedanke hat mich am meisten erfrischt [A], daß es Tugend gäbe (a¹), die es nicht geben würde (a²), wenn nicht böse Menschen in der Welt wären (a³).

(もし世のなかに悪人がなければ、存在しないやうな徳義があると云ふ考が、私を最も多く元氣づけた。)

【註】 云はずとも解つてゐるが、daß es Tugend gäbe が、Nebensatz

des ersten Grades である。die es nicht geben würde が、Nebensatz des zweiten Grades; wenn.....wären が、Nebensatz des dritten Grades である。

Hier schon entdeckte ich [A], wieviel bei einem Feldherrn gewonnen ist (a¹), dessen Ruhm nicht der gewagten Unternehmungen bedarf (a²), wodurch solche sich einen Namen machen müssen (a³), die eben erst in die Bahn des Ruhmes eingetreten sind (a⁴).

(こゝで私は既に、その人の盛名が、大膽な企てを必要とせざる將軍にあつては、いかに多くの利益が存するかといふ事を發見した。今やつと名聲の域に入つたばかりの人たちは、かゝる企てによつて、名譽を博さなければならぬのだ; viel gewonnen sein=多くの利益が得られてゐる、澤山の得[とく]がある。)

【註】 dessen Ruhm は Feldherrn に關し、wodurch の wo は、Unternehmungen に係り、最後の副文章の die は、solche にかゝる。

Er ist ein altes Sprichwort [A], daß der Mensch dann beten lernt (a¹), wenn er in eine Not gerät (a²), aus der sich selbst nicht zu erretten vermag (a³), weil es ihm an der rechten Einsicht fehlt (a⁴), die für diesen Zweck erspriesslichen Mittel und Wege zu wählen (a⁵).

(人間は、そのなかから自己を救ひ出すことが出来ないところの—その理由は、この目的に對して有利な手段や方法を選ぶべき正しい見識が彼に缺けてゐるからだが、—或窮厄に陥れる時、その時祈ることを學ぶのだと云ふのが、昔からの諺である。)

【註】 a⁵ は不定法文章で、Einsicht の附加語文章の短縮である。

斯る構造を有する文章も、明瞭ではあるが、階段を重ねるに従ひ、氣分の弛緩、低下を來すから、あまり長く続けることは避けるがよろしい。

上述の文體の一つで、關係文章を、前行文に挿入的に蔽めて行く方法もある。

Die geringste Verlegenheit, die aus einem leichten Irrtum, der unerwartet und schadlos gelöst werden kann(a²), entspringt(a¹), gibt die Anlage zu lächerlichen Situationen (A).
[Goethe]

(不意にまた損害なくして解決され得るたやすい迷妄から生ずる最も僅かな狼狽が、笑ふべき事態に對する基礎を與へる。)

【註】 第一の副文の die は、Verlegenheit に係り、第二の副文の der は、Irrtum に續く、entspringt は第二の副文の定動詞である。

Den Lesern wird das Bild des Prinzen, dessen liebenswürdige Eigenschaften von allen, die ihm näher zu treten(a²) die Ehre hatten(a²), gerühmt werden(a¹), willkommen sein. (A)
(彼に近寄る光榮を持つた凡べての人々によつて、その人の愛すべき性質が嘆賞されるところの公子の肖像は、讀者たちには歡迎されてあるだらう。)

【註】 dessen は des Prinzen にかゝり、die は allen に續く、gerühmt werden は dessen Eigenschaften に對する定動詞で、主文の定動詞 wird は、文末の willkommen sein と結ぶ。又 ihm näher zu treten は、die Ehre にかゝる附加語文章の短縮である。序でながら der Prinz と云ふ名稱は、人臣には使用されない。

此形態を用ゐると、文の終りに近くなつて、多くの定動詞が輻湊併列する危険があり、又挿入文の頻出によつて、印象の統一

を妨げる恐れがあるから、或程度で止めなければならぬ。

【註】 挿入文 (Einschaltung [E.]) とは、初められたる文章を、突然中止して、他の獨立の思想を云ひ初める形で、この思想が終つてから、再び元の文の敘述をつづけて行くのであるが、これは前後に横線 (—, Gedankenstrich [D.]) を置くか、或は括弧 (Parentese [P.]) を入れて、主なる文脈と區別をする。しかしこれを餘り多く用ゐると、文體を醜くし、煩瑣の感を與へるのみならず、往々對者の理解の統一を妨げるから、やゝ長い挿入文のあとでは、前に中止した文を初めからやりなほすがよい。例へば、
Ich kann meinerseits — und ich spreche im Augenblick meine persönliche Überzeugung, nicht die der königlichen Staatsregierung aus — ich kann meinerseits dieser Frage eine so hervorragende praktische Bedeutung, wie ihr hier beigelegt zu werden scheint, nicht beilegen. [Bismarck]
(私は私としては、——私は今私の個人的確信を申し述べるので、王國政府のそれを申し述べるのではないが、——私は私としては、此問題に對してこゝに與へられて居るやうに見えるほど優越なる實際的意義を與へることは出來ないのである。) に於ける如くである。——挿入文は上叙の複雑複合文章に直接の關係があるわけではないが、特に項を設けて説く程の事もないから、讀者の參考に資するために、序でに述べたのである。

複雑複合文章の分類法は、別に立て得るであらうが、Deyse 氏によつた分類法はこれで終る。文章法の一般的知識としては、これ位でよからうと思ふ。

【註】 I. Gurler 氏の文典は、連環文章と階段文章とを、次の如く示してその構造を明らかにしてゐる。これも參考のため掲げやう。

[A] 並列的のもの；連鎖文章。

Wir vergessen immer, [主文]

1. daß ein schlafender Fuchs kein Huhn fängt, (副文)
2. und daß wir im Grabe noch Zeit zu schlafen haben. (副文)
[Jean auf]

(われらは、眠れる狐が鶏を捕へぬこと、及びわれらは墳墓の中で、眠むべき時を、なほ持つてゐることを、いつも忘却する。)

(B) 階段的のもの；階段文章。

Sie kamen bei dem großen Markt an, (主文)

1. in den die Nebenstraße mündete, (第一級副文)
2. in der ihre Mutter ihr Geschäft hatte. (第二級副文)

(彼等は大きな市場へ到着した、その市場へは、彼等の母が、そこで店を持つてゐたところの横町が通じてゐた。)

5. 最後には所謂双對文章 (Periode, [§.]) なるものについて説明すべき順序であるが、此術語は人によつて用法を異にし、最廣義に解するものは、複合文章全體を包含させ、やゝ狭く定義するものは、複雑複合文章のみを指定し、最狭義に考へる人は、複雑複合文章中の或一つの特殊の形式を有するものだけを包括させる。こゝでは最終の考へ方によつて、Periode をほゞ次の如く定義しよう。

双對文章とは、一個の巧妙に築きあげられた複合文章であつて、前文章 (Vorderatz [§.]), 後文章 (Nachatz [§.]) の二つから成り、兩者の關係は、極めて有機的で、對照・問答・緊張・弛緩・原因・結果・條件・結論、その他豫期と實現、措定と反措定の如き、必然的の關係を有し、相待ち・相補ひ、相對し・相合して、一個の思想的統體をつくるものであつて、兩者の文法的關係は對立的であるときと、從屬的であるときとがある。前文章が一複合文より成り、後文章が同じく一複合文より成るときは、之を二節 (zweigliedrig) の双對的文章と云ひ、そのいづれかが二

個の複合文章より成るときは三節 (dreigliedrig) の双對文章といふ、四節五節等みなこの例に依るのである。

【註】 双對文章 (或は『完全文章』と譯されるけれど、さうすると、他は不完全文章のやうに聞えるから、これは採らぬ。) の定義は、非常に下し難いと思へ、諸書各その説明に苦心して居る。Weigel 氏の文典の如きは、Periode といふ詞の意義を説明するに甚しく努力してゐる。然しわれらに取つては、Periode の精細な檢究は、文法を文法的興味そのものために討査する場合の外には、ほとんどその必要を見ない。然し今参考のために、Weigel 氏が Periode の特質として擧げた五條件を紹介すると：

- a) 結合せられたる諸思想は、相互的に、一個の内的關係 (innere Beziehung) を持たなければならない、——換言すれば、一個の中心點 (Mittelpunkt [§.]) を持たなければならないのである。
- b) 双對文章は、あまりに長くはいけぬ、それは容易に通觀し得られなければならぬ；夫故に五節以上に出る事は、好まれない。
- c) 前文章と後文章との間には、或種の均衡 (Ebenmaß [§.]) がなければならぬ。一方が他方にくらべて、異常に長いのは、よろしくない。
- d) 双對文章は、快適な韻律的の運動を、——換言すれば高低揚抑の快い交替を、——持たなければならぬ。
- e) 讀者の緊張が、最後まで潑刺と保持されんがために、思想の高揚が缺如してはならぬ。

この定義で分る通り、双對文章の研究は、純然たる文法よりも、むしろ文體論 (Stillehre [§.]), 修辭學 (Rhetorik [§.]) の方面に屬する部分が多いが、それらは他日『文體論』を發表する機會に譲らう。高低揚抑の如何なるものかについては、『韻律學』 (Verslehre [§.], Metrik [§.]) についての若干の知識がなくては、解りかれない。——獨逸韻律法については、邦文の書は全くない。拙

著『獨逸文章論』(南山堂版)が、纔かにその輪廓を示してあるだけであるが、これも他日詳説したいと思つてゐる。

符號について云ふと、前文章と後文章との間には、兩者が長いときには Doppelpunkt (:) を置き、短かいときには、Semikolon (;) 又は Komma を置く。各副文の間は、副文自體の長いときには、Semikolon を使用し、短かい時には Komma を使用すること、普通の場合と同じである。

[A] 對結的雙對文章

(a) Zweigliedrig [二節]

Recht tun ist gut, die Tugend lieben schön [第一節]; || aber eins hebt alle Wünsche auf, nämlich die kindliche Ergebung in die Fügung einer allwaltenden Vorsehung [第二節]。
(正しい事を行ふのは宜しい; 徳を愛するのは結構だ; || しかし一つの事が、すべての求めを要らなくする、それは一切を支配する神慮の攝理への純眞な服従である。)

【註】 第一節が前文章で、第二節が後文章である。兩者の外的關係は、反意的 (adversativ) である。そして此雙對文章には、一個より多くの思想が云はれてゐる。——又符號(||)は便誼のため、前文章と後文章の限界を示せるもの。

(b) Dreigliedrig [三節]

Zwar ist die Erde von kühnen Seefahrern bereits vielfach nach den verschiedensten Richtungen umschifft [第一節]; zwar sind unternehmende Reisende trotz der drohenden Gefahren, die ihnen teils ungünstiges Klima, teils die Roheit der Bewohner bereiteten, in das Innere aller Kontinente

eingedrungen, und der größte Teil der Länder des Erdballs ist dadurch bekannt worden [第二節]; || dessenungeachtet fehlt noch viel daran, ehe man wird sagen können, es sei die ganze Erde in allen ihren Einzelheiten und Gebilden in genügendem Maße erforscht [第三節]

(成程地球は大膽なる航海家たちによつて、既に度々種々様々の方向に於て回航された、また成程、或部分までは悪い風土が、また或部分までは、住民の兇暴さが、彼等に與へたる脅威的の危險があつたにも拘らず、進取的な旅行者たちは、すべての大陸の内部へ侵入し、地球上の國土の大部分は、これによつて知られるに至つたのである。|| それでも全地球は、そのすべての細項と産物とに亘つて、充分に探究されたと云はれ得る以前に、それに対して、なほ多くの事が缺乏してゐるのである。)

[B] 附結的雙對文章。

(a) Zweigliedrig [二節]

Da der Hand des Allmächtigen die größeren Erden entquollen, die Ströme des Lichts rauschten und Siebengestirne wurden [第一節]: || da entrannst du, Tropfen, der Hand des Allmächtigen. (Klopstock)

(全能のものの御手から、より大なる地球等〔遊星を指す〕が湧き出で、光の流れがざわざわと流れ出したとき、|| その時、滴よ〔地球を指す〕、汝は全能のものの御手から滴り出たのである。

【註】 第一節 (即ち前文章) が副文章である。かゝるものを、上昇する雙對文章 (steigende Periode) と稱する。

(b) Dreigliedrig [三節]

Wer nie sein Brot mit Tränen aß [第一節], wer nie die kummervollen Nächte auf seinem Bette weinend saß [第二節]; || der kennt euch nicht, ihr himmlischen Mächte [第三節]。(涙を以て自らのパンを食べたことのない人は、悲しみ多き夜な夜なを泣きながら寢床の上に座つてゐたことのない人は、|| おんみたちを、—聖なる力を知らないのである。)

【註】 viergliedrig, fünfgliedrig の例は、略さう。

[C] sechsgliedrig [六節]

Wir fahren zu Berg [第一節], wir kommen wieder [第二節]; || wenn der Ruchend ruft [第三節], wenn erwachen die Lieder [第四節], wenn mit Blumen die Erde sich kleidet neu [第五節], wenn die Brunnlein fließen im lieblichen Mai. [第六節]

(われらは山へと登る、われらはまた下りて来る; 杜鵑が鳴き、歌が目ざめ、大地が新らしく花を着け、泉が愛らしき五月に流れ出づるときに。)

【註】 I. これは前文章が二個の主文章から成り、後文章が四個の副文章から出来てゐる。かく主文章を前文とするものを、下降する双對文章 (fallende Periode) と稱する。—配語法の異常なるところがあるが、それは韻律の関係から來たものである。

【註】 II. 六節以上の双對文章もあるにはあるが、こゝに擧げる必要もないから、省略する。

6. 最後に複雑複合文章の分類を、一覽表的に總括すると：
複雑複合文章。

I. 複合對結文章

- a) 三個又はそれ以上の主文から成るもの。
- b) 對結的に結ばれた一つ又は多くの文章が、既に複合文章なるもの。

II. 複合附結文章。

- A) 一個の主文に、複数の副文のついたもの。
 - a) いろいろの種類副文が、主文のいろいろな部分に關係するもの。
 - b) いろいろの種類副文が、主文全體に關係するもの。
 - c) 複数の副文が、主文中の同一成分に關するもの。
- B) 一個の主文に從屬する副文それ自らが、複合文章たるもの。
 - a) 副文が對結文章たるもの。
 - b) 副文が附結文章たるもの。

III. 双對文章。

- A. 對結的双對文章。
- B. 附結的双對文章。

第十 章

文 の 語 勢

1. 單語の各の綴りが、相異なる語勢 (Betonung [音]) を有する如く、文章の個々の成分も、その語勢を異にする。語勢は普通聲音を、より強く緊張する (anspannen, Anspannung [音]) 事によつて生ぜられる。これは通常、聲音を上げる (heben, Hebung [音]) ことと、自然に結びついて居るが、時には別々なこともある。

【註】 例へば *Kannst du mir das nachfühlen?* と云ふ疑問文に於て、文末の *nachfühlen* は、*nach* に強音を有し、*fühlen* に高音を持つてゐる；*nachfühlen*=摸感する、心中を思ひやる。

そこで二者を區別し、強弱に關するものを、聲音の強度 (Tonstärke [音]) と云ひ、高低に關するものを、聲音の高度 (Tonhöhe [音]) と云ふ。本章では、文に於ける聲調の強弱から初めて、高低に及ぼうと思ふ。

【註】 聲の強弱・高低は、耳に對えて初めて充分にわかるもので、抽象的に記述したからとて、必ずしも實効のあがるものではないから、こゝでは大體の輪廓の記述に止めて置かうと思ふ。

I. 聲音の強度 (Tonstärke)

2. 一般的に云へば、文章中に於て、(I) 表現せられる思想の理解 (Verständnis [音]) のために、最も重要な價值を有する部分か、(II) 或は話者が重要だと思惟する部分に、聲調の緊張を置くのであるが、前者は文法的・語學的 (grammatisch, sprachlich) の見地から極まり、後者は論辨上 (rednerisch, oratorisch) の關係から定まる。文法的・語學的のものは、より客觀的で、論辨

上のものは、より主觀的である。客觀的のものに就いては、法則を指摘しやすい。まづ文法的の關係からの語勢 (Die Betonung nach grammatischen Rücksichten) について述べよう。

[A] 文章が、主語と客語とより成れるときは、客語の方が、より強く調子づけ (stärker betont) られる。

【註】 こゝばかりでなく、すべて強度がきまつたり、高度がきまつたりするのには、單に器械的ではなく、さうなるべき必然的な心理的理由が存在するのである。例へば、こゝでは、客語は未知のもの、新しいもの、描述に對して重要なものを含む部分だからと云ふことに、強い調子づけの理由がある。しかし本章では、繁を避けて、心理方面の説明はやめる。

次に例をあげるが、文字を分けて印刷せるものに強い調子が存するのである。

Der Hund bellt. Der Hund ist wachsam.

Der Hund ist ein Haustier.

Der Tisch ist von Holz. Das Tal ist grün.

Ich bin der Meinung. (私はかう云ふ意見です。)

Er ist zum Verzweifeln. (それは言語道斷だ。)

[B] 客語が複合して出來て居るときには、不定法・過去分詞が、より強い調子を持つ。

Der Mond ist aufgegangen. Der Vater hat gerufen.

Der Tag wird vergehen.

Die Glocke wird geläutet [受働].

Der Vogel kann fliegen.

【註】 I. 文法上の主語が文頭に立つときには、眞の主語の方が、客語よりも強調される。

Es kommt der Lenz. (春が来る。)

Es ist ein Fehler gemacht worden. (過誤がなされた。)

【註】 II. 客語が不定代名詞であるときには、主語又は客語動詞が強調される。

Er [強] war es. Er war [強] es.

〔C〕 客語動詞に補足語又は副詞的規定があるときには、それが主強音 (Hauptton [W.]) を受ける。即ち客語動詞よりも、強調される。

Das Werk lobt den Meister. [四格補足語]

Die Königin sah dem Kampfe zu. [三格補足語]

Gedenke des Todes. [二格補足語]

Sprecht mit Gelassenheit. [副詞的規定] (落ち着いて話せ)

Die Großmutter wird vor Kummer sterben. [副詞的規定] (祖母は憂愁の爲に死ぬであらう。)

Doch der Segen kommt von oben. (同上)

(然し祝福は上から来る。)

〔D〕 補足語が二個ある時は、物をあらはす方が強調される。

Der Vater hat dem Sohne ein Buch gegeben.

Die Laster stehlen der Jugend die Kleider.

(悪徳は美德から衣服を盗む。)

【註】 再帰動詞にあつては、再帰代名詞は強調されない。Er freut sich.

〔E〕 二個またはそれ以上の副詞的規定があるときには、最後のものが、主強音を有する。

Er preßt sie heftig [副・規] in die Arme. [副・規]

(彼は彼女を熱烈に腕に抱いた。)

Kolumbus fuhr am 3. August 1492 [副・規] von Palos ab. [副・規]

Man muß jede Arbeit sorgfältig [副・規] und mit Bedacht [副・規] verrichten. (人はいづれの仕事も用意深く又熟考してなさねばならぬ。)

〔F〕 他の副詞的規定を、より細かく限定する副詞的規定は、それ自らが主強音を有する。

Er hat heute sehr fleißig gearbeitet.

In Afrika regnet es außerordentlich stark.

Unter dem Äquator (赤道) geht die Sonne täglich morgens um sechs Uhr auf.

【註】 第一の例では sehr が fleißig を、第二の例では außerordentlich (非常に) が heftig を規定してゐる。第三の例では morgens をもつと細しく規定して、正六時 (um 6 Uhr) として居る。一體『度』 (Grad [W.]) を示す副詞的規定は、つねに強調されると覺えて居てよい。Wenn ihr reich werden wollt, so denkt ebenso sehr auf das Sparen als auf das Gewinnen. (君たちが金持ちにならうと思ふのなら、儲けることと全く同じに儉約することも考へるがよい。)

〔G〕 並列された同資格の補足語、又は同資格の副詞的規定は、同一の調子を受ける。

Der Frühling schenkt Sonne und Leben der wiedererwachten Natur.

(春は再び目ざめた自然に歡喜と生命とを贈る。)

Kimon besiegte die Perser am Eurymedon zu Wasser und zu Lande.

(キメオンはオイリメドン(河)畔で、波斯人を水上でも、陸上でも打破つた。)

[H] 補足語と副詞的規定とが併存するときは、後者の方
主強音を持つ。

Setze das Buch auf den Tisch!
In allen Wipfeln (樹梢) spürest du kaum einen Hauch
Bedecke deinen Himmel, Zeus, mit Wolkendunst!
(ツァイス神よ、おんみの大空を霧を以て覆へかし!)

[I] 附加語については、その細則に亘つて云ふと、かなり
面倒であるから、その概則だけを述べて置かう。—まづ第一に
附加語は、それが附屬するものよりも、より強い調子を持つも
のである。

Treue Hand geht durchs Land.
(「正直が一番よろしい。」の義)
Ein guter Hirt läßt sein Leben für seine Schafe.
(良い牧羊者は自らの羊のために命をすてる)
Er fühlt sich ein ganzer Mann. (立派な男だと彼は自
分を感じてゐる。)
Der Hörcher an der Wand. (壁に耳をつけて聞く人。)
Die Beschwerden des Alters. (老齡の煩勞〔イタツキ〕)
Ein Bürger aus Berlin. Karl der Große.
Die Kunst zu schreiben ist alt.

【註】 但し先行二格には、主強音はなく、之に後續する名詞にある。

Das ist des Sängers Fluch (呪咀).
Wir bewundern der Ägypter Bauwerke.
(われらは埃及人たちの建築物を嘆美する。)

[J] 但し或名詞に附屬する常套的・慣例的の附加語は、強調
されないで、却つて名詞の方が強調される。—常套的とは「暗

い夜」「美しい春」「暑い夏」などの如きものである。

dunkle Nacht, grüne Blätter, die duftende (かほる)
Rose, ein funkelnder (かがやく) Stern. — guten Mor-
gen, lieber Freund.

【註】 物主代名詞、指示代名詞、數詞等は、普通は強調されない。

Die Woche hat sieben Tage.
Friede sei um diesen Grabstein her!
(平和は、この墓石の周りにあれ!)
Alle meine aufrichtigen Rat schläge (勸告)

[K] 固有名詞の前の種屬名詞、種屬名詞の前の稱號、及び
名詞の後の副詞は、いつも主強音を自らの上に持つて居ない
で、第一の場合には固有名詞、第二の場合には種屬名詞、第三
の場合には、名詞の方がこれを持つけれど、度量衡の名詞の後
の物質名詞その他は、主強音を持つのである。

Der Monat (種屬) Januar (固有) ist der erste Monat
im Jahre.
Wende dich an den Herrn Minister!
Siehst du den Mond dort?
Hole ein Pfund (度量衡の名詞) Öl (物質)!

[L] 一般に強調されるものは、(a) 感動詞、(b) 常に抜群
的又は、調的の意味を持つ副詞、(c) 反對又は對照の意味を示
す副詞又は接續詞、及 (d) 副詞 *io* (接續詞ではない) である。

a) Ach, es ist nicht der Rede wert!
(あゝそれは言ふに足りない; wert は二格を要求す
る。)

- b) Der Zufriedene (満足せる人) hat immer genug.
Ich werde es nie vergessen.
- c) Die Buchdruckerkunst (印刷術) war schon über hundert Jahre erfunden; dessenungeachtet erschien ein Buch noch als ein Heiliges (神聖なるもの).
Er besaß ein großes Vermögen (財産), trotzdem machte er Schulden (借金).
- d) Er starb so arm, daß der Staat die Kosten (費用) seiner Beerdigung (埋葬) tragen mußte.

3. 上掲のすべての規則は、然しながら或文章成分が他の文章成分と、—又はこれに附隨して考へられたるものと、—對照 (Gegenatz [M.]) をなす場合には、全く撤廢されて、その部分のみが強調される。即ち一般の規則では、主強音を持ち得ざる文章部分でも、この『對照』のために、主強音を持つこととなるのである。例へば普通は König Ka'rl であるが、Herzog Ka'rl と對比するときは Kö'nig Karl, Her'zog Karl となり、Friedrich Schi'ller も、Raspar Schiller (詩人の父の名) と對照するときは、Frie'drich Schiller, Ra'spar Schiller となるが如きである。

Hilf mir, aber störe (妨げる) mich nicht!
Nicht mein, sondern dein Wille geschehe!
Sole ein Pfund Öl, nicht einen Zentner.
(百磅ではなく、一磅の油を持って来い。)
Der Teil Berlins diesseit der Spree (河名) enthält
zehn, der jenfeit auch zehn Stadtteile (區)。

元來強調さるべき部分が、對照される部分となるときは、強調の強増 (Schärfung [S.]) が起る。

Hamlet war ein Mann des Denkens, aber nicht der Tat
(ハムレットは思索の人であるが、然し行爲の人ではなかつた; Tat が Schärfung をうける。)
Wir bewundern die Bauwerke der Ägypter (埃及人),
nicht aber die der Perser (波斯人)。

いくつもの對照が、文中にあるときは、終りの對照が、最も強い聲調を有する。

Früher fuhr man auf der Chaussee von Berlin nach
Potsdam in drei Stunden, jetzt auf der Eisenbahn in
derißig Minuten.
(Chaussee は schosse と發音し、國道・大道・舗道の義;
Potsdam は Berlin 近郊の地名。)

4. 『對照』のための強調といふ事を説いて來ると、問題はやがて、論辨上の強調 (rednerische Betonung) と境を接して來る。或はむしろ、對照のための強調を、論辨上の強調の一階梯にすぎぬと見てよいかも知れぬ。兎に角後者では、意味上、話者が重きを置かうとするところを、文法上の規則を顧みないで、強調するのである。

„Du bist der Mann“, sprach Nathan (人名) zu David.
„Was ich als Ritter gepflegt und getan, nicht will ichs
als Kaiser entbehren.
(私が騎士としてやつて來たことを、私は皇帝として缺かうと思はぬ。)

【註】 第二の例では、これを對照と解することも出来る。

要するに、此種の強調は、全く主觀的だから、之を拘束すべき外的規則はない。

II. 聲音の高度 (Tonhöhe)

5. 文章部分は、聲音のいろいろな高度でもつて述べられる。即ち或個所に於ては、聲音は普通の高度よりも高く、他の場所に於ては普通の高さよりも低い。これは前述のとほり、強度と一致することも屢あるが、さうでない時もある。

文の調子のかゝる高低を、文の旋律 (Satzmelodie [S.]) と稱する。文の旋律は、その文章のあらはす意味により、一副文章ならば、その占むる位置に依つて決定される。然し概して之を云へば、それ自身で完結せる文章は、文末に於て聲音が低下し、完結せざるもの、或期待を以て言ひ終られたものは、文末に於て調子が揚がるのが原則である。

これから個々の場合に移る。

I. 單文章に於て。

6. (a) 主張文章 (Behauptungssatz [M.]) の文末では、聲音は落ちる。

Es gingen drei Jäger wohl auf die Wirtshaus (∖).

【註】 Wirtshaus=狙撃獵; auf die Jagd gehen=獵に出る; (∖) は調子の高まること (Hebung [S.]), (∩) は調子の下がること (Senkung [S.]), (～) は調子が前二者の中間で浮泛すること (schwelen, Schwebung [S.]) を示す。

(b) 感嘆文章 (Ausrufesatz [M.]), 要望文章 (Begehungsatz [M.]); 命令も含むに於ては、文末は浮泛的 (schwelen) である。

Wie groß ist des Allmächtigen Güte! (～)

(全能の神の親切はいかに大なるぞ!)

Ich wär' ich zu Haus! (～)

(zu Haus(e) sein=在宅する。)

【註】 本文は Bippert 及 Günther に依つたのであるが、Bebel には、この種の文章では、『一般に聲 (Stimme) の低下 (Senkung) があらはれる、但し主張文章の文末に於けるやうに、完全なる落着き (höfliche Ruhe) には達しない、これは内的興奮の許さざるところだ』とある。即ち低下はするが、主張文章ほどひどくはないのである。

c) 疑問文章に二種あることは、既に述べたが、文末の調子は、疑問文章の種類に依つて異なるのである。

i) 疑問詞の存するもの—即ち „Wortfrage“ 又は „Ergänzungsfage“ と稱せらるもの—は、文末に於て聲音を落す。

Was stimmt ihr (∖)?

Wo ist unser Lehrer (∖)?

ii) 疑問詞なき疑問文—即ち „Satzfrage“ 又は „Entscheidungsfrage“ と稱するもの—にあつては、聲音は文末に於てあがる。

Hab' ich Pflichten gegen England (∕)?

Sind Sie vorbereitet (∕)?

iii) 上叙二種の疑問文のほか、二種疑問文—所謂 „Doppelfrage“ と稱するものがある。この種のものにあつては、聲音は第一の疑問の終末に於て上り、第二の疑問の終りに至つて落ちる。

Bist du es (∕), oder bist du es nicht (∖)?

Wer hat mir diesen Dienst erwiesen, August (∕) oder du (∖)? (誰が私にこの盡力をして呉れたのか、アウグストか、おんみか?)

II. 複合文章に於て。

7. 對結文章にあつては、個々の主文の終りに於て、聲音は浮泛的であるが、最後になつて低下する。

Die Menge kann tüchtige Menschen nicht entbehren (~),
und die Tüchtigen sind ihnen jederzeit zur Last (∨).
(群衆はすぐれたる人々を缺くことは出来ない、そして
すぐれたる人々は、いつも彼等には重荷である; einem
zur Last sein = 或人に重荷である; 或人を煩はす。)

8. 附結文章に於ては、前述のとほり、副文章の地位によつて異なる。

i) 副文が前文章であるときは、主文の終りは上り、副文の終りが下る。

Wer nicht hört (∨), muß fühlen (∨).
(云ふことを聞かぬ奴は、痛い目に會はねばならぬ。)
Wenn ihr fertig seid (∨), ruft er mich (∨).

iii) 副文が後文章であるときは、主文の終りにて上り、副文の終りで下る。

Ich gehorche (∨), weil ich muß (∨).
Er ruft mich (∨), wenn ihr fertig seid (∨).

【註】此説明は Sütterlin によつたのであるが、Weigel では主文の終りは、schwabend だとしてある。

Ein steiniger Acker treibt nur kümmerliche Blüte (~), wäh-
rend ein guter über und über blühet (∨).
(石多き畑はたゞ貧弱なる花を生ずるに過ぎない、よき畑は非常
によく花咲くのに。)

iii) 副文が間文章なる場合。

副文に先行する主文の終末では、聲音は浮泛的であり、副文の終りも同様、主文は再び、曩に中斷されたと同じ程度の調子で初まり、文末に至つて落ちる。

Das Haus (~), wo Zwietracht (不和) herrscht (~),
zerfällt (つぶれる) (∨).
Der Ruhm (~), nach dem wir trachten (~), den wir un-
sterblich achten (~), ist nur ein falscher Wahn (∨).
(われらがそれを得んと努力し、またそれを不死のもの
として尊敬するところの名聲は、虚偽なる妄想にすぎ
ない。)

【註】Weigel には、此場合各副文の終りは高いとある。

Das Haus (~), wo Zwietracht herrscht (∨), zerfällt (∨).

9. 直接説話又は間接説話に於て、中間に挿入さるる主文は、調子をより早く、より低くして読み、文末に於て聲音を上げない。括弧に入れられた文章も同じである。

„Niemand“, sagte Ealon zu Ströfus (此部分はより早くよ
り低く読み、文末は上らない), „ist vor seinem Tode
glücklich zu preisen.“
Er wisse, beschwor er (→速・低), nichts von der Sache.

10. 最後に述べなければならぬのは、双對文章である。多くの並列的副文が、前文章となつて、主文の前に立つときは、前文章の一節毎に、文末の聲音は上り、後文章の直前に至つて、最高頂に達し、それから漸次に低下して、文末では、完全なる平靜に達する。

Wem kein Mensch auf Erden etwas zu verdanken hat (✓):
wer stirbt, ohne auch nur eine Spur wohlthätiger Wirksamkeit unter seinen Brüdern zurücklassen (より高く上る):
der hat doch wahrlich umsonst gelebt (×).

(地上で何人もその人のおかげを蒙らぬ人は、有益なる活動の痕跡すらその同胞の間に残さずに死ぬ人は、實際無益に生きたものだ。)

【注】より複雑した双對文章でも、前述の諸規則をいろいろに適用することによつて、高低を決定することが出来るけれど、こゝでは煩を厭ふて省いて置かう。

附 録

文章論一覽表

文庫論 (Satzlehre [F.], Syntax [F.])

[I] 文章成分 (Bestandteile der Sätze)

(A) 主成分 (Hauptbestandteil [M.])

i) 主 (Subjekt [M.], Satzgegenstand [M.])

ii) 客語 (Prädikat [M.], Sagensage [F.])

(B) 副成分 (Nebenbestandteil [M.])

i) 補足語 (Objekt [M.], Ergänzung [F.])

ii) 附加語 (Attribut [M.], Beifügung [F.])

iii) 副詞的規定 (Adverbiale [M.], Adverbia bestimmung [F.])

[II] 文章の種類 (Arten des Satzes)

(A) 構造 (Bau [M.], Struktur [F.]) によりて:

i) 單文章 (der einfache Satz)

(a) 單一 (純) 單文章 (der nackte einfache Satz)

(b) 修飾單文章 (der bekleidete einfache Satz)

ii) 複合文章 (der zusammengesetzte Satz)

(a) 單純複合文章 (der einfach zusammengesetzte Satz)

1. 對結文章 (Satzverbindung [F.])

2. 附結文章 (Satzgefüge [M.])

(b) 複雜複合文章 (der mehrfach zusammengesetzte Satz)

1. 複合對結文章 (die mehrfach Satzverbindung)

2. 複合附結文章 (das mehrfache Satzgefüge)

3. 雙對文章 (die Periode)

(B) 内容 (Inhalt [M.]) から見て:

i) 主張文章 (Behauptungssatz [M.])

- ii) 疑問文章 (Fragesatz [M.])
- iii) 要領文章 (Begehrungsatz [M.])
- iv) 感動文章 (Ausruffsatz [M.])

[III] 附結文章の成分 (Bestandteile eines Satzgefüges)

- i) 主文章 (Hauptsatz [M.])
- ii) 副文章 (Nebensatz [M.])

[IV] 副文章の種類 (Arten des Nebensatzes)

(A) 内容 (Inhalt [R.]) から見て:

- i) 主語文章 (Subjektatz [M.])
- ii) 客語文章 (Prädikatatz [M.])
- iii) 補足語文章 (Objektatz [M.])
- iv) 附加語文章 (Attributatz [M.])
- v) 状況語文章 (Adverbialsatz [M.])

(B) 位置 (Stellung [S.]) から見て:

- i) 前文章 (Vordersatz [M.])
- ii) 後文章 (Nachsatz [M.])
- iii) 間文章 (Zwischensatz [M.])

(C) 形式 (Form [S.]) から見て:

- i) 関係文章 (Relativsatz [M.])
- ii) 接續文章 (Konjunktionalatz [M.])

【註】接續詞を以て連結するもの。

- iii) 間接疑問文章 (indirekter Nebensatz)

[V] 状況語文章の種類 (Arten des Adverbialsatzes)

1. 時の状況語文章 (Adverbialsatz der Zeit, Temporalatz [M.])

2. 處の状況語文章 (Adverbialsatz des Ortes, Lokalatz [M.])
3. 方法の状況語文章 (Adverbialsatz der Weise, Modalatz [M.])
 - a) 狭義の方法文章 (Modalsatz im engeren Sinne)
 - b) 比較文章 (Vergleichungssatz [M.])
 - c) 結果文章 (Folgesatz [M.])
4. 原因の状況語文章 (Adverbialsatz des Grundes, Kausalatz)
 - a) 狭義の原因文章 (Kausalsatz im engeren Sinne)
 - b) 目的文章 (Absichtatz [M.])
 - c) 条件文章 (Konditionalatz [M.])
 - d) 譲容文章 (Konzessivsatz [M.])

短縮 (Verkürzung [S.])

收縮 (Zusammenziehung [S.])

省略 (Ellipse [S.])

[VI] 配語法 (Wortfolge [S.], Wortstellung [S.])

- i) 正置法 (gerade Wortfolge)
- ii) 倒置法 (Inversion [S.])
- iii) 貶置法 (Transposition [S.])

7378

續 獨逸文法講話

昭和8年10月1日第1版印刷
昭和8年10月5日第1版發行
昭和22年10月20日第7版發行

定價金百圓

著 者

佐久間政一

發行者

大井敏夫
東京都文京區森川町109

印刷者

佐藤保太郎
東京都中央區銀座3ノ4

發行所

東京都文京區森川町東大正門前
郁文堂書店
(電話小石川(85)2802)

文祥堂印刷株式會社

共文堂製本

獨逸語參考書

獨逸文法講話	佐久間政一著	100.00
續獨逸文法講話	佐久間政一著	100.00
標準獨逸單語六千	内田 貢編	50.00
獨逸語變化表と單語集	内田 貢編	25.00

獨和對譯叢書

若きヴェルテルの悩み	ゲーテ 高橋健二譯註	80.00
ゲーテとの談話	エツケルマン 片山正雄譯註	120.00
ゲーテ・伊太利紀行	吹田順助譯註	80.00
ゲーテ小曲集	三浦吉兵衛譯註	50.00

獨文翻譯刻版

註解 附 實踐 詩	フアウスト 第一部 ブラーケへの旅路の モーツアルト	ゲーテ 青木昌吉註釋 メーケケ 石川鍊次註釋 カント ゲーテ	100.00 40.00 55.00 45.00
		書留送料各册	10.00

上記書目は常備する様努めて居りますが、一時品切れとなる
虞れもあり、種々變動もありますので、直接御注文の際は一
應豫め御照會願ひます。

昭和22年10月

東京都文京區森川町東大正門前

郁文堂書店

電話小石川(85)2802

振替口座東京 14981

845-Sa45-3ウ



1200500753754

845

45

3

終